

21A22

天因西村時彦編

單騎遠征錄

發兌 金川書店



44
267





文

月
月
治
世
年

戒勞

戒勞

能久

能久

能久

而神

凡例五則

一 去歲六月陸軍中佐福島君の單騎孤鞭獨露清三國を跋涉して浦潮斯徳に出るや予之を途に迎へ相見て謹甚し乃ち舟を同うして歸朝し後ち同じく菡根の温泉に浴す日夕追隨する者數旬君に單騎遠征の壯圖を説かんとを請ふ君子か爲に道途の見聞を説くこと甚だ詳なり予隨て聽けは隨て録し名けて單騎遠征録と曰ふ次を逐ひて大坂朝日新聞に掲ぐ總て百二十回三百三十餘項哀然卷を成る今其散逸せんとを恐れて集録一冊と爲し重刊して世に公にし以て子弟觀感興起の資に供すと云爾

一 此の編中佐の口に出て、而して予の耳に入り予の手に成る世の展轉傳聞謬を傳へ虚を吠ゆるの類に非ず且つ

一回成る毎に必ず中佐の閱を経て而して印刷に附す殆んこ中佐橐底の紀行を讀むと異なるなし但間々挿むに賛揚の語を以す皆予の私意に出る者或は中佐の徳を傷けんことを恐る中佐固より冒功貪名の心なし而して其功其名天下に揚る區々予輩の賛揚を須ぬす而して非常の事を聞きて覺へず嘆美の聲を發する者は人の常情なり請ふ之を諒せよ

一 中佐の遠征實に觀光審勢に在り其見聞する所軍機に屬する者多し外間に洩るゝを許さず是を以て中佐固より其口を噤す而して予も亦問はず夫れ蹄痕の印する所歐亞三大國東西四千里日を経る者五百餘日見聞豈測る可けんや而して此の編録する所十の一に過ぎざる者は洵

に此を以て也然れども事の軍機に屬せざる者細大遺さず以て輯録を務む希くは世人の喝を醫するに足らん歟
 一 一事一項目を以て編せす務めて讀者の記憶に便にす微意の存する所往々圈點を附し記事の要は頭上之を註す草々看過する勿れ

一 中佐の遠征實に非常の壯圖也而して予の文拙劣之と副はす慚恨極めて深し請ふ讀者筆を以て事を棄つる勿んば則幸也

明治廿七年五月

編者識

單騎遠征錄

目錄

(一) (四) (七) (一〇) (三) (六) (九) (三) (五) (元)

宿 酷 蒙 集 一 亡 下 老 積 曠
熱 古 觀 奇 國 士 人 雪 原
大 馬 歡 少 山 婚 感 埋 無
寒 呼 年 河 禮 奮 途 際
志

(二) (五) (八) (二) (四) (七) (一〇) (三) (六) (元)

里 馬 騎 沿 馬 波 夜 兵 小 土
程 行 道 躍 蘭 沿 備 官 沃
日 在 光 折 革 會 疎 重 民
數 冬 景 齒 革 會 疎 重 貧

(三) (六) (九) (三) (五) (八) (一) (三) (四) (七) (一〇)

舟 三 獨 獨 猶 魯 十 深 駐 盜
馬 馬 都 露 太 領 三 夜 馬 賊
從 皆 發 國 人 十 日 徬 露 遁
便 健 程 境 人 洲 橋 都 都 走

(〇) (九七) (九四) (九一) (八八) (八五) (八二) (七九) (七六) (七三) (七〇) (六七)

再馬高稍陷生入釀天故入馬
買首原慰干死悉酒涯國烏輪
乘向總旅大唯比大王遇息山船
馬南督情澤命利王遇息山船

(〇) (九八) (九五) (九二) (八九) (八六) (八三) (八〇) (七七) (七四) (七一) (六八)

幕道兵江疫途朱觀美烏山中入
中小路備山氣上緬製姬拉中觀比
憩地形數勝洗藥氛所送嶺劇摩

(〇) (九) (九六) (九三) (九〇) (八七) (八四) (八一) (七八) (七五) (七二) (六九)

深哥幼阿不誤毒郊酒雷山一
夜薩年摩重擬氛送德雨多語
逸克學斯約短掩太多甚大至解
馬村校科諾銃野多大大至蟲願

(六) (六) (五八) (五五) (五二) (四九) (四六) (四三) (四〇) (三七) (三四) (三一)

夜犒駐道泛臨困鼓馬人農諾
行以兵路舟訣頓舞始跡家哥
太酒寥々甚遡剪頓道將踏太朴羅
便肉々大流鬣途士土稀直都

(六) (六) (五九) (五六) (五三) (五〇) (四七) (四四) (四一) (三八) (三五) (三二)

永不堪次野賢暑感入流臭逆春
晝如煩加森有牧氣慨莫水蟲旅風
年擾市色官至山科河攻來厚始
至

(六) (六) (六) (五七) (五四) (五一) (四八) (四五) (四二) (三九) (三六) (三三)

年畫加露寒一小與氣對避萬文
凶宿森人村小凱候岸逅犬士
秣夜韃好有都會凱劇有相吠惜
乏行鞞茶春會訣變酒遇虛別

(三) 再與馬訣
(〇六) 風物荒涼
(〇九) 徵逐連日
(二) 細流清冽
(一五) 邊備周密
(一八) 三買乘馬
(二) 以蜜代糖
(二四) 始望山雪
(二七) 馬及導者
(三〇) 羊肉松實
(三三) 又宿幕營
(三六) 既入蒙古

(四) 求藥不得
(〇七) 駐馬三日
(一〇) 防寒衣物
(二三) 露國齋日
(一六) 奇
(一九) 馬首漸仰
(三) 田家光景
(二五) 小富士山
(二八) 娘子軍
(三) 訪古成營
(三四) 大聲逐狼
(三七) 台吉延見

(五) 二馬不良
(〇八) 訪
(一) 銀片滿囊
(二) 漸有高低
(一七) 命名祝日
(三〇) 山深且險
(三三) 酋長來迎
(二六) 亞爾泰驛
(二九) 投宿幕營
(三三) 路遇大雪
(三五) 山巔題名
(三八) 蒙古懷古

(三九) 唱咒拜日
(四二) 官吏無狀
(四五) 土人移幕
(四八) 科布多河
(五) 暴風大作
(五四) 科布多城
(五七) 喀喇烏斯湖
(六〇) 漠外隊商
(六三) 將軍駐節
(六六) 更理旅裝
(六九) 鐵中錚々
(七三) 破水飲馬

(四〇) 以珠代肉
(四三) 蒙古貪慾
(四六) 露商幕內
(四九) 蒙古兵制
(五二) 入科布多
(五五) 發科布多
(五八) 蒙古風俗
(六) 困于砂磧
(六四) 氣候可人
(六七) 侮慢交至
(七〇) 馬斃于途
(七三) 二大水域

(四) 拜鎮達巴
(四) 始遇行人
(四七) 始見樹木
(五〇) 野見異牛
(五三) 沿革一班
(五六) 鞏固雄門
(五九) 病者乞藥
(六二) 入定邊城
(六五) 賣買不好
(六八) 喇麻勢焰
(七) 犬捕穴鼠
(七四) 腸胃疼痛

(七五) 途遇喇麻
 (七六) 鼠輩橫暴
 (七八) 僧來請施
 (七九) 佛院蓄娼
 (八一) 一喝辟易
 (八二) 群蛙評天
 (八三) 牝鷄司晨
 (八四) 始見胡樂
 (八五) 便秘太苦
 (八六) 遙表祝意
 (八七) 風雪滿地
 (八八) 烏知雌雄
 (八九) 恐慌禳災
 (九〇) 劍影膽寒
 (九一) 不能疾馳
 (九二) 稍解世情
 (九三) 喇麻來診
 (九四) 天象變幻
 (九五) 一喝出幕
 (九六) 土人驚喜
 (九七) 霍然如洗
 (九八) 庫倫風色
 (九九) 庫倫兵制
 (一〇〇) 庫倫商況
 (一〇一) 庫倫露館
 (一〇二) 駐馬庫倫
 (一〇三) 北走八日
 (一〇四) 蒙古餘論
 (一〇五) 入恰克他
 (一〇六) 恰克他
 (一〇七) 貿易街道
 (一〇八) 始達湖上
 (一〇九) 氣候之變
 (一一〇) 湖上來往

六

(二) 路上設欄
 (三) 入義爾克斯科
 (四) 駐馬觀光
 (五) 今昔之感
 (六) 復出湖南
 (七) 歲云莫矣
 (八) 烏府光景
 (九) 寒威漸甚
 (一〇) 踰嶺向東
 (一一) 遙賀新正
 (一二) 知多清塵
 (一三) 遙拜寵光
 (一四) 知他風物
 (一五) 漸不怕寒
 (一六) 尼爾丁斯科
 (一七) 豪華驚目
 (一八) 天末雁聲
 (一九) 斯多勒丁斯科
 (二〇) 冰上蹄痕
 (二一) 寒中人馬
 (二二) 村家招飲
 (二三) 老兵出迎
 (二四) 七難所
 (二五) 水上落馬
 (二六) 決死幸免
 (二七) 裏創上馬
 (二八) 阿爾克訥河
 (二九) 黑龍江上
 (三〇) 清曆元旦
 (三一) 漠河梟首
 (三二) 寒村光景
 (三三) 雅克薩城
 (三四) 頭創漸癒
 (三五) 右清左露
 (三六) 憤驚客夢

七

(二四七) 又清又露
 (二五〇) 黑河紀事
 (二五三) 愛輝城中
 (二五六) 錢秣車役
 (二五九) 小興安嶺
 (二六二) 烟毒可懼
 (二六五) 入齊城門
 (二六八) 南行七日
 (二七一) 渡松花江
 (二七四) 沼澤沒跡
 (二七七) 最北邊門
 (二八〇) 病后遇雨
 (二四八) 漸南漸暖
 (二五一) 駐馬十日
 (二五四) 電報局
 (二五七) 黑龍江站
 (二六〇) 入墨爾根
 (二六三) 春風漸動
 (二六六) 齊々哈爾
 (二六九) 以草代薪
 (二七二) 不准帶銃
 (二七五) 瘴氣冒人
 (二七八) 遂罹熱病
 (二八一) 入吉林城
 (二四九) 黑河歡迎
 (二五二) 入愛輝城
 (二五五) 愛輝間話
 (二五八) 庫木爾站
 (二六一) 墨爾根城
 (二六四) 駐防八處
 (二六七) 白日欺人
 (二七〇) 全省人口
 (二七三) 新城一宿
 (二七六) 金鼓騷然
 (二七九) 病中紀事
 (二八二) 吉林城中

(二八三) 吉林將軍
 (二八六) 發吉林城
 (二八九) 盜賊橫行
 (二九二) 始食青菜
 (二九五) 寧古塔城
 (二九八) 又踰二嶺
 (三〇一) 入琿春城
 (三〇四) 琿春城中
 (三〇七) 歸心始動
 (三一〇) 舟路歸朝
 (二八四) 觀施療院
 (二八七) 村家烟話
 (二九〇) 意氣松站
 (二九三) 白日劫掠
 (二九六) 待以賓禮
 (二九九) 一卒誰何
 (三〇二) 訪副都統
 (三〇五) 滿州雜話
 (三〇八) 征途樂事
 (三一) 入京拜闕
 (二八五) 將軍贈錢
 (二八八) 驛站荒涼
 (二九一) 鄂摩和站
 (二九四) 入寧古塔
 (二九七) 踰老松嶺
 (三〇〇) 圖們江上
 (三〇三) 市人大驚
 (三〇六) 四踰國境
 (三〇九) 天涯歡迎
 (三一) 天恩優渥

附 錄

歡 迎 記

歸 棧 日 記

+

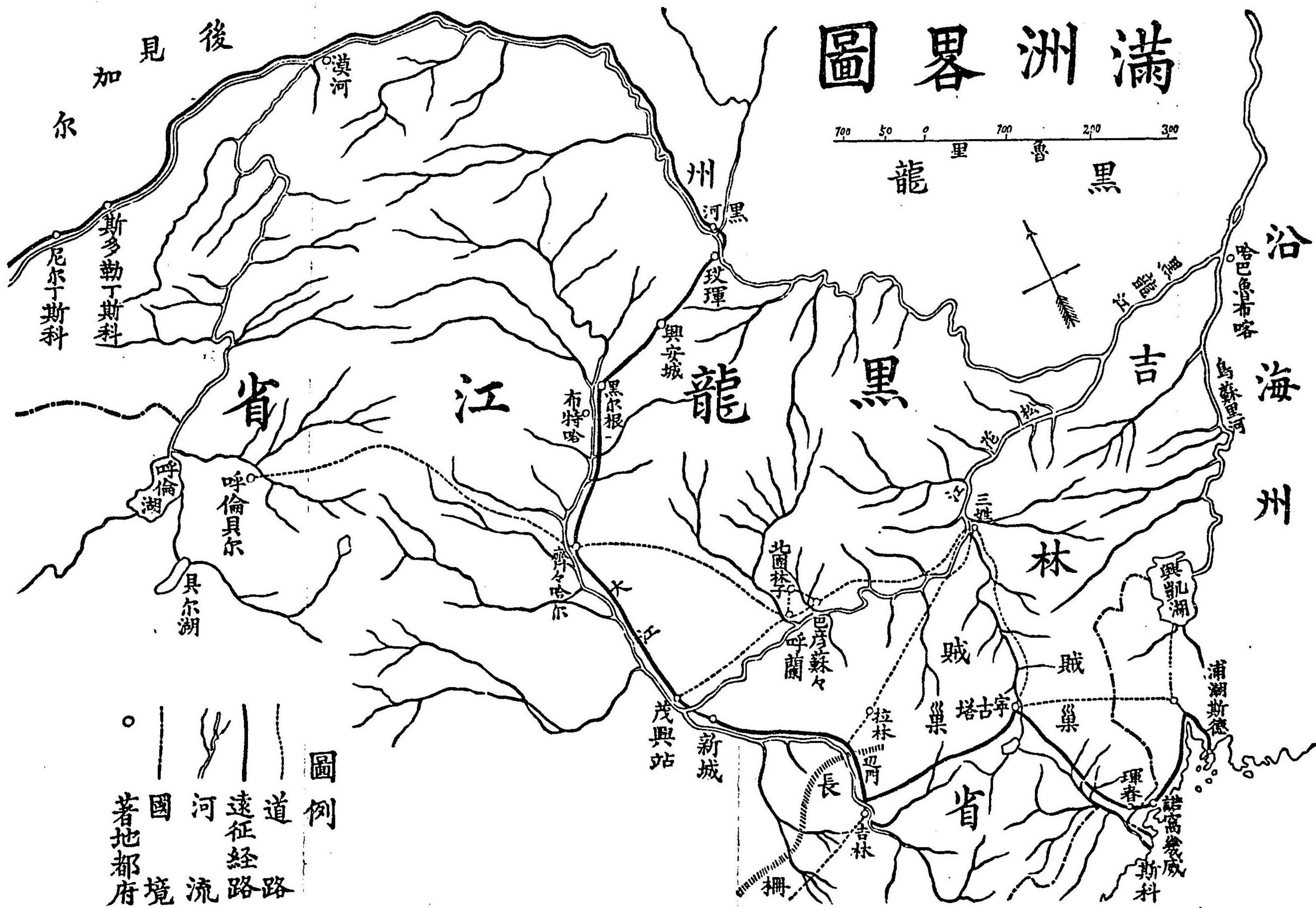
目

錄 終

拜啓益々御清康奉大賀候陳ハ單騎遠征録
不日御公行之趣些々タル旅行貴筆ニ因テ
非常之光彩ヲ放テ候段奉萬謝候小生儀目
下湯本福住ニアリ轉夕光陰之速ナルニ驚
キ去年ノ今日ハ寧古塔琿春之間ニ在テ遙
ニ朝鮮ノ山河ヲ望ミタル時ナリ西比利ノ
林中不圖貴兄ニ歡迎セラレ始テ故國之消
息ヲ承候愈快ハ數日ノ内ナリキ又明年ノ
此頃杯ハ地圖ヲ披テ種々ノ夢想ヲ劃キ居
候折柄貴書ニ接シテ更ニ今昔之感ニ堪ヘ

滿洲畧圖

700 50 0 700 200 300



又鏡口ニ差タル旗章驛舎ニ開力レタル罐
詰ノ事等歷々腦中ニ映シ來候書餘御遠察
被成下度又御尋之紀念兒モ彌々來ル六月
歸朝之紀念月ヲ以テ將ニ第二十六世紀之
天地ヲ見ントス其内御報可申上候御令閨
へ可然御傳聲被成下度時下折角御自愛奉
祈候勿々敬具

五月二十九日

西村時彦殿

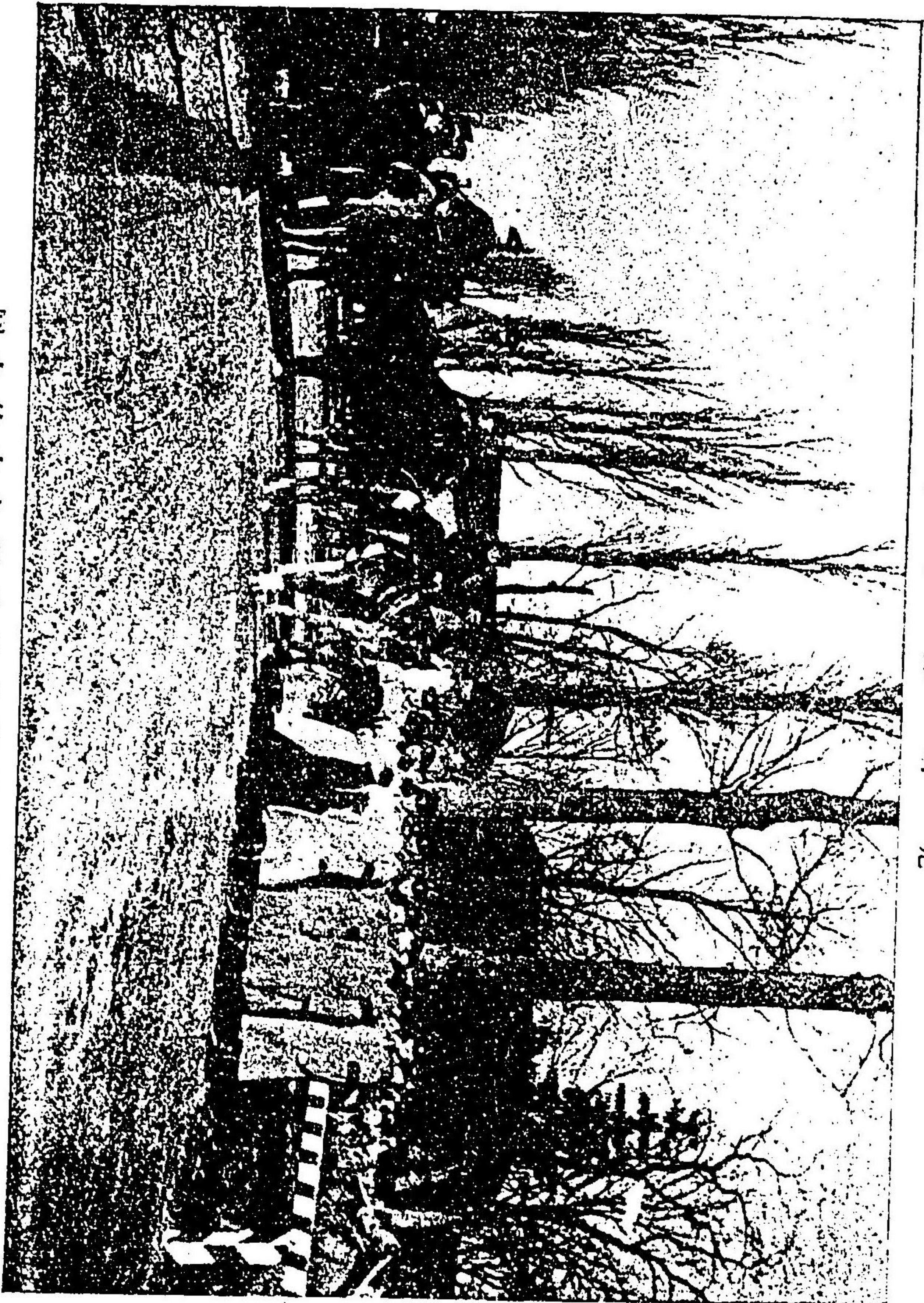
侍史

安正拜



里蘇烏 安 興 泰 爾 亞

外 山 諾 斯 克

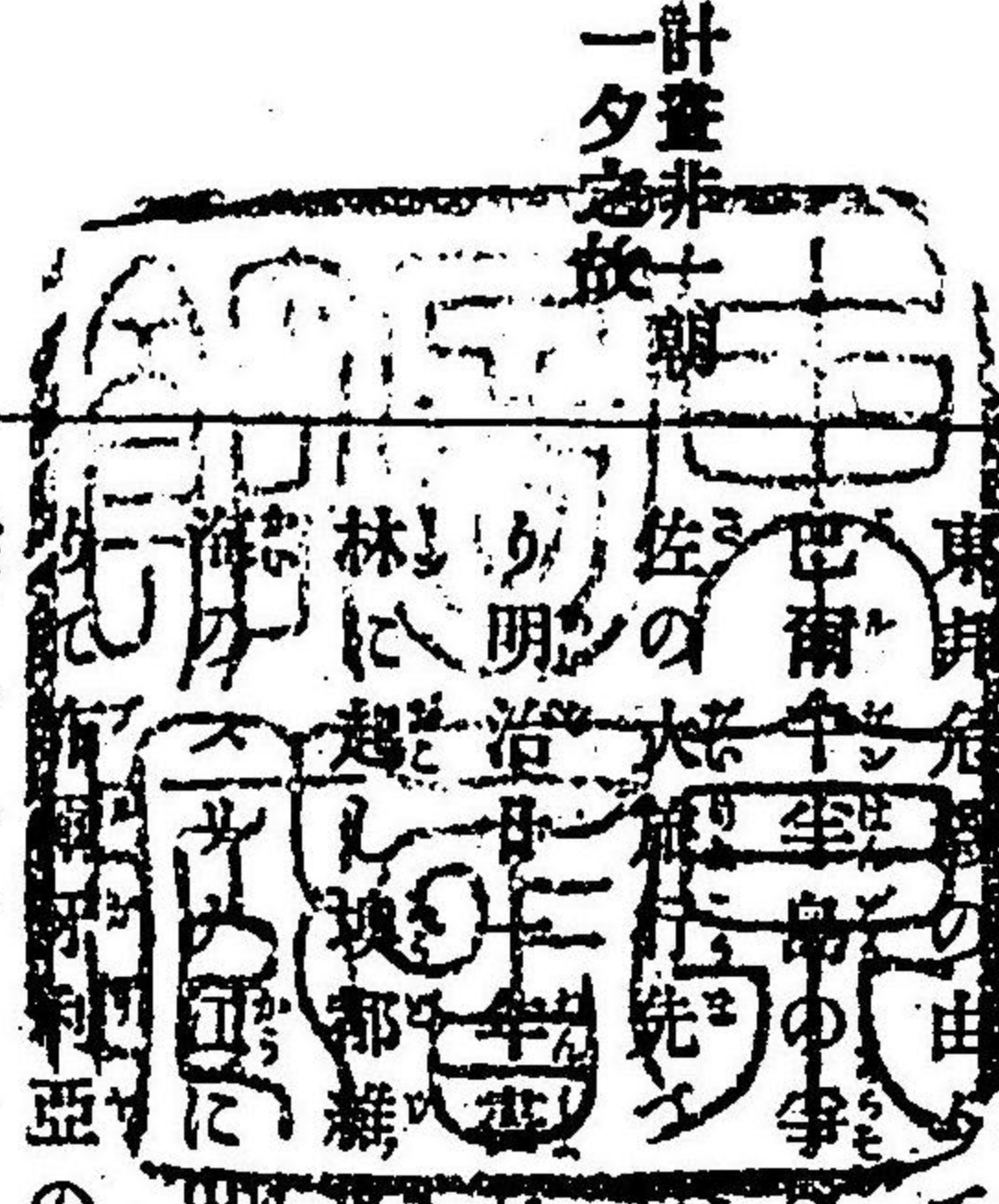


圖之佐中島福送校將隊聯四第兵獵

單騎遠征錄

宿志

陸軍歩兵中佐福島安正校閲
天囚西村時彥編述



一計
夕晝
非
故

て來る所歐洲列國の大勢如何に在り列國大勢の變移する所實に
巴爾干半島の争は則東邦危機の伏する所なり是れ福島中
佐の明治二十年十月程を獨都伯
林に起り埃都海地納を経てブダペストに至り舟を買うてダニユー
ブ川を下り黒海を渡りマルマチャの沿岸を梯航しヒューメを訪ひグラ
ツを過ぎ再び途を維

再び布爾利亞のソフイヤを経てセルビヤのベルグラッドに入り更に
土領のサロニカより船を買うて希臘の亞典府に涉りパトラスより復た舟に
乗じて埃領カタロを過ぎモンテネグロのセラニエを観、歸りてカタロより
海を渡り

也納に取て獨都伯林に歸りしは實に翌年三月なりき既にバルガン半島の歐洲
各強國に於ける危機を見つ更に東邦要地を歴遊して以て兵勢地形と情俗の渾濁
とを察し以て他日に資する所あらんと欲す是れ隨を得て蜀を望むの類に非ず實
に龍を畫きて睛を點するが如きのみ是に於てか退きて其行程を査し心算稍熟す
其初志は獨都伯林より土國の君士坦丁堡に航し舟路埃及の該羅に入り轉じて
土領アレポーに至りユーフラテス河を下りて波斯灣頭に出で北轉してカルム河
溪を溯り波斯の首都德黑蘭に遊び東してメシドを過ぎ阿富汗のヘラッドに入り
北轉して露領中央亞細亞に出でボハラ、サマルカンドを経て消領漸疆のカシユ
ガル及び伊犁の惠遠城を訪ひ再び露領に入りて塞米巴拉丁斯克に至り外蒙古を
跋渉して科布多より庫倫を経て三たび露領恰克圖に入り悉比利大陸の野を踏破
して黑龍江溪を下り烏港に出で更に西して滿洲に入り環春寧古塔吉林等諸城を
經て北京に出で天津より舟を買うて歸朝せんとするに在り是より先き嘗て北京
に遊び三たび長城を越ぬ漢南内蒙古に入り南の方清國南京を訪ひ英領香港を、
新嘉坡を過ぎ緬甸印度の各地に遊び西北は河富汗の國疆を窮め南はコモリン角
より錫蘭島の内部に至りしことあるをもて此に至て殆んど盡く東亞の要地を觀

旅行者事業
之資也

て其の危機の相關する所を知るを得べし翌廿四年一月一日書を上りて之を請ふ
且曰く請ふ翌年一月を以て程に上らんと茲歳の秋命あり冠役滿期の後獨都伯林
より露都聖彼得堡を過て悉比利に入り阿摩斯克を経て塞米巴拉丁斯克に至り遂
に其請ふ所の各地を歴遊して而して歸朝せしむ而して餘す所猶埃及、波斯、河
富汗、小亞細亞及中亞細亞の各地あり故に此旅行の宿志の半を達するに過ぎず
中佐猶春秋に富み意氣甚壯なり豈之を以て自ら足れりと爲んや他日暇あらば復
鵬翼を西天萬里の外に張らんことを期して待つべし中佐曰く旅行は事業の資なり
漫漫として遊び施々として歸る假令地球を周遊するも之を事業に顯はさずん
ば亦何の益か之あらんと以て其抱負の大なるを知るべし

里程日數

中佐の請ふ所其半を許さる乃ち獨都伯林より露國に入り蒙古悉比利を経て烏港
に至り轉じて滿洲に入り北京を過ぎて天津に出で海を渡りて歸朝せんと欲し孤
鞭颯然山河を跋渉し行きて知他に至るや官命じて烏港より歸朝せしむ中佐乃ち
黑河露名ブラゴウエシチエンスク今奮稱に従ふより路を轉じて消領滿洲に入り
玫瑰吉林諸城を歴訪して環春の國境を越ぬ再び露領悉比利を踏み遂に烏港に達

行程大約三
千五百里

四
す其行程大約一萬四千吉羅凡を現三千五百里にして其伯林を出でしは明治廿五年二月十一日又在り實に廿六年六月十二日を以て烏港に着す其間十七閱月四百八十有八日を費して此に大陸騎行の目的を達するを得たりき世或は其支那旅行を果さざりしを憾む然れども蹄痕既に蒙古滿洲の野に印したり且つ途を取る初志の如くなれば滿洲を経て北京に至るを得べしといへども只吉林一省を観るに過ぎず此行は黒河より琿瑯齊々哈爾を過ぎ黒龍江省を横断して要衝を目撃するを得ければ之を初志に比するに却て利益多かりしと云ふ北京の如きは中佐曾遊の地遠く長城を越えて漠南蒙古をさへ窮めしことあり未だ必しも再遊を要せず去れば滿洲の探検復た恨事なしと謂ふべし

舟馬從便

舟車奔馳。

世多く中佐の旅行を聞きて重を馬に置き好奇冒險の舉と爲すもの、如し中佐曰く舟を呼び車を買ひ各其便に従ふも亦何の妨かあらん半島の巡遊の如きは實に汽車汽船の便に頼りき但舟車の通ずる所の沿路市村は生計皆裕にして一目以て其國情を推測し難し且つ舟車の奔馳は觀察に便ならず善く風を訪ひ光を観るものと雖も往々盲目を免れず馬は則一日能く行く儘に我十里山に登り水

觀察不便。
馬是所以取。

を涉り首を平野に回らし鞭を幽溪に留め寒村風を訪ひ荒驛俗を察し地形の險夷兵勢の備否躬自ら蹈んで而して目親しく睹て小大詳観、巨細查察、以て一部の大地誌を寸腹に印するを得べし凡そ行旅便なれば便なるも隨ひて閱歴少く不便なれば不便なるも隨ひて閱歴多きものなり船車と違ひて馬は活物、ことさら道中は長し不便にしてさまざまの艱難多きは勿論なり艱難は即ち觀察の好材料なり是れ予の故に馬を取りて道途の艱難をして閱歴多からしめし所以なり予豈奇を好み險を冒して以て自ら喜ぶ者ならんやと

酷熱大寒

悉比利の夏は炎熱燄くが如く上りて華氏の九十五度に至れば茫々として木影もなき荒原平野の草燃え砂石爛れて反射火の如く腦殆んど焦れんとして屢嘔吐を催はし熱汗油の如くなりしとぞ熱は則熱なり然れども是れ人類の往來する所なり蒙古の寒さ人の想像し得ざる所下りて列氏の零點以下四十五度に至れば堅氷巖眉に在り風雪の爲に呼吸殆んど窒がらんとし裘を重ねて膝を被ふも寒威骨に徹し馬上躡操して以て暖を取る者數、馬汗かけば忽氷り汗かゝざるも寒風馬身の熱を吹きて毛に堅氷を結び一時間に少くも一度は下馬して鞵に附けたる鋸

中佐之類
不獨寒熱之
在於肉體而實
在其中矣

もて之を拂落さる可らずイルクーツクにて露國風の蒸風呂に入りしが風呂の
温度は列氏三十度にして室外は零點以下四十度。外に出れば呼吸忽ち苦しく躬
自ら危ふみしとさへありけり寒は則寒なり然れども是れ民族の棲息する所なり
寒と熱との酷なる如此しといへども既に是れ人類民族の往來棲息する所。豈地
へ得ざるの理あらんや況んや中佐の強健に加ふるに鐵心石腸滿身是れ膽を以す
るをや世多く中佐旅途の艱難は獨り大寒酷熱瘴雲毒霧に在りと爲す是れ未だ深
く中佐を知らざる者なり歐羅巴人の或者は斯る驚俗駭世の壯圖を獨り歐羅巴人
の身にのみ専有する者なりと爲しけんにも思も寄らぬ日本帝國軍人に因て企てら
れたるを見て其錯愕果して如何ん而して中佐は馬に衆目の前に鞭ちて兵勢地形
を觀察せん爲に異域の要地を跋涉す續いて起る驚訝は如何ん嗚呼中佐の艱難は
獨り寒熱の肉體に於けるのみに非ずして實も其中に在るを知り以て其精神的勞
苦を謝せざる可らず

馬

中佐既に孤鞭單騎歐亞の山河を踏破す其壯圖を成せし所以の者は馬なり而して
其道途に艱苦辛酸を嘗めし所以の者も亦馬なり中佐乗る所の者前後五馬曰く凱

旋曰く烏拉曰く興安曰く亞爾泰曰く烏蘇里是なり伯林より波爾德諾に至る二千
五百九十吉米は凱旋の蹄を借り波爾德諾より不里斯那亞に至る三千百十吉米は
烏拉の背に頼り不里斯那亞より亞爾泰驛に至る八百九十餘吉米は臨時馬を買
行き亞爾泰驛に至つて興安、亞爾泰の二馬を購ひ行くと三千五百四十餘吉米、
知他に至りて又烏蘇里を買ひ知他より烏港に至る三千七百餘吉米は興安、亞爾
泰、烏蘇里の三馬を交互乗用して遂に能く此大旅行を成すを得たりけり抑凱旋
健にして眞。何を以てか復た用ゆ可らざるに至りしか何を以てか中佐は途中屢
馬を代へざる可らざりしぞ嗚呼是れ豈中佐の瑕ならんや抑亦馬の罪な非ざる可
し初め中佐凱旋に跨りて獨都伯林を發し行きて露都聖彼得堡に至るや馬足恙あ
り乗馬學校の獸醫をして之を診せしむ獸醫曰く是れ重創醫せざる可らずと乃ち
請うて馬疾を療せしむ中佐乗馬學校に在る者十五日馬疾癒えず一日馬具店に至
りて主人と馬疾の狀を語る主人曰く是れ憂ふるに足らず想ふにナギレ(ヒツ)の
みと授くるに一藥石を以て中佐馬の癒ゆると否らざるに關せず居る者十五日
即ち發せんと決心なりければ病馬に鞭ちて露都を出て行くく彼の水藥を馬
足に塗りしに馬疾果して癒ゆけり行て莫斯科に至り居る者十二日又行くこと二

名馬凱旋之
末路

日馬再び病で行くこと能はず折しも雷はためき雨さへ烈しくなりて騎行益困し
み驛は一露里ばかりの處に見ゆれども兎角抄取らねば馬を下りて之を牽きつゝ
やうくにしてバクレンフに着き警部長の宅に宿借りけり此處より保護の爲に巡
査をして見送らしむ翌日獸醫を招きて之を診せしむればさしたる事なしと云ふ
に例の水薬もて馬の足をこすりつゝ馬足を休めて一日滞留せしが獸醫は再び來
りて彼程の事何かあらんとて出立をすすむ去らばとて立出でしも馬は猶病みて
進まざりけり嗚呼馬は中佐が壯圖を託する所以の者に非ざるか而して病めり病
みて之を醫に付する能はず道途に困頓して進む能はず炎天烈日バクレンフの荒原
に立ちて前途を望みけん時其感果して如何なりけん中佐は又も馬を下りて保護
の爲に附けられたる巡查の車の後に繋ぎつゝ行く十三露里にして波爾德諾に至
り部長の宅に投ず馬頓に仆る急にウラヂミルの獸醫を招けども管轄外の地なり
とて至らず遂に電報してバクレンフ驛の獸醫を招きしに來診して是れ急性僕麻知
斯なり復た救ふ可らずと云ふ嗚呼是れ名馬凱旋の末路なり中佐伯林を出で、
り、百餘日晨に凱旋と與に星を見て荒驛を出で夕に凱旋と與に月を踏んで空舎
に投じ娛樂之と同一し辛酸之と俱にして萬里の遠征を其鐵蹄に託す情骨肉の如

く義君臣の如くなりけんに悠々たる前途未だ其半に達せずして遂に之と永訣せ
ざる可らざるに至りて其情を殊俗の地に傷め涙を異人の前に呑み冥然語らず
然別を告げん時の中佐の心予れ知る悲憤交至りけんを而して其悲憤は遂に言
ふ能はざるべきを馬は獸の靈ある者なり其主と別るゝに當りて嘶き且つ起ちて
無量の哀を表せしも亦宜からずや吾人は實に滿腔の熱血を以て名馬凱旋の末路
を用し且つ中佐の悲を分つものなり

一 蹶復た起つ能はざる者は中人以下の事にして大丈夫は能く屯蹶坎壈の中に立
ちて錦繡に坐するが如く艱益勇み困愈奮ひ以て大志を千難萬苦の餘に成す福島
中佐の如き者蓋其人なり中佐既に愛馬凱旋と訣す悲愈深くして而して勇氣益奮
ひ鞭を擧て而起ち白日を指さして以て誓ひて曰く假令ひ千馬斃るゝとも萬馬死
するとも我れ豈吾志を成す能はざらんやと是に於てか更に馬を買はざる可らず
抑馬を買はんと欲せば馬と居る久しうして其性質の良悍を辨じ蹄力の健否を試
みて而して後良と健とを選ばざる可らず一警良を識り寸歩健を辨せんこと伯樂
も難んずる所なり中佐逗留の日淺し何を以てか其良悍を辨せん出發の期迫る其
健否を試みんに由なし旅途馬を買ふの難さ以て知るべし因て電報を摩斯科駐屯

十
頼哥薩克第一聯隊に發して選良を聯隊長に託す翌日返電あり曰く良馬あり請ふ
來れと中佐汽車を買うて往きて之を訪へば則一馬を牽んで至る一卒をして之に
試乗せしむ一瞥寸歩其良否を辨す可らず中佐聯隊長に謂て曰く予は固より貴下
を信ず貴下にして此馬果して悉比利大陸の騎行に堪ゆべしと爲さば之を取らん
聯隊長曰く是れ駿を群に抜く者能く悉比利の野を踏破するを得る豈管一再のみ
ならんやと獸醫傍に在り亦之を贊して措かず中佐乃ち三百五拾留を投じて之を
買ふ是れ即ち烏拉なり翌朝中佐停車場に至れば一卒馬を引きて先づ在り遂に汽
車に載せ彼爾德諾に歸りけり其翌日中佐自ら馬蹄を試めしに並足一時間能く
八露里を行く將に發せんとして病馬凱旋を郡長に與へ以て其周旋の勞に報ゆ露
國某新聞は聞ひがめて中佐が病馬を買ひたるやうに記せしは誤なり中佐烏拉に
跨りて波爾德諾を出て往きてウラヂミルに入るや警察下士若しくは村長をして
随伴せしめけり時に天已に熱く烈日燦くが如く而して中佐過る所の村落虎列刺
病流行して死する者其數を知らず歐露より悉比利に移住する者多く移民の車數
十輛隊をなして行く其馬車の中に病者を載せざるはなし新馬烏拉は牡馬の勢を
殺がざる者なり故に牡馬の聲を聞けば狂奔暴馳殆んど禁す可らず或時は大澤に

駈込みしをやうく救出し或時は移民車の馬を挑みて悪疫者の車を損せしを
償ひ又或時は馬を下りて牽きゆくうち頼に狂暴を極めて手綱持てる中佐を引ず
りつゝ奔馳して已ます去れば烏拉の背に二銃ありて鞍槽の憂われバ始のはきは
一日幾度も徒歩して馬を休めけれども斯く暴れ廻りて折しも途中到る處に隊を
なしてゆく移民車の馬を挑み動もすれば病者或は女小兒を驚かすに困らじ果て
遂に下馬して休息せしむる能はず幸にして馬に遇はぬ時は涼しき木蔭を求めて
休まんとするも森林中に蜂蚊此其外名も知らぬ毒蟲多く群り來りて人馬を刺
し逐へども拂へども大軍重圍の中に陥りしが如し人の如何にもして虫を逐べけ
れども馬は背をさへれ鬃をさへれ首をさへれ四足をさへれども防ぐ能はず痛さ
と痒さどに益々狂暴を逞うするより木蔭にすら立寄りかね人通なき荒原平野に
立てば烈日火の如く肢體殆んど爛れんとす是を以て木蔭も野原にも立休らは
で終日乗通し乗暮すより馬は益疲れ果てやうく物の用に立つべくもあらず
なりけり八月十六日は五十二露里半翌十七日は頼に減じて三十五露里半其翌十
八日は二十九露里半其翌十九日に至りては不里斯那亞まで僅々二十四露里をゆ
きしに過ぎず此に至りて烏拉の蹄力殆んど盡きて復た如何ともし難し不里斯那

亞は哥薩克の小村なり深夜起ちて馬を見れば在らず麻に附け置きし老人驚き起ちて倉皇狼狽しつゝ之を中佐に告ぐ會隣人拉鳥を牽き來りて係に馬の嘶き騒ぐに目覺めて麻に至り見れば何處のとも知らぬ牡馬來り挑むなりさて村中にて見しことなき毛色今夜此の村の旅人は御身のみなれば必定此處のならんと思ひて牽き來れりと云ふ中佐斯くては所詮大陸の騎行に堪へざるを知り遂に馬を代へんことに決心し烏拉は隨伴の警察下士に與へ人をキルギス牧場に遣はして再び二馬を買ひけり是れ固より臨時の乗用なれば名をさへ命せず一馬の少しばかりの荷物及び飼馬料など敷せんとてあり嗚呼悉比利大陸の野を行くことを得る豈當に一再のみならんやとまで評されし新馬烏拉の蹄痕如此し中佐が道途の艱知るべきのみ

賣る者は唯其健貞を稱して其疵瑕を告げず買ふ者は一瞥其健否を辨す可らず難い哉旅中馬を買ふや中佐買ふ所のキルギス産の二馬も亦一二日の後既に其不良を知れり行きて塞米巴拉丁斯克に至りて防寒準備の爲に居るもの七日漸く二馬の健康を回復せしも遂に其大陸騎行に堪ゆ可らざるを知り更に健馬を得んと欲すれども高原の寒威に堪ゆべき良馬なきをもて猶一馬に跨りて行くこと二百露

里餘上加米諾爾斯克に至り一馬疲勞復た用ゆ可らず是より先き阿摩斯克に在りし時已に烏拉の用ゆ可らざるを知るや乘馬購求の事を軍務高原總督に語りけるに總督書を上加米諾爾斯克の地方官に寄せて中佐經過の時乘馬購求の周旋を爲さんことを屬託し置きけり中佐此の地に至るに及んで託するに買馬の事を以てせしに地方官は人を近傍の牧場に遣はし良馬を集めしめけれども選に中るものなかりけり西悉比利哥薩克一聯隊此地に駐戍す因て聯隊長に面して良馬の有無を問へば自來りて選ばんことを請ふ中佐地方官と共にゆきて之を閲すれば馬二三十頭あり駭駘輒ち辨すべからざるをもて委囑して六頭を馬群に抜き明朝之れを旅宿に送らんことを乞置きて歸る翌朝馬至り一士官も亦立會の爲に來り訪ふ六馬皆良ならず時に近村の農夫も亦馬を牽き來りて中佐の一覽を請ふ者多し中佐は此處の警視監と郵便局長とを立會として競馬の折も曾て敗を取らずなと云ふ履歴ある馬を選び價百五十留と云ふを警視監の口添にて七十五留に購ひけり此の警視監の人となり快活にして嘗て士官より貶せられて兵卒と爲りしこと二たびに及びしことありと云ふ紀念の爲めに一馬を警視監に與へ新馬に跨り駭馬一頭を牽き別を人々に告げて出で、行くもの六日百七十六露里にして亞爾泰

十四
驛に至る新馬固より臨時の乗用に過ぎず此に至てプナルマ産の良馬を露人の牧場に得て亞爾泰と名づけ更に一馬をキルギス會長の牧場に得て興安と名づく會長の牧場は亞爾泰山中チンギスタイと云ふ所に在り馬を買ふ時の立會は哥薩克士官稅關吏及び會長等なりけり行て知他に至り貝加爾哥薩克聯隊の健馬を選抜して又一頭を買ふ鳥蘇里是なり中佐馬を買ふ者前後十頭曰く凱旋曰く烏拉曰く興安曰く亞爾泰曰く鳥蘇里是れ其乘馬にして其餘五頭は駉馬なり

三馬皆健

凱旋烏拉二馬の末路は彼が如し而して興安亞爾泰鳥蘇里三馬は皆強健興安は栗毛なり九月十九日中佐之に跨りて亞爾泰山中に入る亞爾泰驛より烏蘭達巴に至るまで崎嶇巖嶮殆ど道路なく巨岩大石磊々として前に横り馬頭只峻坂險峯の騎行を妨ぐるあるのみ會風雪交至り咫尺辨せず我三千五百里餘の長途上此地より險惡なるはなく四百八十八日の騎行中此地より困難なるはなかりけるに興安は克く險惡を踏みて疲れず困難を助けて勞せざりけり亞爾泰山の頂上なる露清國境より科布多に至るまでは山阻皆岩石と砂礫となり殊に水草に乏しく科布多より鳥里雅蘇臺に至る亦砂礫岩石馬蹄を阻碍し且つ水草に乏し之が爲に上加米諾

馬之困苦不可名狀

額爾斯克にて買へる駉馬は困憊行く能はずやうやう鳥里雅蘇臺に達せしも前途用に堪へざるをもて中佐は之を下宿せし露商に與へ露商より更に蒙古馬一頭を買うて駉馬に充てけるが此の困難の中に在りて興安強健昔日に減せず鳥里雅蘇臺より庫倫に至る迄漠北外蒙古の扎薩克圖汗部三音諾顏親王部土謝圖汗部の牧場あり鳥里雅蘇臺以西に比すれば水草なきにあらざるも天已に寒く草枯れ水凍れり是をもて馬は爪にて雪を掻分けて草を求め或は氷を噛みてやうく飢渴を凌ぎけり蒙古を過ぎて又も悉比利に入りし時は已に十二月一月頃の最寒期なり騎行中馬身氷結して栗毛も月毛に交がふばかりなれば屢下りて鞭の鋸もて之を掻き落せしも落せば氷り落せば氷りて馬の困苦名狀す可らず日暮驛舎に入るも麻なきをもて零下四十五度の寒夜にも屋外に立ちて夜を徹せしめけり既にして黒河に達してやうく空暖になりしも又滿洲に入りて食慣れし草をも燕麥をも得る能はず或は粟或は高粱を或は糞子を或は小麦を湯煮にし或は草の代に粟葉を碎末にして與へけれども食料常に異なれば馬腹を飽かしむるに足らず殊に滿洲の氣候大に異り且つ沼地多く時に深泥大澤を涉らざる可らざるをもて困難一入なり去れど興安の健能く此の千辛萬苦に堪へて遂に烏港に着し海を渡り

て敬愛する主人の故國に達するを得しは獨り興安の幸のみならず、
 亞爾泰も亦極めて強健にして烏蘭達巴の險悉比利の酷寒滿洲の食物缺乏及び氣
 候の劇變等千辛萬苦に堪へ得しこと興安に譲らず但蒙古及び恰克圖にて蹄鐵を
 代へし時深く釘を打ちて左の後足を傷つけしと貝加爾湖畔の冰雪との爲に左足
 跛と爲りて義爾克斯科以東乗用に堪へざりけり是れ知他に至りて烏蘇里を買ひ
 し所以なり遂に亞爾泰を此に乗てんと思ひけるも同地地方官の注意に依り毎驛
 一人の教導を隨へ大に便利を得けるより興安亞爾泰二馬の友愛を割に忍びず遂
 に率ゐて故國に歸れりとは烏蘇里を知他に得て後は興安と交互乗用しけるがス
 トレチンスクに至りて足に疵あり其用ふ可らざらんことを憂へけるも蹄鐵を代
 へて以來舊に復して能く悉比利滿洲の艱苦に堪へて遂に烏港に達するを得三馬
 同載して故國に歸るを得けり

蒙古馬

駝馬五頭二は之を不里斯那亞に得其一は上加米諾額爾斯克に到り其一は哈布他
 加烏拉に達するを得けり一は之を上加米諾額爾斯克に得て烏里雅蘇臺に達し一
 は之を烏里雅蘇臺に得て義爾克斯科に達し一は之を哈布他加烏拉に得て恰克圖

蒙古馬強健
罕無比

に達するを得けり知他以東は興安亞爾泰烏蘇里三馬の外復駝馬を用ゐず烏里雅
 蘇臺と哈布他加烏拉とに得たる二馬は蒙古馬なり平生砂礫多き山間に生れ枯草
 を食ひ冰雪を噛みて成育しつるものなれば強健比罕にして蹄鐵を用ゐざるも峻
 坂を上下し沙漠を奔馳して絶えて疲勞を見ず一は恰具圖俱樂部の使丁長に與へ
 一は義爾克斯科の哥薩克聯隊長に與へて周旋の勞に報ひしと云ふ其他皆世話に
 なりし人々に與へて勞を謝し一馬も賣却したるはなきを如何なれば露國新聞は
 中佐が馬を賣りたるやうに記しけん杜撰と云ふべし

騎行在冬

予れ中佐に問うて曰く騎馬して寒熱兩極の地を行く冬夏孰れが難くして孰れが
 易きと中佐曰く冬なる哉冬なる哉悉比利の道路險惡にして砂礫岩石の馬蹄を噛
 ひのみならず夏は炎威上りて華氏の九十五六度に至るや石焦げ砂爛れて人馬燃
 えんと欲す又河水多く皆橋梁の便なし雷雨時に至り衣裳盡く濡ふも着たる儘に
 乾かさざる可らず道路高低險夷あり且つウラヂミルより比耳麻に至るまでの
 鬱たる大森林にして時に小村落を榛莽荆棘の中に見るのみ林中には蜂虻及び數
 多毒蟲多く日出と共に群飛蟬集して馬身を刺すより馬は既に熱に苦しむ又群蟲

に攻められて困難言ふ可らず鳥拉山中などにては荷物車の馬往々此の爲に責殺
さるゝことあり予はいまだ駄馬を得ぬうち冬衣の上に外套をさへ着て如此き炎
天を行きしが此の爲に木蔭にだに立寄りかねて我も馬も片時休む能はず遂に夜
行して以て炎威と毒蟲を避けたりき虫は夜も猶群集散せず蚊殊に多かりしも夜
深けて一時二時頃の草木も眠り天地も静なる比に至れば流石に虫も巢に歸りて
夢を結ぶにや影を潜めて出でず此時のみ人馬共に縋に息をつくを得たりき冬は
之に反して山河草木一望儘々砂礫岩石も氷雪の爲に埋められ橋なき川も堅氷を
踏んで渡るべく殊に馬の深仇とも云ふべき虫は影だに見えず峻坂の高低も氷雪
の爲に坦々砥の如く馬蹄を妨ぐる千障萬碍は盡く氷雪に因て除去るゝをもて
夏時に比して困難ならず但寒さは則寒し然れども炎威の防ぐ可らざるが如くな
らす頭巾以て頭を裹むべく重裘以て體を被ふ可く體凍れば則双手を振りて馬上
體操をなして以て暖を取るべく防寒の策多ければ騎行の便冬時に如かずと古の
名將往々妾を賣りて馬を買ひ而して愛骨肉の如き者あり中佐の凱旋と彼爾徳諾
に別るゝや固より重腫が難を坂下に吊せしと日を同うして語る可らざるも炎天
寒日常に屢馬を下りて徒歩し以て其勞を分ちしは殆んを秩父重忠が愛馬を馳越

獨都發程

獨逸皇帝陛下既に調を中佐に賜ひ且つ赤鷲勳三等を贈りて以て其行色を壯にし
玉ひし後中佐將に我紀元節を以て程に上らんとす日本帝國臣民の獨都伯林に在
る者知ると知らざると盡く皆一堂に會して宴を張り以て中佐の行を饒す發蹄の
日馬に鞭ちて伯林市外へ送る者曰く姉小路伯爵曰く大迫少佐曰く淺川中尉曰く
土方少尉等數氏帽を振り巾を振て別を告ぐ丈夫非無涙不離別間とは云ふもの
中佐の此の行尋常歸朝の途に非ず過る所の地は瘴烟蠻霧の郷なり觀る所の俗
は標悍猙獰の人なり異境軍制を察し殊域地勢を訪うて以て我に資する所あらん
と欲す肩に日本帝國軍人の重大なる責任を負ふて身には一軍刀と姉小路伯爵の
饒しつる五連發の一短銃との外地圖あるのみ而して孤鞭單騎遠征の途に上る成
敗未だ測る可からず死生曷ぞ知ることを得んや中佐鞍に倚りて顧眄同胞と異郷
に訣別す意氣固より壯なりと雖も其中に悽然たらざる能はざりしなるべし市外
の村落に至れば久保某先づ在り中佐を待ち居けり酒を侑め花を贈りて別る伯

林以東第一驛ミンヘンブルクに至れば二宮熊二郎三増久米吉の二氏亦伯林より來りて既に逆旅の準備を爲して待ち居けり驛外の路二分す翌日中佐其左を取りて發し二人と手を此に分つ二人は路の邊に立ちてやがて振返らでは居らじ必定振返るらんなき語らひつゝ見送る中佐も亦流石に後髪をひかるゝ心地して振返りつ二人が猶も帽子打振り居たるにたまらず一鞭あてゝ駈出しけるをもて此方の二人は相抱きて打泣きけり是ぞ在伯林の同胞との最後の別なる

集觀歡呼

中佐が單騎遠征の舉は早く既に全歐に傳稱せられ且獨逸の諸新聞紙上に記載せざるなし流石に通信の迅速教育の普及せる獨逸なれば塞村僻邑の民も亦皆此の舉を知らざるものなかりけん中佐の騎馬通過する所の各市街各村落或は窓を開きて首差出し或は門邊に立集ひ老いも幼きも巾なご打振りて異口同音に道中御無事ぞと叫びて見送りけるを中佐は一々右手を捧げて目禮しつゝ揚然として馳去りけり獨逸の國境まで到る處として然らざるはなかりさぞ

沿道光景

全歐中鐵路の便尤開けたるは白耳義にして次は獨逸なり四通八達線蜘蛛網の如く

大道坦々。是蓋備一。朝之念云。

而して哩數の少き游山崎通の鐵道なきを除くの外は皆官設なり是れ利益多き線路と利益なき線路とを平均して經濟を計り以て交通の盛を冀圖せるものなり斯く鐵道の開けし上は旅客汽車の便を借りて路行く人の跡稀なれば我東海道鐵道の全通してより昔時參勤交代の大道今は空しく荆棘に委したらんが如く街道は皆荒果つべきに決して然らず如何に鐵道開けて路行く旅人なればとて道路の修繕を怠らず一條の大道坦々として砥の如しとなり是れ一朝の急に備ふるなるべし道の幅は十メートル乃至十五メートルにして百メートル毎に我一里塚の如き石標あり道は半を人道車道と爲して登を敷き半を騎馬道と爲して砂を敷き道の兩傍に並木を植付けたるを沿道又山林多く其制度極めて整ひ一株毎に手入届きて樹もいと美はし

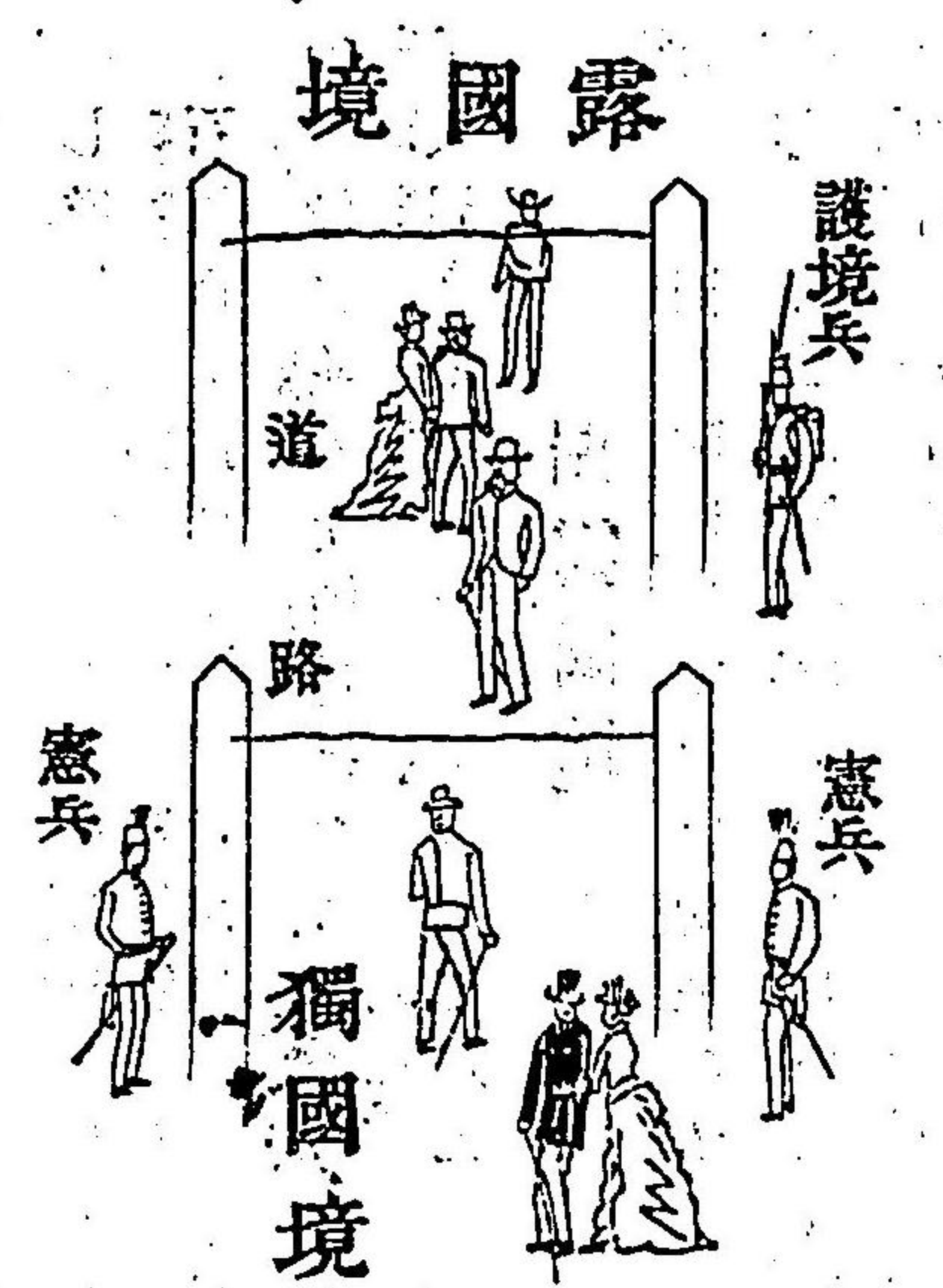
獨逸國境

行きて獨逸國境に至れば獨逸の方にも露西亞の方にも各一柵門あり門は二本の柵杭を立て鐵鎖一條を架けしのみ兩柵相去る二三間に過ぎず豈嘗に昔日甲越の川中島に於けるのみならずや獨逸の柵門には憲兵二人兩傍に立ちて張番す銃は携へず露西亞の方には國境警衛の爲に特に編制せられたる護境兵一卒銃を荷す

て立ち以て行人を誰何す露柵の傍に護境兵營あり士官と兵卒若干を駐む此の

邊一面の平野丘陵にして境界其間を繞るをもて見下せば落々たる村家其孰れか獨孰れか露たるを知らずとぞ予は國境の光景を聞きて毛髮悚然として立ち我帝國の四疆を望みて且喜び且悲しむ者なり我國四邊海を環らし隣境の制肘を受けず是尤喜ぶべし而して國民皆仙を山中の一軒家に學ぶが如く蒿目大勢を見ず以て太平の夢を島國美山水の中に貪る是れ豈悲しむ可らずや嗚呼彼の慣れの徒をして此の柵門の間に立たしめば如何ん

國境光景。毛髮悚然。



一奇少年

中佐露境に入り露西亞皇帝の賜へる護照を守關の一卒に示して柵門及び税關を過ぐれば護境兵騎して送る時に背後に響の音蹄の聲あり顧みれば年の頃十二なる一少年鞭を揚げて而して至り佩びる所の玩弄物の軍刀を抜て敬禮を施せり

境上少年。尙武如渴。

彼れ中佐の風を聞きて欽仰に堪へず玩弄物の軍刀を佩て自ら軍人に擬し以て來り送れるものなりけり健氣とや云はん少年は彼の護境兵と同じく護境兵管轄の軍區域迄見送りて別れしとぞ以て尙武の氣渴の如きを知るべし

馬躍齒折

中佐彼の少年と護境兵とに別れて行きて國境の下なる第一驛コニンに近づきし折しもコニン屯在の輕騎兵第十三聯隊の將校樂手一隊を率ひて來り市外に迎ふ中佐導かれて聯隊將校團に至り晚餐の饗應を受け遂にかねて準備せる旅館に投ず時に二月九日なりコニンは國境を去る二十八露里の小市街にして兵營の外人家二千戸もやあらん翌日の中佐のコニンを發するや第十三聯隊長は騎兵一中隊を以て送らしむ是日は馬の足を休ませんとて行程三十六露里半コロ一泊の豫定なり彼の一中隊は送られて其半途に至りて別れけり中佐は三四の士官と相伴ふて行く途上にてコロ屯在の輕騎兵一中隊の出で、迎ふるに會へり此の一中隊は第十三聯隊の分營なり中佐真先に進み歡迎の一中隊其後に在り樂手太鼓を叩き一隊の兵卒聲を齊しうして行軍の軍歌を歌ひつゝ行くいさましとも心地よしとも言ふばかりなし時に乘馬凱旋は斯る高聲の軍歌に慣れず驚き狂ひて躍り上り

し拍子に馬は首を中佐の唇に衝きあて、中佐の前歯一本を折きたり唇より血流
 なければ歓迎の中隊長急ぎ膏藥を衣裏より取出し是を貼り玉へとて與へけるを
 中佐少しばかり取り取り唇に張り途中にて又もや數本の歯を打折られん時の用意
 に餘れる膏藥はお貰ひ申さんとて主客打笑ひけり折れし歯は猶齒齧を離れずし
 てふら下りけれども道に齒醫者なかりければふらさがれる儘に食事として四日
 目に波蘭の故都あるワルシャワに着きやうく齒科醫を招きて齒を抜取りける
 が齒科醫は直にゴムもて製れる義齒を入れけり入齒は口中の心地あしきもの
 はあらず中佐口をもがくと動かしつゝ醫者に向ひ此の義齒は健康の爲か將た
 外面の修飾にやと問へば前歯一本缺けたりとて健康にはさしたる障なし但打見
 たる處見苦しければと云ふ健康の爲ならんには心地あしきを忍びもせん我は外
 面の修飾無用なりとて入齒は抜取りて打棄てけり露國新聞の此を書傳へて其眞
 率を稱せり

猶太人

露西亞の内地を放逐されし猶太人は悉く皆波蘭に入り到る處の各市街住民の半
 を占めざるなし嘗て露國政府が猶太人放逐の舉を聞く者皆其残酷を咎めざるは

猶太人之所
 居道義境
 類風俗墮
 無地以上
 無君主也

なけれども猶太人の實境を見るに及んでは其處置を疑ふに足す彼等の頭上には
 戴く可き君主を有せず是を以て忠實の心其中に養ふ所なく卑客にして理義を解
 せず浮薄にして廉恥を知らず唯利を是れ視て營々として義を管め役々として痔
 を誣り金錢の爲には如何なる屈辱をも恥ぢず是を以て彼等が居る所は道義境類
 風俗地に墮ち看みて他の良民をさへ傷ひ且つ猶太人の住居街巷の不潔にして衛
 生を害する決して支那人に譲らずと云ふ宜なるかな其露國內地より逐出されし
 や中佐の常に馬の勞を思つて一時間に五分の必ず徒歩す凱旋は英吉利馬にして
 骨格極めて大に身材甚だ偉なり中佐身の丈甚だ高からねば馬を下りて又乗る毎
 に石垣又は路傍の高處に足場を求めけるが一日物にや驚きけん馬狂ひて足場に
 寄り付かず折しも猶太人片手に杖をつき犬を引きて來掛りければ中佐呼留めて
 暫時轡を執り呉れよと頼みけるに彼は笑うて答へず餘所に見て過ぎゆかんとす
 中佐十哥の銀貨を取出して彼に示しければ彼の猶太人の倉鼠狼狽持たる杖を
 棄て、馳來り轡を執りて中佐を馬に載せけり又ブルンスクと云ふ所に泊りける
 時猶太人の厩を借り燕麥四十斤を與へよと云付ければ直に持來りけり中佐儲
 に四十斤ありやと問へば升なければ量りて見ねと儲に四十斤ありと答へける

が翌日價を問へば二留と云ふ此は百六十斤の價にして殆んど四倍を食らんとす
 るものなり又或時日中小憩し猶太人を頼みて草と燕麥とを馬に與へて價を問
 へば一留と云ふ中佐の一留可なり但書付を渡せ警察官に其價の當否を問はんと
 云ひしに猶太人の底氣味悪るかりけん四十哥と記し來けり斯く金錢をだに見れ
 ば恥も義も知らず加之も不潔至極なる猶太人は内地を逐出されて盡く波蘭に集
 まれり而して尤哀むべきは波蘭人なり波蘭人の嘗て露に叛きし者は財産をも没
 收せられ權利をも剝奪せられ商賣して口を糊さんにも猶太人の爲に太く利益を
 奪去られ貧賤窮迫の慘境に陥りて自ら救ふ所以を知らず哀むべきは亡國の民に
 こそ

亡國山河

國亡び君辱しめられて山川空しく存む麥秀で、漸漸烟冷に風寒し中佐の鞭を停
 めて感慨惆悵禁せざりしは蓋し波蘭なり日暮波蘭の故都ワルンヤウの市外に立
 て當年變亂の日を思ひ心を物光の慘憺たるに傷め魂を風色の凄涼なるに消し以
 て英雄不祀の鬼を憑弔し願みて國內の人心を察すれば敵愾の氣日に消磨して卑
 屈の心月に増長し醉生夢死以て一息を取殘の餘に保つ悲まざる可けんや國內往

國亡君辱
 山川空存
 敵愾之氣
 消磨之日
 心月長屈
 不悲哉可

々豪族あり財豊に家富み門戸甚だ大なり彼等は皆昔日叛亂に與せざりしもの
 して其露に叛きて戈を把りし者は率ね皆悉比利に誦せられ然らざるも亦所有の
 財産と公權とを收奪せられて奄々餘命を偷むに過ぎず中佐波蘭に入りて双眼只
 淚ありしのみ

波蘭沿革

嗚呼二百年前の波蘭は實に中央歐羅巴の一大國にして其疆域ハ波爾的海より黒
 海に達り其面積ハ佛と西班牙と匹敵したりき此の時に當り普は未だ王國たらず
 魯も亦蕞爾たる小國のみ列國の上に屹立して雄を其間に擡にせし者は波蘭な
 り其民義勇に富み將士精強天下之を畏れしも物盛なれば則反るの理に洩れず既
 にして臺網弛み官紀墮ち上は政權の與奪に壞れ下は選舉の紛争に疲れ大本漸く
 亂れて國勢遂に衰へ民の良も兵の強も用ゆる所以を知らず折しもあれや東魯西
 普一時崛起し新勝の威四隣に震ひ波蘭も亦其乘する所と爲り普埃魯の三國の爲
 る全國三分の一を蠶食せられしは實に一千七百七十二年なり而して國情未だ復
 らず猶紛争を事とす至誠の士義兵を起し侵地を復せんと欲するも倒瀾を奈何と
 するなく勇戦奮闘の餘徒に血河屍山を描き出せしのみ一千七百九十五年乃折れ

特不
所者以
以者不
以者不
以者不

彈丸盡て國魚土と爲り社稷此に亡び滿目の山河三國の分有する所となれり其後
佛帝奈翁一世破竹の勢を以て歐洲を震動するに及び波兵六万佛軍に投じ以て故
國の回復を圖り獨立の餘命を一息奄々の中に保ちし者幾年天佑至らず人力も亦
盡き窩得路の一戦佛軍の潰奔と與に一敗地に塗れ復た死を救ふ能はず嗚呼是れ
誰の罪ぞや紀綱頽廢して上下國內の小紛争を事とし對外の雄略を忘れしに由ら
ずんばあらず鑑みざる可んや奈翁の誦せらるゝや歐洲始て平に各國疆域を劃定
し波蘭の地を以て魯國滿下の王國と爲し魯帝自ら波王を兼攝し軍務行政猶自主
の權利を保ちしが魯國の干渉漸く甚しく國民激昂止まず一千八百三十年比爾
義和蘭に背きて兵を起し強國の後援を得て獨立するに及びてや波蘭愛國の士も
亦争ひ起りて義旗を翻へし魯兵と戦ひて甚だ力めしも衆寡敵せずして敗れつ是
に於て乎一千八百三十二年二月十六日の勅令は王國の權利を奪ひて全く魯帝の
有に歸し畢んぬ聞く此の役や波人の竊に強國の後援を望むこと比耳義の如くな
りきと和蘭の弱小なる他國容喙を憚らす魯の強大誰か敢て虎尾を踏まん昔者波
蘭は塊の敗亡を救ひ合衆國の獨立を助け義俠を以て天下に稱せらる今や己を以
て他を推し我の實力を恃ますして而して恃む可らざる者を恃む大事の去るも亦

宜ならずや一千八百六十三年波蘭の遺民又苛政に苦しみて義兵を擧ぐ一敗起た
す數万の良將勇卒西比利に講せられて英姿を雪山氷河の中に埋め當時叛亂に與
せざりし者も亦自由を剣奪せられ波蘭の語言猶且つ口にする能はず其悽愴慘憺
言ふに忍ひざる者あり嗚呼世に亡國の民は生甲斐なきはあらじ

魯領十州

山河空しく在り遺國歴々たり波蘭の魯領に入りし者は實に喀利什克爾齊羅摩惹
魯布林彼得哥布不魯支科拉德摩西德勒齊蘇瓦爾幾德爾沙瓦の十州にして面積實
に十二万七千三百九十九方吉羅人口八百二十五万六千餘なり其内大約百十三万四
千餘は猶太人なりとかや猶太人の歐羅巴に在る者總數六百五十餘万にして其半
は魯に在り而して波蘭に在る者は在魯猶太人の三分一なり十州の中襍爾沙瓦を
首府と爲す人口大約五十万彼得堡莫斯科に次ぐべき大市街にして威斯拉河に
跨り五條の鐵道此地に輻輳し街路清潔烟火稠密人に一種の俠氣あり世稱して小
巴里と曰ふ故王の宮殿依然儼存し各國遊覽の士女をして客袖を濕さしむとそ

下士婚禮

二月廿一日コロロを發して行くこと四十七露里クツノに至るクツノより十餘露

公以嚴。私
以情。國
之特習。

里ばかり此方に一士官出迎へけりクツノは獵兵第四聯隊の屯在する所なり導かれて將校團に入る饗應甚だ盛に一紀念章を贈らる露境に入りて以來紀念章を得しは此處を第一とす此夜一下士官の婚禮あり宴を下士官團に張る來りて中佐に請うて曰く貴下の來臨を得ば何の光榮か之に如かんと中佐乃ち聯隊長と與に其筵に臨む各大隊中隊の長及び下士の屬せる大隊の士官并に其親戚朋友悉く皆來り會す露國固より階級を尙び上下尊然たり故に上長官の下を御する一に規律を以てし相待こと太だ嚴なり而して此の夜主客の情渙然として城府なく復た尊卑上下の別を見ず皆一堂に會し盃をあげて新夫新婦の健康を祝し且つ食ひ且飲み主客相携へて立て舞ふ聯隊長も大隊長も新夫新婦と手を携へて蹈舞するさ或然たる一家あり蓋し公には嚴を以てし私には情を以てす露國の特別なる習慣なるべし

夜會

中佐の到る處往々夜會を催はして之を饗す露國の冬は寒威甚くして其期亦長し故に室外に出づること稀にして常に閉日月を室内に消するが故に室内消閑の具に富み骨牌尤行はれ舞蹈亦盛なり夜會には殊に骨牌を弄ばざるなく骨牌はど

心移りて夜の深くなるをも知らぬものあり故に露國の夜會は何國のよりも夜深け易し大抵午後八時頃より集まりて骨牌と舞蹈との爲に十二時或は一時頃まで遊び斯くて酒食と爲りて又二時三時ばかりを費やすをもて會の果つるはいつも曉方の三時もしくは四時なり中佐は常に夜會に列し如何に夜深けても翌朝は七八時に立立しけり二月廿三日中佐ラビユツチュと云ふ處に着きし時の夜會の如きは午前五時に散會しけるが椅子に倚りてうづらうとまどろみしかと思へば早や七時頃なりければ直に用意して午前八時出立斯く夜も得眠らざりしにも似て其日は七十八露里を行き午後六時にはワルシヤウに着きて直に電報して昨夜の會の謝辭を音贈りけり其強健如此し露國の夜會にて尤不思議なるは上流婦人の平氣で烟草を喫すること主人夫婦は食卓に就かずして自ら立働きて皿或は盃などの周旋をなすこと等なるが此に決して他の歐羅巴諸國に見る罕なる事共なりとぞ

十三日橋

ニーマン河の南は波蘭にして北は露西亞一條の河水二士の境界を爲す而して其橋の長さは十三日の行程なり中佐は三月七日ニーマン河の橋を渡り初て二月廿

好笑柄

三日に橋を渡り終れり其日敷は逆戻りなり天下橋多しといへども斯る奇異にして長きはあらじ故に世稱して十三日橋と云ふ怪しむ勿れ波蘭の人民ハ新教を奉じて曆も亦陽曆を用ひ露西亞人は希臘教を奉じて一種の露曆を用ゆ故に橋の南北各曆日を異にして十三日の差あり譬へば露曆の一月一日北より來りて橋の南岸に渡れば忽ち一月十三日と爲るなり其實橋の長さは兩國橋ばかりに過ぎず好笑柄と云ふべし

老人感奮

二月廿八日ワルンシャツを出づ近衛騎兵旅團長は部下なる槍騎輕騎二聯隊の將校及び樂手一隊を率ゐて送りて市外に至る行くこと五十五露里にしてブルツスクに泊す又行くこと五日二百十二露里にしてスワルキーに達せしは三月五日なり此の邊の地形は兀然たる丘陵にして一高一低或は起ち或は伏し蜿々波の如しワルンシャツを出でより愈々北して愈々寒く積雪も亦漸く深くして常に霏々皚々の中を馳せスワルキーに至りては寒氣益々強く列氏零下十四度となれり輕騎兵第六聯隊此に屯成す中佐は將校團の賓客と爲りて厚禮を受け一紀念章を領取せり時に一騎兵中佐あり年五十餘中佐と語りて其壯圖を聞き感奮興起措く能は

老武官聞
壯圖感奮
不能措

ず翌六日風雪尤甚しく寒氣は列氏零下十七度に及びしをも厭ふ色なく自ら老骨を鼓し餘勇を中佐に買うて馬に鞭ち疾風大雪を冒して一日行くこと五十七露里我十五里送りてマリヤンホルに至れり獨都を出でより市外に送る者多かりければも其送りて次の宿所に至りしは此の老武官を以て始と爲すマリヤンホル以後二三士官の往々遠く送る者ありしは蓋し此の老武官に激せられてなり此夜マリヤンホル屯在輕騎兵第五聯隊長の官舎に投宿す翌日一騎兵中尉に送られて行くこと五十三露里コブノに達すコブノは輕騎兵第七聯隊の屯在する所聯隊長は將校樂手を率ゐて市外に來迎へ其官舎に延ゐて一宿せしむ中佐馬を休ませんとて翌日も逗留して所々を遊覽すコブノは國境以北に於ける屈強の要塞なり三月九日コブノを出づ少壯士官三騎見送り行くこと六十五露里日暮れてウキルコミルに達す此地駐屯輕騎兵第九聯隊長は夜分をも厭はで將校を率ゐ大八露里の地に迎へて其官舎に延けり次日又も三人の少壯士官に送られて行くこと六十露里ウヂヤニトよ着き波蘭人の豪家に投宿す待遇鄭重を極めけり翌十一日六十九露里を行きてチナブルクに達し一族館に投宿す彼のウキルコミルより送りて至れる三士官は中佐と別を此に告げり

兵備疎密

露獨國境よりデナブルクに至るまで殆んど八百露里の間は如何なる村里にも如何なる市街にも到る處として兵はあらざるなく山河草木盡く皆兵士なりと云ふも浮誇に非ず歩騎砲兵皆營を連ね旗を樹て而して中佐は騎馬の客なるをもて獨り騎兵の歡迎優待を受けり蓋し獨塊二國の國境に向ては露國陸軍の十中八九を備ふる者なり其中頼哥薩克兵は僅々二聯隊に過ぎず此は純然たる常備兵にして屯田哥薩克に非ず悉比利哥薩克兵の馬は體格小さくして威を強國に示すに足らざれども頼の馬は太く逞ましきをもて強國の邊境には哥薩克をして屯田せしめず獨り二聯隊の頼哥薩克を駐屯せしむるなるべし其國境に於ける兵備の密如此し而してデナブルク以北露國都彼得堡に至る五百十二露里の間はブスコフに一隊の駐兵あるのみ其餘鬱々たる大森林絶て兵卒の影を見ず故にデナブルク以北復た送る者なく中佐は一馬凱旋と形影相憐みしのみ

深夜彷徨

櫻狩又は紅葉狩一夜の旅をだに憂しと思ふは人の情なりまして一人天涯萬里の異境に入りて終夜ゆきつもとどりつ宿求めども一夜を明さん軒たになきをや人は

如何に物憂くや思はん中佐は斯る艱難をもて觀察の好材料とはなしけり三月十七日ブスコフに若き歩兵第四百四十六聯隊の賓客として營中に一宿し翌日は逗留して馬を休め越えて十九日行くこと七十一露里ナバセリヤに達す波蘭の地は人口多く村落沿道に散在すれどもコブノ以北の露領に入りてよりは人家少く森林多し殊に旅客は皆鐵道の便を借り絶て風雪を冒して路をゆくものなければ行路寂寞人跡太だ稀に時に或は橋もて薪材を運ぶものに遇へども其すら今日は幾臺昨日は幾人と數ふるにも足らぬはどあり且つ露國の村落は人民皆貧しく夜は他國のやうに窓より燈光を認むる家殆んど稀なり去れば中佐は此日さみしき森林を穿ちてやうくナバセリヤに着きし比は日已に没して四顧蒼然たれども一簇の寒村燈影を認めず村に入りて始めて一種の燈影を見つ近きて見れば二階家なり戸をほとくと叩けば一人の男出來り此男獨逸語を操れり中佐獨逸語にて一宿を請へば泊めざるにあらねど此家に庭なきを如何せんと言ふ此の村に警察ありやと問へば曰く無し去らば何處に庭ある家ありやと問へば村の北盡處に在りと云ふに終日乗暮らして疲れ果てつる馬の口を取りて牽きつゝ北盡處に至れば一軒の荒屋あり中佐戸を叩明けしに臭きたまらぬ烟草の臭氣鼻を打ち烟

三十七
 へけむたきまで目を撲ちけり入りて見れば無数の賤民群居せり一宿を乞へばれ
 安き事なり去れを厭なしと云ふに困り果て此の村には厭なきやと問へば村の南
 盡處なる二階家には厭ありと云ふいと訝かしけれども詮方なければ又も疲れし
 馬の首を撫で、終日の勞をいたはりつゝ自ら牽きて今來し路を戻り村の南盡處
 に至れば二階家は先刻尋ねし家の外にはなし兎も角再び尋ねて見んと思ひ戸を
 叩けば一人の下女出來りけるも戸は明けず家の内より何の御用ぞと問ふ主人
 に面會したしと云へば何故に逢ひたきやと云ふ逢うて物語りたき事ありと答へ
 しよ話し度きは如何なる事ぞと押返して問ふ餘りにうるさきより中佐も堪へか
 ねて汝の知る所に非ず斯くと主人に通せよと叱せし打しも戸を開きて立出しは
 主人なり中佐に向ひて何やらん大聲一喝せり中佐の徐に馬を繋ぎて内に入り
 露國外務省の與へつる保護の旅券を取出して主人に示しけるに彼は俄に面の色
 を和らげ言葉を卑うして容易く一宿を諾ひ乗馬を屋後の立派なる厩に繋がしめ
 けり曷ぞ知らん跡にて聞けば此の二階家こゝ此の村の警察署にして彼の大聲
 一喝したる男は警部ならんとは此の夜は纔かに茶と麵包をもて一夜を明しけ
 り

積雪埋路

デナブルク以北愈北して愈寒く四面皆雪滿目一白丘も川も野も山も埋め盡
 して一點の青を見ず去れば往來の大道も雪の爲に求めん由なく只自然に人馬に
 踏分けられし一條の小逕あるのみ降積れる雪の上を踏み固めて纔に人馬を通す
 るは必なればいと狭し斯る狭き小逕をゆきて不圖橋なごに逢ひし時は馬を
 かはさざる可らずかはさんにも路は狭し兩傍は積雪なり進退自由ならずして屢
 馬を下りて纔に行違ひけり又いと危ふきは馬尿して積雪之が爲に解け尿の跡に
 大きな穴を穿ちしを馬は氣付か足踏込み覺えずも蹶づき且仆る、事あり中
 佐の馬も屢尿の穴に足踏込みて雪の上に打仆れけり危険と云ふべし

小官權重

地僻小官權威重とは何處も同じ習にて位重く官高き人は是非を辨まへて人に
 傲らねども片田舎の小役人或は役所の使丁などなか／＼に人の前に肩を怒らす
 もの多し中佐過る所の軍隊に入りては聯隊長大隊長などの優待厚遇を受けざる
 はなかりけるも却りて片田舎を過りて往々小官の權威に驚きけり三月十九日一
 小村に着き警察官の家に宿借りけるに出立の折ルガの警察官に添書しければ其

を携へて翌々廿一日ルガと云ふ小市街に着し警察署を訪うて彼の添書を差示しけりルガの警察官は添書を見て佛然卓上に抛り面に怒氣を含みて顧みて同僚と何やらん語り合ひけり中佐曰く予は只既ある旅宿の周旋を請ふのみ他事あるなし警部乃ち中佐を導きて停車場の傍なる一旅店に至れり且つ曰く此より北の方四十露里の處に小村あり明日の一宿は此の村なるべし旅宿の準備をも爲し置かん處存なるが幸に彼の村の旅宿の主人も所用ありてルガ町に來合せ居れば明朝主人をして此に訪問せしめん且つ明朝出立の折は一巡査をして市外に送りしむべしなど云置きて立去りけり翌朝旅宿の主人來訪し我等は一足先に村に歸りてれ待ち申さんと云ひて別れけるが彼の案内の巡査は遂に來らず中佐はいつまで待つべくもあらねば市外に出づる路を尋ねつゝ此處を出立して四十露里をゆき村の入口に至れども待んど云ひし主人の影は見えず彼方此方ゆきつもどりつやうく旅宿の尋ねあたりけれども主人は居らで妻のみ留守し居り今夜予が一宿すべき通知ありし筈なりと云へば斯る通知は承らずと云ふ主人はいつ頃歸るにやと問へば其も分らずとて待遇面白からざりければ日暮又馬を馳せて北に去ること五露里ヤステエーラと云ふ小村に着き一農家に入りて黒麵麩と鶏卵

どに飢を凌ぎ木の長椅子に憑れつゝ外套打被りて一夜を明しけり中佐曰く予れいまだ露語に熟せざりしかば斯る行違も起りけんと願ふに中佐一人あらんには何處にか宿借らざらんに常に旅宿に困苦せしは馬の爲なり

駐馬露都

中佐の露都彼得堡に着きしは三月廿四日なり伯林を去ると千六百十七露里國境を去ること千三百四露里伯林を出でより四十五日を費せり彼得堡の南に莫斯科門あり門外凡十露里の處に騎兵將校學校の將校數十名出で迎へ中佐を延いて騎兵學校に至れば校長出で門外に迎へ晚餐の饗應甚だ盛に且つ紀念章を贈り校中將校集會所の三室を開きて其宿所に充て兵僕一人を附しけり此の騎兵將校學校は全露の各聯隊より各一二の騎兵士官を拔擢して入學せしむる騎兵最高等の學校にして附屬には蹄鐵學校あり亦全國各聯隊の蹄鐵工をして入學せしむ中佐前途を望めば悉比利の荒原蒙古の砂漠人烟甚だ疎に工業起らず騎行中蹄鐵を打つ能はざらんことを恐れ彼得堡滯留十五日間を利用して自ら蹄鐵に關する要領を學ばんと欲し日に蹄鐵學校に至りて蹄鐵を放し且つ打ち馬爪を削るの法をも習ひけるが未だ幾ならずして自ら見事に二騎兵の乘馬に蹄鐵を打ち得るに

至りけり因て輕便なる蹄鐵機械を旅囊に收めて程に上りければ如何なる僻地寒
村を過ぐるも自ら蹄鐵を打ちて更に不自由を感せざりけり

曠原無際

四月九日中佐の露都彼得堡を出づるや騎兵學校の將校數十名送りて莫斯科門に
至りて別を告ぐ行くこと數露里路二に分る右はガチナの離宮に通ずる本道にし
て路傍の並木うつくしく行人亦多し左は莫斯科街道にして路傍並木もなく行旅
の影稀に積雪深泥殆ん馬蹄を没し極目荒涼四顧寂然たり此の邊の地形は茫々
たる曠原一望際なく彼得堡より諾哥羅都に至る百八十一露里我四十八里の間坦
々たる一條の路只一箇所の曲折あるのみ其餘ハ一直線に横断せり百八十一露里
と云へば殆んを東京より信州上田に至る路程なり地理に暗きものは東京より信
州上田までの街道一直線にして曲折高低なしと知らば如何に荒原の茫々たるか
を想像するに於て思半に過ぎんのみ中佐は斯る旅人稀に村里少く見る目果なき
百八十一露里の曠原を四日に乗りて十二日諾哥羅都に安着しけり

茫々曠原。
一望無際。

土沃民貧

彼得堡諾哥羅都百八十一露里間に中佐が宿借りしは皆野原の中の小村落なる貧
家なり此の邊露西亞の首都を去ること遠からざるのみならず雪こそ深けれ地味
は極めて沃饒と見ゆるに人家極めて少く野原の中の小村も亦極めて貧困の状な
り中佐一身の外に乘馬の係累あり去れば斯る貧村に入りて旅宿を求めんとする
に人は宿しても廐なく廐ありても人の宿るべき室なく尤困難せしは旅宿なり
けるが人も馬も一夜を明す宿とても只黒麵包と鶏卵とに飢を凌ぎて列氏零下四
五度の寒夜に木の長椅子もしくは椅子四五脚を並べて其上に外套打被りつゝ假
寐の夢を結ぶに過ぎざりけり以て此邊の人民生活の度を知るべし露都出立の翌
日は午過ぐる頃但或る小村に入り立塲茶屋めける處に腰打ちかけて黒麵包を食
ひ茶を飲み居けるに農夫にやあらん群り來りて中佐を圍みさままの事を尋ね
問ふ者をも同様如何にも不潔にして汚穢なる殆んど名状す可からず無數の乞兒
さへ群集して錢を乞へり時に突然茶屋に入り來りし一人の男は獨逸語もて話し
かけたなり此は獨逸ワイマルの人にして商業を此の地に營むこと三十年なり中佐
此の男に向ひて此の邊の地味沃饒に且つ工業の餘地なきに非ずと見ゆるに何と
て斯く貧しかるらんと問ひしに此は全く燒酎我泡盛の如き酒也の爲なり人民皆
燒酎を嗜み一日働きて些少の錢を得れば直に酒屋に走り飲盡せば又も働きて又

支那片烟。
露國火酒。
是對之流。

忽ち飲み、一生焼酎の爲に働きて、焼酎の爲に死す。焼酎は彼等をして懶惰ならしめて、貧困は彼れ自ら取る者なりとぞ答へける。支那の鴉片露國の焼酎俱に是れ一對の流毒なるべし。斯く村落少く貧人多ければ、盜賊出沒すると多く、地方旅客の夜行には兵器を携へざるなしとなり。

盜賊遁走

是より先き中佐露都を出づるに當り、騎兵學校長之を門外に送りて戒めて曰く、近者大祭日に方り罪囚の特赦放免せらるゝもの多し、彼等は相脅めて盜と爲り獨行の客とだに見れば、劫掠盜奪、屢々猛暴を極め、危害尤甚し。貴下の前程亦必ず之をあらん若し、危害の事に遇はば、請ふ馬を旋して彼得堡に歸り來らんことを中佐厚意を謝し笑うて答へず。既にして行きて深林に入り、曠原を過ぐれば、途上果して盜賊とも見ゆる容貌、猙獰のみに遇ふもの數なり。時に積雪の爲に道いと狭かりけるが、中佐は故さらし馬の首を彼等にすりつけんばかりに接して威を示しける。よ彼等は却りて路を譲り、或は脱帽して敬禮を施しけり。斯くて何事もなく、諾哥羅都に到着したりき。

諾哥羅都

盜賊讓路

諾哥羅都は露都を出で、より莫斯科街道中最初に達する市街にして、古は獨立通商の地なりけれども、今や鐵道の線路に當らざるをもて、復た當年豪華の光景なし。市はイルメン湖に枕り、一帶の長江其前を擁し、霞光波色水雲の中に搖曳して、映帶畫の如く風物極めて美なり。人口凡そ二萬もやあらん。此邊波蘭に比すれば、猶太人少きも猶二萬人中の七八百を占め、家屋衣食極めて汚極めて悪如何に人の賤観する所と爲るも、恬として耻ぢず。小利に眩迷して不潔の生活を下流に營ひ、さ東洋諸港に於ける支那人と一般なりとぞ。

春風始至

初め、中佐の獨露國境を越えて露都に入りし時は、チバ河を始め、數多の河々猶堅氷を結び、騎して以て涉る可りけるが、馬を露都に留むる者十五日の間に、春風漸く生じ、暖氣始めて至り、露都出發の後、は路を埋めし雪既に解け、初めて道路泥濘と爲り、ネバ河を除くの外は、川々の水も亦盡く解け、去れば氷雪を踏むとは違ひて、路の泥濘なる爲に、馬蹄を苦しむること甚しく、且つ凱旋の足に疵ありしが、爲め騎行困難なりけれども、馬具屋の主人が教へし、英吉利製のチヤレ薬を塗りてやうく、諾哥羅都に達しけるが、其頃には馬足の疵も稍癒へて、膿も出でざりけり。國境

外臣舉盞遙
祝天皇陛下
萬歲

よりデナブルク迄は地として駐兵あらざるなく士官は大抵獨佛語を操るをもて中佐露語を知らざるもさして不便なきより習はんとせざりけるがデナブルク以後は殆んど露西亞語に非ざれば日常の用をも辨する能はず去れば中佐は日に數語を習ひ覺ゆけれども日猶淺く新聲未だ滑ならずして不便尠からず前日諾哥羅都の旅館の名は聞き置さけるも既に諾哥羅都に入りて其所在を知らず如何はせんと困ふしけるがやうく三十哥を馬車屋の男と與へて案内を頼みサロヤ、と云ふ旅館に入るを得露都を出でより四日目に始めて暖爐もて煖めし部屋に入り肉汁と焼肉とに空腹を養ひ夢を和らかく温かさ寢臺の上に結ぶを得けり中佐の愉快知る可きのみ此の地に獨逸帝皇を名譽長に戴ける歩兵一聯隊屯成す聯隊長は中佐嘗て獨逸のプレスラウに於ける陸軍大演習の時相見し舊知なり中佐の到着を聞くや直に來りて旅館を訪ひ手を握りて久闊を叙し閑談時を移せり翌日出立の時は聯隊の名を以て紀念章を贈り且つ將校一同を率ゐて市外に送りシヤンパンを酌み一同盞を舉げて遙に我天皇陛下の萬歲を祝し奉り更に中佐の無事成功を祈り特に樂手をして日本進軍の譜を奏せしめて以て之を送りけり予輩は他國軍人が温き同情を帝國軍人に表せしと如此く殷んなりしを聞きて雀躍に堪へず而して中佐が暖氣の生せしと共に無形の春風にすら征衣を吹かれしを賀せざるを得ず

文士惜別

明くれば四月十三日なり見送れる歩兵將校等と諾哥羅都の市外に別れ單騎馬に鞭ちて行く既にして一騎追ひ至る之を問へば脚本作者にして其作る所の脚本常に莫斯科の劇場に演せらるると云ふ彼ハ哥薩克騎兵の鞍に乗り同騎兵の鞭を携へたるが中佐に向ひて予は平生騎馬武者の勇壯を愛し馬具皆騎兵のを用ゆ今貴下の壯圖を聞き欽慕措く能はず筆を抛ちて鞭を擧げ馳せて貴下を追へりし此に相見ゆるを得て欣幸に堪へずと猶も前途の經過地を問ひ豫定日數なき尋ねて感奮措く能はず且つ問うて曰く貴下妻子ありやと中佐ハ妻もあり子も四人もてりと答へければ彼は痛く其中に感ずるもの、如く真情色に溢れて我等も妻子あり我心に思ひくらべてます、貴下が遠征の尋常あらぬを知れり過ぐる所の地は人情風俗の殊なれるのみか日用を足す言語さへ異あり慣れぬ氣候には鐵石の身も叶ふまじく蒙古滿洲に至りては人野にして地險なり最愛の妻子を幾千里の外に置き置きて單騎此の危險なる遠征を企だつ子れ貴下の前途を思ふて悚然たら

四十六

ざる能はずきと物語る諾哥羅都より十露里ばかりの處に寺あり彼の脚本者は此の寺門の前に至りて別を中佐に告げり中佐行くこと未だ幾ならずして背後に又も馬蹄の聲あり願みれば則彼の脚本作者なり言殘せし事ありてかど問へば否々予れ既に貴下と別れて歸路に就きしも馬上再び貴下の事を思ひ黯然魂を消し情別るゝに忍びず因て又來り送り請ふ貴下を今夜の宿所に送らんと中佐厚意を謝し相伴ひてゆく嗚呼彼は常に脚本の上に人情の微を描き世故の變を寫すをもて平生人事に向ても亦同感多きものなりけん彼が真情の流露如此きをもて彼の作も亦巧に人情を寫せるを知るべし既にして又背後に馬三頭に轡を牽かせ來る者あり近くに及んで知る是れ諾哥羅都市の警視監と書記官との相伴うて來り送るものなるを此の日は馬の足を休めんとて僅に二十五露里をゆきてプラニツと云ふ村に宿す此の村は莫斯科彼得堡間の鐵道未だ通せざりし日は沿道の一大驛にして驛馬三百頭を養ひけるが鐵道通じて後は旅客頓に減じて今は寂寥たる一寒村に過ぎず去れば今夜は例の鶏卵と黒麵包とのみと覺悟し居けるに日暮又も一人の警部靚装せる三貴夫人を伴ひて諾哥羅都より來り送るあり夫人皆美調理したる肉類をさへ携へ來て饗應等閑ならず中佐思の外なる美人の前に

農家朴直

美味を食うて數客圍鏡談笑時を移しけるころ眞に客中の一快事なりけれ此の夜八時頃脚本作者及び他の三客と三美人とは別を告げて諾哥羅都に歸りけり

或る日中佐野原の中の小村に入り馬を休めんとて其ぞと覺し家を索ひれども皆いと貧しげなる百姓家のみなりけり但或る破屋に入りて戸を叩きければ内より七つ八つの兒童寒中に薄き破衣一つまとひて跣足なるが立出けり中佐の面貌衣服の異なるを怪しみ顔に又も奥の方へ驅戻りつ斯くと母親に告げけん汚れ果てたる襤褸をまとひいと見そぼらしき女房同じく跣にて出來り田舎者の習ひ辭儀もせず只訝かしげに中佐の顔打守りけり中佐馬を休めんと思ふが脚はなきかと問へばお安き事なりとて脚を持出で與へけり中佐繋ぎたる馬に食はせ暫らく休みて立出んとし艸の代にとて二十哥を與へけるに彼の女房脚は此の邊の多きもの二十哥の價なしとて辭して受けず否々心ばかりのお禮ぞとて渡さんどすれども受けざるより兒童によき物買うて與へよと云棄てし置きて立出けり其朴實率直なる彼の猶太人の狡狴とは天地の差わり露西亞の人民が深く猶太人を厭うて國外に逐ひしも亦宜なり

逆旅厚意

脚本作者及び三美人等の歸りし後チギン藥を馬足に塗り家内の人々を集めて談笑時を移し借て枕に就きけるも臭虫蟬集して安眠する能はず曉方の二時頃やうく疲れ果て、一睡し翌十四日の午前九時十五分ブツニツを出づ凱旋の足疾猶未だ全く癒えざるが爲に早足を用ゆる能はずいつも並足のみなりけるが馬も此頃ハ慣れて並足一時間能く六露里を行くを得けり天はやうく暖になりゆき路のやうく南に向ふをもて行くに随ひて雪漸く淺し此まで晴れ渡れる日光雪に映じて反射すべく遠方を放曠しかねし時もありけるが此の日は又朝まだきより雪降りしきり風さへ加はりて風雪交々面を打つゝ眼を放ちて進み難く帽子眉深に打被り面を背向けて行きけり去れば正午までは列氏五度なりし氣候は俄に下りて零下二度に至り肌膚疼痛を覺わければ今夜は如何なる宿にか眠らん哉れし馬をも休むべき處あれがしなと思ひやりつゝ單騎風雪の中を行きける折しも一臺の橋に遇へり見れば一人の男若き女と共に打乗りけるが近くに及びて帽を打振り口を齊しうして其健康を祝し且つかねて貴下が今日此處を過り玉ふべしと聞きて痛く御待ち申せしが生憎くや今日は此の風雪無かし途上難義ならん

せめて途中までれ迎へ申さんどて打連れて参りたり今夜の宿所も早や用意しつゝいさ來玉へと云ふ中佐深く其厚意を謝して連れ立ちつゝプラニツツより五十四露里あるクレヌツツオフと云ふ處に着きしは午後七時十五分ありけり斯くて二人に伴はれて旅宿に着き始めて彼の男は此の旅宿の主人にして女は其妻なりと知りけり清潔なる二室を中佐の起臥に充て處をさへ準備して用意周到待遇極めて懇なり此の日馬尤疲れけるに圖らずも斯る周旋に遇ひけるは天の賜とや云はん翌日出立せんとして宿料を與へんとすれども主人いつかな受取らず飲慕の餘にこそお世話申したれ謝禮を食らんとにはあらずとて強ちに辭しければ送方なく婢僕にとて些少の茶代を殘し置き紀念の爲に寫眞一葉を與へて別れけり陰險にして輕薄なる世の中に斯く情厚きものもありけり

萬大吠虛

此の日中佐のクレヌツツオフの逆旅に投するや老幼群集して觀る者堵の如し皆中佐の馬を指さし相謂て曰く是れこそ彼の新聞に出でしアルハンブラと云ふ馬なれとアルハンブラとは西班牙の市の名にして空中の樓閣と云ふ意味の普通談語となれるものなり是より先き中佐の馬に跨りて伯林を出で、より其壯圖の

歐人猜忌。
有欲妨
騎行傷
者名

成否に關する噂の至歐に驚々たり或は成らんと云ひ或は中止すらんと評し遂に
巨金を賭して成否を論ずるに至り中止すべしと評せし者は新聞に投書して種々
の説を傳へ且つ斯る冒險的遠征は歐人の専有と誇りし輩は其日本軍人に因て企
てられしを見て猜忌嫉妬の念を生じ騎行を妨げ且つ名譽を傷けんとする者もあ
り是より於てか種々なる浮説は新聞に因て傳へられけるが彼の空中樓閣と云へる
意義の語を以て馬に名づけしが如きも亦之を傷つけんとせし新聞の報道なるべ
し淺劣と云はん

人跡太稀

十五日のレスツォフを立ちて行くこと五十三露里ワルダイ市に一泊す此處は市
とは云へど人烟稀疎道路險惡寥々たる一村落到過ぎず翌日雨を衝きて出づ露國
に入りてこのかた雨に遇ひしは此の日を始と爲す過ぐる所の道は鬱々として奥
も知られぬ大森林なり林中の雪漸く解けそめて泥濘に和し簇々として深く馬蹄
を没し騎行尤難ゆり此の日行くこと四十六露里ツゼンキノーに宿す此の邊人
跡甚だ稀にワルダイよりウツゼンキノーまでの全距離間に相遇ひしは橋七臺八五
人に過ぎず四十六露里と云ふば東京小田原間なり東京より小田原まで鐵道寂寥

たる大森林にして一日僅に五人の旅客と七輛の人力車に遇へりと假定して此の
光景を想像せば蓋し當らん

臭蟲來攻

此の日朝來の雨の晝頃より變じて大雪と爲り騎行困難なりけるよりウツゼンキノ
ーに着きし頃は午後七時なりけり直に巡査の有無を問へば警察署ありと云ふ尋
ねゆきて案内を乞へば巡査は近所の寺にゆきて居らず老婆一人留守し居けり用
事あれば寺へゆきて巡査を呼びて呉れよと頼めども面影らして承知せず中佐乃
ち一葉の名刺に十哥を添へて差出しければ老婆銅貨を見て心動き去らば呼び
來らんとて門を出んとする時巡査の歸り來りて何の用ぞと問ふ宿所の世話を頼
みしに何とか心得けん響へ方なきほど不潔なる百姓家に伴ひけり先づ厩を檢す
れば雨思のまゝに漏り雪解けて去年の馬糞を泥と相和して不潔言ふ可らず所詮
疲れし馬を繋ぎて休ませんことなりがたければ糞を少し周旋して呉れよと頼み
けれども巡査諸がのさだ方なければ又疲馬を驅りて次の宿までゆかんとて用意
せしに巡査後日の沙汰やおそろしかりけんやうく糞を周旋しけるにぞ其を厩
に敷きて馬を休ませ我身は彼のむさぐるしき百姓家に一夜を明しけるが臭蟲群

り来りて手をさし足をさし音筋をさして終夜得寝られざりけり
邂逅相遇
厥後二日にして百零四露里をゆき四月廿日タルヂヨックに若す此處に駐在せる
後備軍司令官来り訪ふ其夫人は中佐嘗て伯林に在りし時同家下宿屋に同宿せし
ことあり固より舊識なれば互に奇遇を喜び興に往事を談じて待遇尤 惻に爲
に夜會を催はして之を慶しけり

馬始踏土

翌日午前九時タルヂヨックを出づ此の日風和かに日暖にして正午には列氏五
度に止りけり去れば途上の雪も亦此の頃には盡く解けて道路泥濘地勢漸く下り
て雪解の水をすく路に溢れ昨日の氷田今日は一大湖川と爲り路傍の溝渠にも
水増して奔流激湍時に道路に溢れければ一度なごは馬恐れて得渉らす中佐下馬
して牽めて渉りけるが深さ尺餘もありけり此よりいよいよゆきて雪いはく消
ぬ途に全く殘雪を見ず冰雪の上をのみ行きし馬は此の日二箇月目に土を踏むこ
とを得けり此の日行くと三十三露里午後三時ミニドノエにぞ着ける

流氷鎖河

氷塊堆積。
河水爲之
横溢。殆浸
一村。

ミニドノエ村ハオルガ河の一支流に臨めり支流の幅四十間ばかりなり中佐猶日
も高ければ川を涉らんと思ひ川に臨みて渡舟を呼びしに此の日上流より流れ來
る氷塊の高さ三四尺ばかりなるが絶間なく渡頭に横はりて舟を行る可らず大難
石の如きもの幾個も轉り來るに舟を衝きあつれば忽ち打碎かれて人馬を傷ぶ
こと多しとて如何に舟子をはげませども舟を出さぬより此夜は遂に此の村の一
農家に宿しけり夜深けて門外いづ騒がしく村人數多右往左往に立ち騒きて何や
らん罵り廻る聲只事ならぬに申佐目を覺まし門邊に立出で、何事ぞと問ふは彼
の流れ來れる氷塊下流に堆積して水之が爲に横溢して殆んど村を浸さんばかり
なるに氷を押し流さんとするれば上流より流れ重なりて埒明かず水は空すく溢る
るに驚きて家財道具を運ぶなりと云ふ斯くて曉方に至りて下流の氷塊やうく
流れ去て水減じければ人聲も亦静まりけり此の河の水源は北方より故に下流
は氷疾くは解けられ上流は今こそやうく解けそめしものなりければ
對岸有酒
翌日待てども氷塊の流れ來ると絶間なく渉ることを得ず晝頃にはやうく
流水破せしをもて舟子をはげましで涉らんとすれども猶危険なりとて棒を操ら

中佐此は酒手を興へてだますに如かずと思ひ斯くと舟子に告げんとすれども此の時は猶露語に熟せざりければ思ふまゝに言へず因て前岸を指さしつゝ彼處澤山焼酎とやうに單語を並べければ酒に目のなき舟子は一を聞きて十を悟り怖さも打忘れて舟の用意などすさて用意出来て凱旋を載せんとするに此まて水の張詰りし河をのみ渡りし馬は廣やかなる水すさまじき響して流れ来る水塊を見て打驚き牽けども舟に乗らず遂に渡舟に乗慣れたる村の農馬を借り來りて先に乗せければやうに凱旋も乗移りけり水急なれば舟は上流に向て漕ぎ流れ来る大水塊の絶間を縫ふて漕渡る其危ふきこと言ふ可からず棧に前岸に連するを得て酒手を舟子に興へければ舟子むくつけき面に笑を含みて彼方を漕戻りけり此の邊雪は全く解け盡して道路土を露はし雷める土地は一面の湖水を爲して景色を添へ氣候もやうやう暖になりしより胸襟快活を覺ゆ馬上吟と且の歌ひの行く處の二十六露里忽ち路傍に一大煉瓦作の營ゆるを見る是れ輕騎兵第一聯隊兵營なり門前に立てる一下士官迎へて中佐に謂つて曰く昨は聯隊長を始め士官皆將校團に會して貴下の至るを待ちしも終日其影を見ず必定途中に陣ありけんとして兼皆懸念せしに安着欣賞に堪へずと中佐聯隊長の在る所を

問へばツウエル市に歸れりと云ふ此の兵營はオルガ河の左岸に臨み河を隔て、ツウエル市と相對す市は右岸に連亘し將校皆此に住す下士官又曰く昨夜聯隊長の河を渡りて家に歸らんとするや渡舟流水に衝突して殆んど打碎かれんとせりと人を渡す小舟すら危険なること如此し大船に馬をのせて渡らんと思ひも寄らず因て逗留と決し此夜は騎兵大尉の官舎に一宿す待遇丁寧ありけり

鼓舞將士

翌日聯隊長は流水を冒してツウエル市より來り訪ひ導かて其がツウエル市の官舎に至り晚餐を饗し相伴ふて市街を一覽せりツウエル市は莫斯科彼得堡間尤繁華の地なり聯隊長の名をリーゼンカンブと云ひ先帝の侍從武官たりし人にして其夫人は波蘭の名士バクルプスキ氏の一女なりバ氏當時、戈を把りて露に叛き雄圖世を驚かせしも一朝事敗れて捕へられ悉比利に捕せられ恨を杖楚の下に呑むこと二十餘年期滿ちて免さる乃ち節を折りて商業に従事し辛苦經營備に艱苦を嘗み遂に酒造を以て家道を回復し生業日に盛に富巨萬を累ね悉比利の各地支店ありざるなく悉比利中屈指の豪商とぞ爲りける艱苦を嘗むる始の如く能く暴虐を刑餘に致すことバ氏の如きもの蓋し希なり一偉人と云はざる可けんや

氏既に歿し三子業を嗣ぐ聯隊長の夫人も亦父の艱苦を目撃し世故人情に通じ尤同情に富むをもて中佐の遠征を稱すると共に前途の不便を察し聯隊長と謀りて悉比利各地に於けるバ氏の支店に向て町摩なる添書を興へけり夫人の真情抱すべし翌日中佐辭して出づ聯隊長は青年士官及び學生を獎勵せんが爲に中佐に贈るに紀念章を以て部下の將校一同及び此地建設の騎兵士官學校學生并に樂手一隊を率ゐて市外に送り夫人も亦た小兒を抱きて車に上り遠く送りて市外に至れ

入莫斯科

莫斯科に近づくに隨うて權權をまといひて跣足のままなる貧民の路頭にさまよふを見るいよゝゝ行きて貧民いよゝゝ多きをもて中佐は漸く露國の饑饉地方に近づけるを知れり斯くて行くこと三日百五十八露里にして四月廿四日の午後六時莫斯科に入りけり彼得堡より莫斯科まで我百八十一里十四日の豫定なりけれど雪解の折から道路泥濘騎行に便ならざりしと流水河を鎖して渉るを得ざりしとの爲に十六日を費しけり斯くて馬を留むる者十二日

氣候劇變

五月七日の午前九時莫斯科輕騎兵營内の宿所を出づ此の日旅團長の問兵の故を以て獨り騎兵將校數十名をして送りて市外に至らじひ兵營より市の東端に至るまで殆んど十露里路は圓石を敷けるをもて市外に出づる頃は馬已に疲れけり中佐莫斯科に留まる者十二日其間に氣候劇に變じ溫暖忽ち加はり四顧すれば新樹緑深く蒼翠眼に滿ち路傍の野草も亦やうく咲き初めて紅花處々に點綴せり此の路鐵道線路に沿ふをもて此處の丘の邊彼處の森の中別莊を築るもの多く白き壁青き扉なぞ木の間に見ぬの隠れつ風光極めて好きに目も心も慰められつゝ行く晝過ぎる頃より西の空に黒雲屯し雷鳴遠く聞えけり是れ今年の初雷なり北方の氣候は殆んど春秋の二季なく冬より直に夏に入るが如しとなりさて馬は十二日間も休めしに拘らず此の日左の足跛をひきけり行くこと五十一露里ボロ

北方氣候
無二春秋二
季

困頓道塗

嗚呼予は再び凱旋の事を記さざる可らざる順序と爲れり次日中佐行くこと四十五露里バクシフに至る今日ハ伯林を出でバより八十八日目にして其間或は堅氷を履み或は積雪を踏み或は泥濘の中を行きて騎行甚だ難かりけるが今や天は暖

に路は平にして遠きは新緑の色深く近きは野草の花紅にして心清く氣爽なり
人馬も此の風日晴蕩の光景に對して前日の困難を忘れんとするに當り又も
悲むべく怨むべく事こそあれ其は他ならず斯る困難を安らかに蹈み來りし凱旋
が此の長閑なる時に及んで却て足疾ますしく悪しくなりし事はなり今日二十五
露里ばかりも來しと思ふ頃より足並おしく行歩大だ難くなりて見るだに哀なり
ければ中佐は且つ乗り且つ歩いて行きてバクレンを去る一露里ばかり
の處に來し時は凱旋の足痛みて得進まず時に昨日までは西の方遙に屯せし黒雲
漸く迫り忽ちにして一天墨を撒し雷鳴り電奔り天地も動かんばかりすま
しき景色冠爲りて霞はへ霞さへ交下りて彈丸の飛かふ如く人馬を襲ふに心の
み焦燥ちあせれども馬は足痛みて進み得ず且つ鞭ち且つ行きて幾はバクレン市
の處に達するを得斯くて警部長の宅を訪れけるに警部長出迎へウラガミル
州知事より貴下到着しなば好く待遇せよとの命を受けぬ今宵は予家に一宿し五
へと云ふ因で一宿と決し先何は扱置き馬を厩に繋ぎ獸醫を招きて診察せしむれ
ば是れ疲勞のみ何程の事かあらんとて事もなげに云捨て後に龍腦下盤を塗りし
のみ翌日獸醫は出立をすゝめられども逗留して馬を休め後備軍司令官と與は市

中を一覽す翌五月十日は五百有餘日の長旅行中尤も記應すべき日なり馬は猶病
んで行く能はず然れども獸醫は出立を勧めて曰ます中佐は驟然病馬に鞭ちて起
てり此の地より始めて保護の爲に巡查一名をして送らしむ此迄は絶て無き事
なりき騎行機に十八露里其間農家に休息せしこと二回或は徒歩し或は徐行して
出來得る限り休めけれども二度目に休息せし時の繋ぎし馬立ち得て其まゝ地上
に臥しけり中佐は此の憐むべき病馬を牽きつゝ又も四露里ゆきし時は馬遂に困
頓進まず乃ち巡查の乗れる車の後に繋ぎ中佐は其傍を去らず或は其背を撫で或
は其首を摩り又は鞭ちてれどしつすかしの徒歩すること十三露里にしてホルガ
ノ驛に達せしは午後一時なりけり部長之を驛外に迎へ導いて其家に至る

感慨如山

凱旋の末路は予既に詳に之を馬の條下に記したりき而して予の三たび意を致
すは實に其關する所の小ならざればなり翌十一日ウラヂミルの獸醫を招けども
至らずバクレンの醫來り診して曰く是れ急性癱瘓質漸なりと乃ち此の夜一時三
十分を以て流車に上り再び莫斯科に至りて新馬烏拉を買ふ莫斯科に還る時流
車の窓より望めば蒼々たる新樹落々たる茅屋前日鞍轡本凱旋に跨りて過ざる

千恨萬愁

や観て以て心を惜ばし目を慰めし所以の者風光依稀青眼來り迎へて而して日夕相憐みし凱旋は病臥彼が如し中佐窓に倚て願望近事を回想すれば千恨萬愁歷々心頭に攪りて感慨禁する能はず涙潜々として下るを覺えざりけり

與凱旋訣

越えて五日五月十六日新馬島拉を流車に載せてボルヂノ驛に歸る此の流車は下等列車にして一輛に四十餘人を容る客は大抵農民工夫等なり露國の流車上中下三等あれども上中等の客は少きをもて下等のみの列車を發すること多しと云ふ翌日試乗す此の日病馬の元氣を養はんとして幸き來り郡長の家の庭なる青草の上に臥さしむ明日はいよいよ永訣と思へば名殘惜しさに堪へず屢庭上に至りて殆んど泣かぬばかりに遂には堪へ得ず涙ながらに嗚呼凱旋よ長々の間辛苦をさせし果は此の有様さても不憫の者かな嗚呼痛むらん又口惜しがるらんなど人に物言ふ如く其首筋を撫でさすりて慰めつゝ青草を取りて食はせ又は扇もて背上に群れる蚊を逐ひなせし終日馬の傍を離れかねけり凱旋も亦病みつかれても不幸を思ひるものなき中に長く事べて親しみ睦みし主人に慰められてうれしきかなしきや堪へざりけん又は虫が知らして訣別と思ひけん中佐の至る毎にい

動耳哀嘶。惜別如人

つにまさりてうれしげに雙の耳を動かし哀げに嘶きて唇を顫はしつゝ何やらん語らまはしげなるに中佐はますます悲しみに堪へず走り寄りては馬背を撫して涙を呑みけり試みに馬を人と視て想へかし八十餘日の間只二人相伴うて氷の上雪の中を旅立ち言ふに餘れる艱難辛苦を同うして一人は旅路に病み臥し一人は病む人を殘し置きて又も幾千里の旅の空に行方も知らず立出でん時の二人の別や如何ならん言ひ度き事語り度き事人ならば如何にかかりけん馬は言語の通せぬが爲に只嘶きて別を惜しむのみ其心の中争で人に譲らん彼が動かしけん耳の底彼か顫はしけん唇の奥に幾千緒の恨をや含みけん門違ひせる犬巷陌にさまやうこと久しうして路に舊主に遇へん尾を動かし夜深けて路に迷ふも馬は家路を知りて主人を助く犬馬は獸の靈なる者なり故に予れ益々凱旋の情を悲しみて而して其事を記すに忍びざるなり

臨訣剪鬣

中佐將に其鬣十八日を以てボルヂノ驛を出んとす乃ち庭上に下立ちて別を凱旋に告げ紀念の印に鬣の毛を剪取り之を懷に收め去らんと欲して脚躡幾度か立戻りけるが馬も亦双の前足を集めて且嘶きつゝ立んとし能はず其情人の袖に縋り

嗚呼凱旋
可_〇以_〇頌_〇矣

裳にまのほりて名残を惜しむにもまさりて哀に鐵心石膚の丈夫をして泣かしめ
けり中佐子と凱旋の事を語る毎に未だ嘗て双眼をしばた、かすんばあらず蓋し
其の當日の恨は深く骨髓に印して忘るゝ能はざるなり遂に手に謂て曰く君は凱
旋を知る者なり請ふ此の紀念物を分たんと乃ち一旅囊を探り數莖の鬣毛を取り
て與へらる予れ受けて之を觀中佐と相顧て黯然語る能はず因て辭して歸り水
を鬣毛に注ぎて之を机上に置き遙に其靈に告げて曰く汝をして一万四千吉羅の
全行程を踏遍からしむる能はざらしめしは汝の罪に非らざるなり汝の勇は舉世
之を知り汝の病は舉世之を哀しむ而して舉世の人に代り其知と哀とを銘する者
は汝の主人なり汝が主人の手記に曰く嗚呼凱旋は勇氣健蹄能く堅氷積雪の中を
行く者二千六百吉羅希世の駿なり今春時の好天に際し病臥如此し遺憾何ぞ限ら
ん然れども此の好經驗の英國産の乘馬が露國寒地の旅行に堪ゆるを證するに餘
あり嗚呼凱旋よ汝は此の一言に因て長く偉功を簡冊に録するを得嗚呼凱旋以て
眼す可し

暑氣既至

今茲明治廿六年七月十四日の午前十時予れ中佐を牛込の邸に訪ふ中佐寒暖計を

檢すれば列氏二十度なり曰く予が五月十八日の午後三十分凱旋と訣れてボルヂ
ノを立ちし時正に列氏二十度なり其相去ること五十餘日にして暑氣は相同じ
以て其冬より夏に移るの早きを知るべしと中佐此の日過る所の路並木なく馬上
炎日に曝されつゝ行き途中にて綿布製造場に休息しけり此の製造場は職工男女
八百名を使用し十二留より四五留の月給を興へて盛に製造に従事すと云
ふウラヂミルより八露里ばかり此方に來掛れば或は馬に乗り或は自轉車に乗り
て出でて迎ふる者多し中には酒肴を携へしもあり凱旋の不幸を慰め且つ安着を
祝して歡呼の聲いと喧しかりけり午後九時ウラヂミル市に着すボルヂノを去
ること四十露里なりボルヂノの郡長及び巡査一名送りて此に至れりウラヂミル
市はウラヂミル州の首府にして州知事此に治む步兵一聯隊屯成す歩兵將校は
め旅宿を準備して中佐を延き接待掛として士官一名を附け馬は消防隊の底に繋
ぎけり借斯る長途の大旅行に用ゆる乗馬は先づ一月ばかりも一日十露里ばかり
づつ試乗して其蹄を慣はる可らず去れども旅行中に買ひし馬は其暇なきをも
て旅行しつゝ其足を慣す可と爲す最初より急に乗積くれば馬をしば早く疲れ
しむるを免れず因て其翌日は一日逗留して馬を休め歩兵の野營地并に消防隊の

演習を一覽す此の地小市街なれども一州の首府なれば消防夫四十人馬三十頭消防機械十二輛を備へ警鐘一聲の下準備整頓して急に赴くは五分間を出でずとなり明くれば五月廿日午前八時程を起す一巡查騎行して宿次に送りけり此の日正午には列氏二十二度に上り路に綠蔭なく風死して熱甚しく流汗衣を濕はし馬も亦疲るゝこと甚し行くこと四十四露里ドロズドバに着きし頃は午後七時十五分なりドロズドバは一小寒村にして茶鶏卵黒麵麴の外は二物なく夜は木の長椅子二脚を並べて寝臺を爲し其が上に林を敷き外套をまといて纔に夢を結ぶを得けり

一 小都會

ドロズドバ以西百七十一露里を五日間に行きて五月廿五日の午後六時ニデニノゴロド市に着しけりニデニノゴロドより三十五露里此方の森の中に一軒家あり是れニデゴロツキ州とウラヂミル州との境界なりニデゴロツキ州知事は警部巡查各一名をして此に迎へしむ此の邊一帶の森林鬱々として其深さを知らず北の方の直に北氷洋上に連亘せり林中屢々火あり昨年の山火事の如きは三月滅ぬざりしとしかや以て其森林の大なるを知るべし中佐彼の二人と相伴ら

て林を穿ちオルガ河上に至りかねて知事の用意しつゝる汽船に乗りて河を渡りニデニノゴロツキ州の首府に入りて一旅宿に投じけり此のニデニノゴロツキ市はニデゴロツキ州の臨みて地勢稍高く遙に左岸を望めり眼界の極まる處盡く蒼蒼露里オルガ河に臨みて地勢稍高く遙に左岸を望めり眼界の極まる處盡く蒼蒼鬱たる森林なり此の地莫斯科以西の一都會にして毎年一回開市し露國各地の商賈は勿論中央亞細亞高加索波斯等諸國の商人も亦市場に來り集まりて交易を爲す市場の建築は我勸工場の大なるものにして規模甚だ宏に以て物貨集散の盛なるを卜すべしと云ふ

泛舟遊流

中佐馬を休ませ且つ市内を一覽せんが爲に此の地に留まる者三日廿六日は知事午餐の饗宴に赴き晩に陸軍大將の夜會に列し廿七日廿八日の二日は知事の晚餐に赴き惻切なる待遇を受けり廿八日晩餐後警部長と共に消防隊に至り其演習を覽る此地の消防夫は四組なりとを遂に警察署の小蒸氣船をオルカ河に泛べ流に遊りて風景を看る此の河左岸は一面の平野深林にして蒼然たる樹色烟を帯びて倒映し右岸は地稍高く白壁蒼瓦其上に巍然とし斜照と相映帯して河上に落ち

水波激速船中を行く伯林を發して以來始めて斯の好光景に遇ふて流連返るを忘
れけり此の河汽船の往復織るが如く上流はツウエルに至り下流は裏海口なるア
ストライン府及び東北の方比耳摩に達して鐵道線路に接す川船中間々米國形の
樓船あり夜は滿船電燈を點じ燦然として水の上を行くさま火龍の奔るにも比へ
んばかりなりと云

賢牧好官

ニデゴロツキ州知事海軍少將バラソフ氏中佐を待つこと尤懇切なりけりバ
ラソフ少將は年五十有餘露土戦争の際には水雷艇を以て土耳其の鋼鐵艦をダニ
ユイブ河上に破碎せし武功の人あるが獨り兵事に長ずるのみならず亦治民の術
に達し深く心を下情に留め民を愛すること子の如し是をもて民も亦其徳に化し
之を視ること父の如く知事の外出するや老となく少となく帽を脱して敬禮を施
さるはなし其夫人亦婦徳に富み慈善の心深く此の邊三年間の大饑饉には或は
金を散じ或は物を恵みて貧民を救助し又一小屋を官舎の傍に建て孤兒又は貧
兒を集めて養ひ且つ教育し居れりとなん賢牧良妻雙璧と云ふべし此の地の警部
長も心を盡して中佐を待ちけり警部長は職に在る者此に五十年此の地に留まる

露國官吏
任期尙久

者二十五年の久しきに及べりとぞ亦一箇の好官なる哉露國にては官吏をして職
を守りて移らしめず任期尤久しく同じ地方に在りて人情風俗を熟知せしめ以て
行政の便を圖らしむ武官も亦然りと云

寒村有春

五月廿九日午前六時上諾哥羅都を立ちて行くこと四十二露里チヨルヌハ村に着
き驛舎に投ず此の日雨甚しく全身皆濕ひ衣帽盡く滴りけるを體温にて乾か
しけるが日暮驛舎に投じて固より一寒村に過ぎざれば例の鶏卵黒麵包に舌鼓
打ちしのみ旅境の荒寥たる如此なりしにも似て中佐の客情を慰むること切なり
しは此の夜の來客なりけり中佐の到着と聞くや村中の貴顯紳士は盡く驛舎に
來訪して來方を尋ね行末を問ひ滿腔の真情を以て其壯圖を稱へ其健康を稱りけ
るに予中佐も金殿玉樓の上に太宰の櫻を受くるにもましてうれしく茅屋暗燈の
下に互に胸襟をぶ披さける村中の貴顯紳士とは如何なる人々や村長巡查僧侶技
手小學教員等なり

道路甚大

其翌三十日チヨルヌハ村を立ちて六月一日ワシリヌスタに着し逗留一日又行

六十八
くこと六日加森に着きしは六月八日なり上諾哥羅都より加森に至る四百十五露里即ち我百十里餘なり此の數日間の天候は暴風曇天三日雨一日雷雨三日なり時に寒酸射を損せしをもて其度を確言する能はざるも熱氣蒸騰に堪へざりけり道はオルガ河に沿うて行く左岸は一望無際の際林にして右岸の丘陵連亘し風物甚だ美なり河の岸近く行く時は往々遊りゆく囚獄船を見けり囚徒は此迄陸路悉比利に送りしも近者は汽船汽車にて病徳沙港に送り直に薩哈連島に護送するもの多しとぞ上諾哥羅都迄の道路の石もて敷詰ゆあれども上諾哥羅都以東は復た築堆道を見ずいと平なる野途なり此の道は悉比利に行くもの、必ず經べき烏拉街道にして道路の規模廣大なる殆んど全歐中見る能はざる所其道幅は五十二メートル即ち我二十六間なり左右兩傍各三間の地に各二行の並木を植ゑつけ中央の二十間を以て人馬往來の處と爲す並木は皆樺の樹なり野途は築堆道に比して騎行太だ便に且つ兩傍四行の並木は枝葉茂り綠陰路を掩ひ以て熱氣を避く可し去れども鐵道線路上諾哥羅都に終り此地以東加森に至る迄の汽車の便なきも行旅の往來物貨の運搬は皆汽船に由りてオルガ河を上下するをもて河水氷結の時に非ざれば此の大道を行く者なく足跡蹄痕を綠樹青草の下に印するこ

一條大道。
全然牧場。

と殆ど希なり去れば斯る規模廣大なる道路も修覆行届かず並木風の爲に倒るゝも補はず溝渠雨の爲に壞るゝも繕はず一條の大道荒るゝにまかせ草の處得顔に生ひ茂りて深く馬蹄を埋むなり路傍村落の農夫は得たりかしと思ひて皆家畜を往來に放ちて思のまゝ草を路の上に食はしめ復た水草を逐ふを爲さず見渡せば一條の大道の上に牛馬羊豚の類三五或は立ち或は眠り斜陽芳草宛然たる好牧場なり上諾哥羅都より比耳摩に至るまで我二百六十五里間の光景總て如此し其幅は二十六間其延長は二百六十五里之を積算すれば大道變じて千四百八十八萬二千四百坪の大牧場と爲る廣く且つ大なりと云ふべし中佐は今や築堆道を離れて野途に入り和らかき土の上を馳せ青き草の中を驅り綠陰に涼を納れつゝ廣く且つ大なる道路を行くことの甚だ便にして且樂しきを喜びけるこゝ空望なりけれ新馬鳥拉は勢を殺がざる牡馬の性質猛悍なる者なりければ此の牧場に似たる大道に入りて路の上に放てる馬を見るや狂暴せず或時は中佐馬を下りて牽き來けるに忽ちにして狂奔一番中佐を引倒し百姓馬に飛びつきて疵を負はせ或時は同行の巡查の馬に噛みつきしこと二度一度は巡查身をかはしければ鞍の後輪に噛みつきて齒を打折りけり斯うしこと其幾度なるを知らず先には冰雪

七十
尽く解け騎行將に便ならんとして凱旋遊かす今は漸く善路に就き行路大だ易
うして新馬狂暴なり其道途の艱知るべきのみ

野有菜色

加森近傍の地は三年間大饑饉の中心なれば四顧荒涼生気殆んど消し目觸れ情感
する者人をして酸鼻に堪へざらしむ中佐の到る處やうく鶏卵黒麴を
過ぎず肉類なんど固より見るを得可らず時馬に食ますべき燕麥をさへ得る能
はずして麴粉を興へしことあり馬も最初の程こそ嫌ひたれ飢えては食を擇ば
ずして遂には喜び食ひけり地方官は各村落に救育所を設けて食物を給與し力を
盡して貧民を救助すれども猶路に餓死あり野有菜色あるを免れず其も其等平年
は黒麴一封度我四十斤の價六十哥なるに饑饉の爲に物價暴騰して前年は一
留六十哥 解氷交通の時に至りて猶一留三十哥を下らざらぬだに貴し
き露國人民此の食料品の價騰貴せるに遇ふて昏倒せざらんと欲するも得可らず
其妻子相伴うて食を道路に乞ふも亦宜ならずや或日中佐一小村の驛舎に宿せし
時十留の紙幣もて人をして興へしことを買はしめけるに彼れ歸りて釣銭を出し一留
は驛舎の主人に興へしと云ふ此は宿料の前拂なるべし翌日中佐出立んとして主

露人以茶 爲生命

露人好茶

人に砂糖と黒麴との價を問へば既に受取りしものから又も欲しくやありけん
一留と云ふ流石に顔は赤らみて小聲なり中佐一留を渡しければ二度取りし
て昨日の金は知らぬ顔あり又一日驛舎に在りけるに見苦しからぬ衣服着たる老
人入来て錢を興へよと云ふ其狀貧民とも見えぬを怪しみ逡巡に何者ぞと問へば
笑うて乞食なり錢をだに興へなば立去らんと云ひて逐ひやらんとせす中佐二
十哥を興へければ取かしらぬ顔して喜びて立去りけり一日驛舎の主人
に拂はんとて六十哥を机の上に置きけるに彼の主人は拂はで立去らん人の
を取取るか如くツト来て彼の錢を取りて禮を云ふことをも打忘れて立去りけり
其他乞食なせに攻められしとを數を知らず彼等の恥なきこと如此きは饑饉の結
果にもやあらん

露人の茶を好むこと甚しく朝の黒麴包をかちりて茶を大さき器もて七八盃
もしくは十數盃をも飲みて茶腹をこしらへ其他二食皆茶を飲むこと殆んど量な
く貴しきは砂糖をも添へて只牛の水飲ひ如く飲むを習なりける去れば中佐の過
ぎる處如何なる小村に入りても如何なる貧家を訪うても湯沸器を室内に見ざる

はなかりけり湯沸器は多く真鍮もて作れるが紅茶を煮るには此の器もて沸かせし湯に非ざれば味なしと爲せり蓋し我火鉢と鐵瓶とを一にしたらんやうなるものにして露國人必要の家具なり去れば三年間大饑饉の結果は人民盡く貧しく家に餘財なく有らゆる衣物家什をさへ賣りて飢を凌ぐに至る而して彼等はたどひ身の皮を剥ぎて賣るとも此の湯沸器は依然として室内に存し如何に不潔堪へ難き貧家の中にも此の湯沸器は磨き立てられて其餘の光赫々たり彼の海路直に狗德沙に送られもしくは駱駝の背に載せられて戈壁の大沙漠を渡り悉比利の野に入りて露國一般に輸入せらるゝこと夥しき支那製の磚茶紅茶は皆此の湯沸器に依りて消耗せらるとなんざても貴き器なるかな

駐兵寥寥

駐兵の密なるは莫斯科以西にして莫斯科以東は駐兵極めて粗に成營寥寥處處の村落に少數の豫備歩兵散在するを見るのみ而して彼等は常に囚徒の護送に従事せり去れば中佐此の邊に至りては巡查を以て宿次に送迎せられけるが村落漸く疎に人口も亦少き地に入りては警察署の設も亦く巡查の代には村々の百長什長等に退られけり

莫斯科以東 成營寥寥

次加森市

高爾噶河は加森に至りて幅甚だ廣く渡すに汽船を以て加森市は其左岸に瀕せり中佐既に河を渡りて市に入れば一警部導いて旅館に入る旅館は獨逸人の立つる所其善美を盡せる莫斯科以來未だ會て見ざるは必なりけり中佐滝留四日獨逸語を善くする一警部補は接待掛として常に中佐に隨從せり加森は加森州の首府にして莫斯科以東第一の都會なり東北はカマ河を遶りて比耳摩に通じ西北は高爾噶河を遶りてツウエルに達し東南は高爾噶河を下りてアストラカンに至り直に高加索波斯中央亞細亞と汽船を以て連絡すべく實に交通の要衝に屬し交易の繁盛を致す市中に演劇あり公園あり勸工場あり大學校あり博物館あり士官學校あり各種病院等あり工業又盛にして製造所殊に多く中にも著るしきは石輪製造所なり此は千八百五十五年の創設に係り今は一千五百人の職工を役し毎年石輪の製造高三拾萬封度一封度我四十斤に上り露國內地は勿論波斯高加索中央亞細亞の各地に輸出する者實に莫大なるが其製造原料は之をオーレンブルク州及び悉比利地方に取れり其が製造せる石輪中 그리스ソン製造所を設けて盛に之を製造し販路極めて廣きより製造所内特に 그리스ソン製造所を設けて盛に之を製造し

工業又盛

遂に之を石輪製造に用ゆるのみならず藥品として廣く四方を販ける高も亦少からず日本の商人も此の製造所と特約してグラスリンを輸入するものありとか聞けりと中佐の語れり

加森鞋靴

中佐加森に入るに及びては眼に觸るゝもの稍奇にして歐羅巴どもつかず亞細亞どもつかず殆んど歐亞相半するの地を觀るが如き心地ぞしける先づ目留りしは鞋靴人なりけり彼等の祖先は蒙古の盛時に當り成吉思汗に服従して露國に侵入し戦うて勝たざるなく攻めて取らざるも遂に窩爾喀河畔一帶を占領して國を建て部落を成せり所謂加森汗は是なり物換り星移り相去る殆んど八百年蒙古衰亡山河主を代へて而して其子孫は今猶舊土に生息繁殖して加森市の一部分は鞋靴人の住する所たりと云ふ以て其昔時の盛を想見すべし彼等の面貌は他の黄色人種と異なるなし但骨格甚だ大なり衣は筒袖にして胸に一行紐を用ひ長さは垂れて膝を掩ひ帽は土耳其帽に似たる縁なしの毛帽を戴けり露人と相居る數世紀而も猶婚嫁相通せず故に中には露語に通ずるもあれ彼等の全部は猶鞋靴語を操れり婦人の衣服に至りては尤奇にして種々の色を出したる布を用ひ袖はい

鞋靴遺類之保守

と廣く裳は開き更にさまざまの色を被きたれば髪は見えす鞋靴人は皆回々教を信ず數多の寺院を建てたるが市上に半月形の塔を安置したる建物は皆回々教寺院なること一見辨すべしと云ふ

晝宿夜行

時に暑氣益騰り炎威熾くが如く日中は上りて列氏の二十五度乃至三十度に至り炎天烈日の下を行くは乘馬の氣息忽ち迫り流汗濺の如く行くこと未だ數里ならずして疲勞忽ち至り加之のみならず晝は蚊虻蜂馬蠅等毒蟲群飛集して馬其煩悶痛苦に堪へず且つ彼の牧場に似たる道路に草を食ひ馬群を見るや狂奔蹄且迫り且眺みて食量漸く減じて困憊日に甚し中佐も亦黒羅紗の冬服の上は夏外套を襲ねて烈日に曝露し酷熱に堪へずして呼吸苦しく屢嘔吐を催はし殆んど日射病に感せん恐ありければ加森以東は晝宿夜行と決したり夜は稍涼しきのみならず彼の毒蟲も少く路上の馬群も散じ盡くして騎行に便なればなり

夜行大便

中佐の加森を發せしは六月十三日の午後八時十五分にして此の夜を夜行の始と

爲す時に此の日正午には列氏卅度に上りけり此月廿八日比耳摩に着す加森より
比耳摩まで六百十八吉羅我が百五十四里日を費すこと十五日なれども其間逗留
二日を除き騎行實に十三日一夜平均凡う十二里之上諾哥羅都より加森に至る
まで百十里間を十日に乗りしに比すれば多きこと一日大約一里なり是れ夜行の
利便に頼れるものにして夜は馬も涼しきのみならず天地静なれば些少の物音に
も驚き易くて足掻いと早かきければなり此の百五十四里間の蒼鬱たる大森林に
して其間にアルムツエオンスクの二小市街あるのみ他は皆蕭條たる寒村林樹
の間に落々たるのみ中佐此の邊の林中には豺狼多く且つ凶年饑歳の爲に盜賊出
没絶えずと聞きければも深夜單騎林を穿ちて而して行き只星斗の樹梢に爛々た
るを見しのみ絶えて豺狼盜賊の影をも見ざりけり加森より以東は巡查一名づ
毎驛交代に附添ひて見送りけるがウツカ州に入りては村里とても少く人家も
いと疎なれば固より警察官の配置も少きより巡查に代りて見送れるは村々の百
長什長等にして彼等は饑饉にも生殘り且つ賣殘されたる瘦馬に慈なご敷きて
賽佐野源左に打跨りつゝ見送りけり

永晝如年

北方永晝如年

此の頃は北方永晝の極に達せし時分なりけり午前三時には日已に昇りて午後九
時ならずは日没せず晝は殆んど十八時間にして夜は六時間ばかりに過ぎず夜を
は云へど九時後の宵の間は天猶白く午前一時過には早や燈光なきも文字を辨す
べし十二時の間僅かに一時間ばかり暗夜あるのみなり永晝年の如しとハ斯る處
をや云ふらんさて夜に虫も居らじと思ひけるに林中に入りては蚊蚋蜂蠅夜猶去
らず人馬を襲撃して煩悶に堪へざるより常に樹の枝を折取りて逐虫扇に代へば
あつと逐つて行きけり十二時より午前一時頃まで草木も眠るとやらん云ふ
頃には流石に虫も夢をや結ぶらん影を収めて出でず此の一時間のみ人も馬も息
をつきて氣樂に行くを得けり去れど日出ど共に又も何處よりや飛出らん千軍萬
馬の如く鳴り出づるにいと悶々苦しきは馬なり夜はいつも八時九時頃に
出立して朝は三時四時頃に宿驛に着き斯くて馬を休めて後中佐も一眠せんとす
るに暑氣蒸すが如きのみならず臭虫は肌を刺し群蟻は面を打ち且つ世間の騒が
しきは疲勞の極覺ゆす一眠せし外の安眠せんこと思も寄らずいつも寝られぬ勝
あるよりはどく疲れければ雨又は曇天にと天氣の都合によりては夜行をやめ
朝の三時四時五時の三時間を乗りて日中八時間ばかりは休み又も夕方三時間ば

かり乗りて夜分の三四時間までろみしこともありけり

年凶秣乏

加森以東亦三年間大饑饉の爲に民瘦せ村荒れてマルムヅニ、オハンスクの一市を除くの外到る處の塞驛肉類を得んと欲するも能はざりけり獨り人の食品缺乏せるのみならず馬に食すべき草をさへ得難きことあり折には逡巡に頼みてやう秣を買ひけるが平年は一封度我四十斤十五哥乃至二十哥いかに高きも三十哥を越えざるに此の比は一封度の價一留を下らす亦以て物價の暴騰を察すべし恒産なければ恒心なき百姓ども飢ゑては何事をか爲さらん或時馬を繋ぎて草を與へ小頃彼方に憩ひて後ゆきて見れば草なし早や食盡すべきもあらぬに價貴き草の見ぬを訝り番人に問へば馬食盡せりと答う又或時馬に燕麥を與へ少時其處を離れてやがて往き見れば秣槽は打倒れて燕麥は一粒を餘さず又も命じて燕麥を入れさせ再び往きて檢すれば槽は倒れて燕麥はなかりけり中佐嘗て此のさまを一驛舎の主人に物語りけるに主人此は御身の過なり此の頃は油断ならず馬に草又は麥を與へん時は必ず銜を堅く下して厩を閉し人の出入來ぬやうにせずば何封度の麥を與ふとも馬の口へは入らじとぞ答へける憐れ果敢

稿以酒肉

あきり凶年饑饉の民なりけり
加森より比耳摩に至る百五十四里の間市街とも云ふべきはマルムヅニ、オハンスクのみ中佐行きてマルムヅニ市に入るや地方裁判官等歓迎懇待橋んに酒肉を以しけるほどに鶏卵黒麵包のみに口を糊せし數日間の粗食を補ひ得けりセリツウは森林中の一小驛なり中佐の過るや郡長出で、迎へ待遇一方ならず村の傍なる湖水に小舟を浮べて青艸の岸邊を漕廻り水に映れる新緑を破りつゝ湖上に涼を納れ歸りて其宅に晝食の饗應を受け、り時に西の方奥も知られぬ森の上に遙に一道の火光立昇れるを見けり炎焰天に漲りて大厦高樓などの燃ゆあがるにやと見ゆるに此の火事何處の市にやと問へば人戸の焼くるに非ず此邊に有りがちなる山火事なり林中一たび火を失すれば數日はおるか數十日も打續きで滅ぬ事ありと答へけり扱もすさまじの山火事かな

不堪煩擾

斯くてボリセンスノブスカヤと云ふ處に着き驛舎に投じて長椅子の上に横はりしと思へば臭虫の來襲をも打忘れて熟睡しけり不圖目を覺めて見れば午前七時

なるに驚き起きて馬に水かひ麥を與へて又も眠りけるが夢の中に空腹を覺えて
眠覺めし頃は早や午後三時なり中佐は臭虫の痒さも忘るゝまで疲れて七八時間
も熟睡せしなり數日間の夜行に疲れ果てけんも亦理ぞかしやがて茶を呼び
包を食ひて神氣始て夾に休憩小時にして又も馬に跨りて出でしは午後七時な
り翌朝未明に驛近く來し時騎馬巡査來り迎へしに會ひ此處まで送り來れる什長
に酒錢を與へて返さんどて馬を下り村盡所の一株の木に馬を繋がんとする折し
も鳥拉は一聲嘶きて小溝を飛び越ね什長の乗りたる牝馬に飛掛らんとす左は
させじと中佐手綱を引さけるを馬は踊りて引倒し兩手に疵を負はせり忽ち牝馬
に迫りて狂ひ且つ挑み喧騒止まず村人數多馳集まりてやうく引放しけり此の
邊の村々の出口入口には木戸あり木戸毎に番人ありて通行人ある毎に開閉す是
れ家畜は放飼なるをもて村外に逸して作物を荒さしめんとてなり中佐入口
出口の木戸に至りて幸に番人の居合せし時は馬上より呼びて開かしむるを得
けれども番人居合はぬ時は自ら下りて木戸を開かざる可らずさて木戸の邊に
はいつも牛馬多く鳥拉は馬をだに見れば嘶き且つ狂して奔騰止まず是をもて木
戸ある毎に中佐は馬に引すり倒されて煩擾に堪へざりけり

馬輪船

オハンスクはカマ河の右岸に臨める小市街にして比耳摩を去る僅に六十八露里
我十八里人口千六百に過ぎず街路には草茂りて茫々以て牛羊を市上に牧すべく
牧場とも往來とも分かすとなり市と名づけられたる地すら斯の如し以て村々の
光景を推し測るに足れり中佐の至るや此地の裁判官及び歩兵大佐等懇待措かず
大佐より特に中佐の爲に比耳摩の軍隊に電報して到着日時を報道し以て其便利
を圖りけり此の日は天曇り雨至りしにも似て寒暖計は列氏二十四度に上りて蒸
し暑しかりけり翌くれば六月廿六日比耳摩をさしてオハンスク市を立出で市外
のカマ河岸に至れば渡頭あり渡船は尋常のと異りて幅は二間ばかり長さハ七間
にも餘れり人馬供に載すべくいと大きなるが船の體の方に車ありて水に入り馬
をもて其車輪を廻轉せしめて以て船を行るに船太だ遅からず彼の國にては此の
船を何とか名くらん中佐は私に馬輪船と名けしとなん火輪船は見し事あれど
馬輪船とはいとく珍らしカマ河の幅は大抵千メートル乃至二千メートル岸遠
く水深くして烟波縹緲たり

入比耳摩

既にカマ河を渡りて行くこと二日六月廿八日を以て比耳摩に入れり比耳摩市より十二露里ばかり此方に歩兵大尉一人騎して來り迎へ且つ中佐に謂て曰くオハンスク司令官の電報を得て貴官の到着を知り比耳摩駐屯の將校一同ハ已に市外に集りて歡迎せりと因て鑼を並へて行くこと未だ幾ならずして又も參謀大佐は馬車にて一士官二夫人は馬にて來り迎ふるに會へり二夫人は皆佛語を解しければ思ひも寄らざる野途に美人と駒を連ねて談笑しつゝ市端に達すれば一隊の樂手ハ一齊に我帝國々歌君が代を奏して其の健康を祝し鐘鼓鐵笛相和して囀りたる中に中佐は歡迎の將校と手を握りて辭儀し又も打連れて行く此の道路路觀者堵の如く皆帽を脱して禮を表しけり中佐は導かれて豫備歩兵大隊の野營地に至れば大隊の各將校は各其令閨令嬢と與に之を會食の場と延きひて盛なる晚餐の饗宴を開き場の一隅に起れる軍樂の聲もろとも盃をあげて中佐の健康を祝し兩國の歡情豁然として席に溢れけり食後數名の貴夫人は翻々羅裳を翻へして茶菓を周旋し中佐を圍んで笑謔春の如く大隊長は特に其令嬢をして古代婦人の服裝をなして中佐をして觀せしめ以て其客情を慰めけり

一語解願

比耳摩は比耳摩州廳の在る所カマ河の左岸に臨みて市街を成し船舶往來絶えず上諸哥羅都に往復する郵便及び貨物は烏拉を越えて朱緬に通ずる鐵道と此に連絡するを以て交通頻繁烏拉山下の小都會なり中佐加森を出でより十五日の間入浴せざりければ市中のクラブホテルに至りて一浴を買はんものと思ひ市外なる野營地を出んとしけるよ一士官の稍佛語に通づるものあり何處へゆくやと問ふ中佐も佛語にてパンの爲にクラブホテルに至らんとすと答へければ去らばお送り申さんどて馬車を驅りてホテルに送りて別れけり中佐久し振に一浴して其夜は快よく旅館に一宿し翌日野營地に歸りけるに衆士官集り來りて昨夜の景況は如何なりしかか嘸面白かりつらんかど口々に問ひけり中佐は何氣なく快き心持にて浴し一宿して歸れるのみと答ふれば人々は猶景況は如何なりしかと問ふて已まらず景況とても浴せしのみなれば語らんほどの事なしと云へば衆皆訝かしげに顔打守るさま又訝かしければ中佐何とて斯くは問ひ玉ふと尋ねければ昨夜御身が賭博の爲にクラブホテルに赴きしと聞きしをもて斯くは問ふなりと云ふに中佐始めて其言葉違を知り否とよパンの爲にクラブホテルに行くこと云しをパンクの爲と聞きしがめしからんとて一笑しければ人々も扱は言葉違なりしか彼の

御身を旅館に送りし士官の歸り来て福島はバンクの爲に旅館に至れりと語りしより言葉も碌々分らぬものが旅の空に博奕するとは面白き男かなと評し合へりしが實に言葉の閑達にこそありつれとて果は一同大笑とぞなりける佛語にてパンとは風呂の事バンクとは賭博の事なるにバンクの音には響かて云ふより士官はバンクをバンクと聞きひがめて風呂を賭博と間違ひしものなりけり旅路には有勝の好笑柄なるべし

入鳥拉山

中佐比耳摩に留まる者三日將に程に上らんとす歩兵大隊長の令嬢は大隊の名を以て一紀念章を贈りけり旅客の比耳摩より朱緬に行くに二道あり一は鐵道一は驛傳舊道鐵道の延長七百七十一露里舊道六百八十露里半なり中佐七月二日午前八時を以て驛傳舊道に上り行くこと四十二露里午後三時ヤンチエブスカヤと云ふ一小驛に達す此の驛民家の半ハ韃靼人にして半月塔の聳ゆる回教寺院も驛中に立てり衣帽語言皆露人と習俗を殊にす中佐比耳摩を出づれば則鳥拉山脈なり眼界一面高丘重疊平阜起伏し林木鬱々村落相連り時に樵唱牧笛を荒隴松林の間に聞く道は並木の殘物ありて舊時の觀を存するも行客甚だ稀に地勢は漸く

入鳥拉山
中不知鳥拉山

行きて漸く上り上下波の如く行けども其高きを覺えず殆んど鳥拉山中に入りて鳥拉山を知らずとなり此の日天曇りて氣涼しく騎行に便なりけり其翌三日午前八時に立雷雨あり雨後始て涼しく夏を忘れけり丘陵起伏且つ上り且つ下り六露里も打續きたる森林を出離るれば眼界開きて風景美に全身ぬれそぼちて水と爲りしをも打忘れつゝ詩を吟じてヤチエブスカヤ村を去ること四十五露里なるクングール市近く來し時駿馬二頭を駕せし馬車を驅りて來たり迎ふる者に會ひけり是れ比耳摩の憲兵大佐シロコフ氏とクングール市の豪商ドビニン氏の二人なりシロコフ氏は中佐を送りて比耳摩を出でわざと駈抜けて先づクングールに至りドビニン氏を誘引して更に引返して此に來り迎へしものなりけり中佐導かれてクングール市に入りドビニン氏の家に不投じけるドビニン氏はクングールの豪商にして一製造場を有し年々の收益貳拾萬留を下らす家ハシルワ河に臨み紅瓦をもて丘陵の上に建築せられ崇峻峻壁巍然たる大厦なり樓に登りて四顧すれば全市の白壁紅閣夕照の中に屹立して河水に掩映し遠岫の雲は紅に近郊の岬は綠に林梢の起伏と河流の曲折と皆寸眸の下に集まり淡蕩清遠宛然畫の如く上諾哥羅都以東第一の勝景なりけり庭の中に熊兒三頭狼兒一頭小犬四頭あ

り艸の上に放てり彼等は相嬉戯して相害せず熊と狼とは近傍林中より獲たるものなりとぞ此の夜櫻應甚だ盛なりけり

山中觀劇

クングール市は烏拉山中の繁華の地にして人口一萬七千餘工業尤盛にして製造所多く市に入りて先づ豪華の光景あり壹千七百萬留を有する豪商二人ありと云ふ中佐ドビン氏の晩餐を受けて後馬車を驅りて公園に遊ぶ園内の緑樹草庭瀟洒趣あり園の一隅に樂人あり常に樂を奏す去てクラブに至る此の日のクラブの會員相集りて素人芝居を催はせし日なりければ中佐も亦場に入りて之を觀けり舞踏場を舞臺に充てつればさして廣からず行列よく陳せし椅子は觀客を以て滿されけり芝居は二幕なり年少き一美人あり場に登る此の美人を戀慕する老人と少年と二人あり此の老人と少年とは父子あり父は固より妻あり戀の敵たる男の子の外に一人の娘さへあり而も年にも恥ぢで戀ひ慕へり其子も亦負けず劣らず情を運べども彼の美人は少年を愛せずして妻子もある老人と契を結び互に深く思ひ思はれて交情日に密なり此に密なれば彼處に疎なる習妻との中疎くなりければ妻は娘を携へて彼の情婦を訪ひ妻も子もある彼の人なれば思切りて

よと切に頼めども美人は此の道ばかりは理もて責め玉ふなどて承引かず妻と娘とは泣く泣く別を告げて立歸りし跡に入來し彼の老人の子なる少年なり彼に角と口説けども迫れども美人心を動さぬに腹立ち隠し持ちたる短銃取出して一發切て放てば烟の下に美人の息は絶えにけり此にて幕次の幕開きて妻と娘とは何やらん語らひつゝ泣居る折しも巡查は彼の美人殺しの少年を伴うて入來り此の度美人を殺せし大罪人裁判所にて終身悉比利徒刑の宣告あり即時護送すべきかれども上のお慈悲にて三十分の猶豫を與ふれば親子兄弟名残を惜めと云ふ彼の少年は母や娘と相抱きて離別の涙に咽び手に手を取りて別れかぬる折しも喇叭の聲聞ゆれば巡查は時刻なるぞとて引立て行けば母親は見送りて覺ゆるも氣絶するを木の頭にて暮いかにも悉比利近き烏拉の山の中の艶話と見ゆる脚色なりけり

山多毒虫

七月四日クングールを立ちて此の夜アルチエブスカヤの驛に宿す驛舎の主人は嘗て塞米巴拉丁斯克の管下に奉職し蒙古科布多近傍を旅行せし事あるものにて旅中の物語に時を移し馬にも食はせなとて夜二時頃眠に就かんとしけるに

主人親切にも長椅子の上に蒲團など敷き呉れけり、さて眠らんとするに臭虫群り來りて此處彼處を刺すに幾度か燈を點して之を捕へつゝ、夜を明し曉に及びて疲勞の餘一睡せしと思へば早や午前七時なりとて呼起されて出立しけり中佐が臭虫に責められしは毎夜の事にてめづらしからねども分けてクングールを立ちてより三日目即ち七月六日クレノブスカヤ驛に投せし夜の如きは殆んど終夜臭虫と戦ひけり此の夜の驛舎のいとひさぐるしきに臭虫多からんことを覺悟しけるが驛舎の主人又親切にもものして床の上を掃除し且つ虫除には青草こそよけれどと舍外より青草を取り來りて床の上に敷き其上に一枚の毛布を敷きて枕に就さけるが飢ゑたる臭虫は青草の城壁を物の數ともせず新鋭を入替へく息をもつがせず攻寄せければ全身腫れあがりんばかりにさゝれてひるむ處を青草の中に住める青虫さへ援兵に遣出で、手足首筋の嫌なくさしてさしてさし廻りけるは此の夜は中佐或は痒を掻き或は虫を撈りて終夜一目も得眠らざりけり、夜は虫責め又晝の敵の此蜂なるが烏拉山中の殊に毒虫多く荷車を牽ける弱き馬などは此の山中にて此の爲にさし殺さるゝことあり馬蜂に至りては其毒尤甚だしくして此の山尤多し中佐も一日馬蜂にさされけるが其毒背部に廻りて一

毒虻殺馬

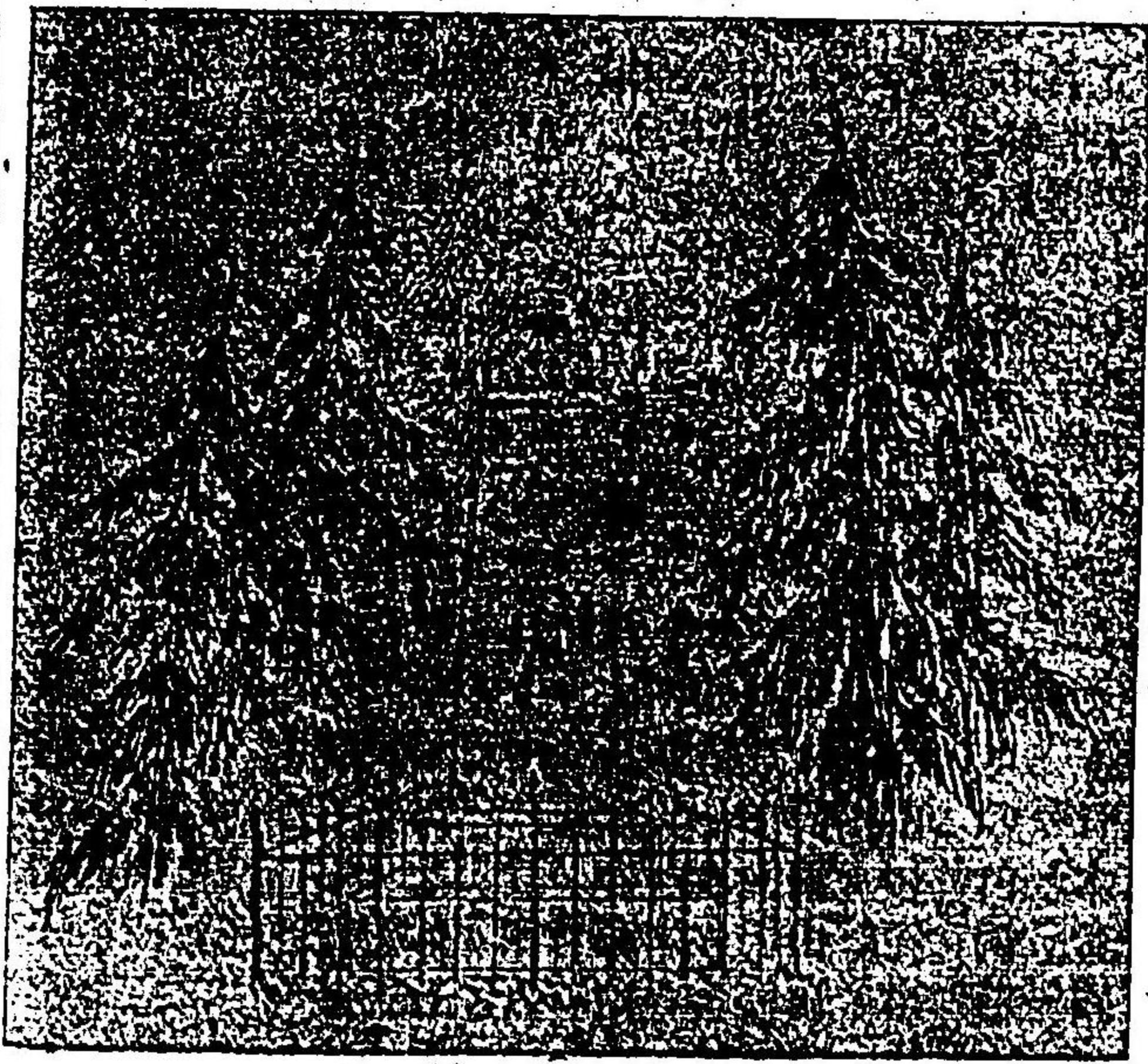
夜發熱せしことありけり馬の苦以て知るべし去れば贅澤なる旅客の帽子を被りて其上より薄絹の網をもて面を覆ひ以て虫を避くるとなん

故國消息

烏拉山中をゆき、て七月の八日山の頂近う來掛りて路傍の鳥を繞らしたる木柵に馬を繋ぎて休み居けり是れ林中には虫多きも鳥などには少くて馬を休むるに便なればなり時に前路に車輪の響聞えやがて二輛の馬車至れり中には四人の紳士あり中佐を見て車を下り各名刺を出して一揖して曰く君は日本の福島少佐に非ずやと中佐然りと答へければ四人は嘗て壯圖を聞きて欽仰措かざりさて交其健康を賀しけり中にルイベラタンとて佛領ニウカレドニヤの嶺山に従事せる嶺山學士あり進んで中佐に向ひ予はニウカレドニヤの白銅嶺山に従事するものなるが烏拉山中の白銅嶺見物にとて來れり我ニウカレドニヤの白銅嶺山には數多の日本工夫を使役せり嘗て日本工夫虐待の風聞ありしより日本帝國の一軍艦は實地調査の爲にカレドニヤに來航せしことありあや物語りけり中佐は故國を去る三千里外の烏拉山中に圖らずも故國の消息を聞きて感慨に堪へず欣然手を握りて彼の四紳士と別れ踴躍馬に上りて烏拉の嶺さして登りける

烏拉山嶺

中佐既に烏拉山中に入りて行く者數日足指漸く仰ぎ愈行きて愈高きを覺
しといへども層々たる丘阜一起一伏且つ上り且つ下り而して林木眼を遮り放
颯する能はざるをもて何の處か是れ山
嶺なるを知らず去れば歐亞境界の石を
見落すまじと思ひ毎驛毎村石標の所在
を問ひつゝ登りけるが七月九日の午前
十一時路傍の林木鬱蒼たる處に至りて
一基の石を見馬を留めて其文を讀めば
是ぞ歐亞二大陸を畫せる境界の石標な
りける石の高さは二段の基石とも二間
もやあらん周圍には鐵柵を繞らし表に
碑文あり下に一千八百四十五年と記せ
り是れ建設の年なり東の方には亞細亞
西の方には歐羅巴と勒したり此處こそ



混然一大塊。何歐亞之有。

烏拉の絶頂ならめと思ひ首を回らして四顧しけれども林木路を掩ひて遠く望む
能はず只平阜連丘を林梢樹隙に見るのみ中佐馬を一老樹に繋ぎ路傍の樹根に踞
して石標に對し冥然として沈思すれば感中より來りて慷慨に任へず謂へらく大
地は混然たる一大塊のみ何の歐亞か之有らん而して畫して以て二と爲す是れ豈
に自然の道ならんや人の生を此間に托する者歐と亞と亦皆横目縦鼻心性の靈固
より其軒輊あるなし但面色言語の異なる固より論するも足らざるは往々彼を尊
ひ此を卑しむ誠に謂なきの至なり嗚呼人為の區劃曷んど天理の平均を制するを
得んやと石標の下に彷彿して躊躇去る能はず既にして鞭を執りて起ち後邊を振
返れば則ち旅とは云へど六年の間も住馴れし歐羅巴洲の山川と一投足の爲に相
別るゝなり首を回らして前路を望めば則ち六年が程も立別れて夢にのみ見し故
郷亞細亞洲の草木と相會するなり神眸一步西歐東亞身は二大陸を跨りて悲喜交
其中に動くを免れず又も石標の下を徜徉徘徊して路傍の草花を摘み紀念の爲に
之を手帳の間に挿みつゝ獨語して曰く花よ汝は歐羅巴の花か亞細亞の花か歐に
もせよ亞にもせよ花は則ち花なり其色其香豈高下あらんや人も亦如此きのみど一
片の壯語亞洲の爲に氣を吐きつゝ躍然馬に上れば一鞭駭然蹄塵忽ち塵り瞬間既

に亞細亞の山河に入り去りて顧みれば則 陰雲一抹天の一方に在り雷鳴遠く聞
ぬ山雨將に來らんとして林木盡く震ひけり

雷雨大至

人馬を襲ふ馬蜂の毒威をも打忘れて亞細亞の前途を思ひやりつゝ知らずく山
を下ること十三露里にして一寒村に至れば額略特林堡警部長の命を以て來り迎
へし一警部に遇へり休憩四時間ばかりにして暑氣稍減するを待ち午後四時馬に
上る此の村より額略特林堡に至る二十三露里の間只だ一軒の民家あるのみ荒逕
遠く森林を穿てり山東の地形は山西に比して傾斜稍急に石礫路に横はれり既に
して雷雨至り衣帽盡く濡ひけり雷止み雨收まりて馬頭忽ち寺塔半空に聳え樓
閣相連なるを見る是れ即ち額略特林堡市なり此の市はクングール市を去る二百
七十八露里騎行六日にして達するを得けり

天涯奇遇

地圖に據れば額略特林堡市は萬山の中に在る者の如くなれども親しく其地を踏
めば烏拉山下に在りて地勢平坦四面山嶺の起伏するを見ず山を負ひ湖に臨み一
帯の松林市を繞れるを見るのみ人口大約四萬烏拉山は礦物に富みて額略特林堡
は其中心に居り製造尤盛に通商繁昌し一年の交易高壹億萬留に上るとぞ寺
院中學校官立彫刻所俱樂部消防屯所罪囚護送兵營博物館各製造所の如きは其重
なる建物にして樓閣相連り車馬絡繹其繁華の光景は烏拉山以東太平洋海岸に至る
まで見る能はざる所なり中佐馬を休め且つ調査の爲に此の地に留る者五日此の
市に關する細話の後回到談る二日公園に遊びけるに一紳士帽を脱して進んで掛
して曰く貴下は日本の福島少佐に非ずや中佐曰く然り紳士は進んで手を握り扱
は福島少佐なりしか僕はバクレーブスキーの二男名をジョンと云ふもの前日姉婿
なる大佐リンゼンカンブ氏の書を得て貴下の經過を知り心竊に待ち居たりとて
喜色面に溢れけり此より中佐滞在の間日々其家に招請して饗應甚だ盛なりけり
此市に在るバ氏の支店は宏壯雄麗頗る人目を驚かし巍然たる大廈殆んど王侯の
宮殿に似たりと云ふ此の市の警部長男爵タウベ氏は任に在ること數年我黒田伯
の嘗て悉比利を歴遊して此の地を過ぎるや其導者ど爲り紀念の爲に烟草入の贈
を受けし事ありけるが中佐と相遇うて當日の事を説き殆んど舊知に遇ふもの
如くなりけり中佐の此地を發するやバ氏は悉比利各地の支店に宛てたる添書を
贈り又タ氏と謀りて黄金製の一紀念章を予贈りける

美姫目送

七月十五日午前七時半額喀特林堡を發するや警部長タ氏は豪商バ氏と共に送りて市外に至り鐵道線路踏切の番小屋に小憩せし時に中佐馬を下りて鳥拉を柵に繋がんとしける折しも他の馬を見て狂暴騰蹕柵もろともに打倒れて腰の邊に負傷しけりバ氏携ふる所の行厨を開きて之を俄し談笑少時にして相別る見渡せば一帶の高原道路平坦にして時に重阜の斷續するを見る道上樹陰なく暑氣蒸蒸頗る外套の重きを覺えけり行くこと二露里一小阪を下れば阪の下に小湖あり湖水の岸の上は一富豪の別荘ありて瀟洒たる綺樓畫閣柵結ひめぐらしたる中に立ちけるが中佐の過るや數人の美姫樓を下りて庭に驅出で柵の隙より遙に此方を望み見て口口に福島君健康の旅行を爲せと叫びつゝ見送りけり湖上の一橋を渡れば村あり小憩して馬を休め又も乗出して午後一時ヨリスナ驛に至り額喀特林堡より送り來れる一警部補と別れけり午後四時半一小村に至る人口凡そ五百此處より道は林中を穿ち且つ昔時の並木點々として存し稍綠陰あり聊暑を避くるを得けり午後八時ビエロヤルスカヤ驛に投ず額喀特林堡より五十二露里三たび鐵道線路を横斷しけり中佐驛舎に投じ秣の用意など主人に頼みければ主人此の遊

の民家は年來平均二頭の馬を蓄ひ居しも比年凶荒なりしが爲め秣さへ乏しく其價も暴騰しつれば萬事不如意となりて皆大切の農馬を廉價に賣拂ひ今は残れるもの少し平年の黒麵包一布度二十哥前後なるが今は二留に上り蒸麥の如きも十五哥ばかりなるが一留二十哥を下らず今年も氣候悪しく夏に入りて雨少かりしかば農作如何あらんぞ眉をひそめつゝ物語りけり主人いと親切にてもてなし肉汁焼肉を調理し客室の甲板の上に蒲團を敷き枕毛布をさへ備へて注意尤到れりけるも此の日馬の腹帯をしめんとせし時鳥拉忽ち怒て中佐の左の脇下を緊く噛みし痕腫れあがりて疼痛甚しく夜中熱發せしと臭虫の多きとに苦しみて得寝られず曉方の三時頃をどろみしかと思へば早や夜は明けしに出發の用意をぞなしける

酒徳甚大

越えて二日行くこと七十八露里カムシマロツ市に次る此驛人口凡そ四千其翌十八日平阜麥圃の間を行くこと五十二露里グヤロツスカヤ驛の一民家に投ず此の家頗る貧困にして寢臺だになく木椅子七脚を借りて纔に其上に横臥しけるが臭虫は猶椅子の脚を傳うて來襲ひ痛痒交至りけり時に同行の巡查は甚だ酒を

嗜み炎天烈日を行くにも携へて焼酎を飲みけるも中佐の好まずして一滴をも口にせざるに流石氣象をやしけん此の夜民家にては小腰をかため強めて笑顔を作り焼酎を飲むも苦しがるまじきやと問ひけり中佐可笑しさを堪へ少量は飲むもよし多量用も可らずと許しければ調査はいとく打喜びて多量は飲むまじ少量用ひ申さんどて焼酎の塚引きよせつゝ飲み初めけるがやがて陶然として一酔し室内に打倒れしまし煎餅蕪々たりけり中佐は虫に攻められて得も寝ず彼の酔巡査が前後も知らぬ高野美ましげに打見やりて焼酎は防塞によしと聞きしが扱は臭虫の用にも立つと覺し酒の徳も亦大なるかなどつゞやきつゝ煩悶夜を徹したり露國人のなべて酒を好めるは寒國なればなるべし

醸酒大王

翌くれば十九日午前八時出立林中の間道をゆくこと十八露里チユシマ川を渡りて午前十一時タリツア村に至る此の日途にて始めて比耳摩近傍に一人の虎列刺病者の生せしを聞きけりタリツア村は彼の波蘭の名士バクレブスキー氏が敗殘遠譚の餘艱苦數年忍耐業を創し遂に能く暴富を致せし所にして其が焼酎製造所は實に此に在り此の地昔日は鬱々たる一森林のみバ氏の燃酎製造所建ちて

より全然一市街を成し一村の烟火東西に連亘する者盡く皆製造所職工の家に於て中に小學校あり郵便局あり電信局あり警察署あり而して村の東縁樹鬱林の中に一字の紅蕚を見る是れ即ち時にバ氏製造所の爲に設けられし鐵道停車場にして其名をバクレブスキー停車場と云ふバ氏の家はチエレマ川に臨み南に丘陵を見北に深林を控へ山光水色の間に屹立して巍然王侯の居の如しとぞバ氏の實に一村の大王なりけり中佐の到りし時長男バ氏は商用の爲に巴里旅行中なりければも額喀特林堡に於ける次男の報道に因りて既に中佐の至るを知り製造所頭取及其妻は警察官等と共に出て之を郊に迎へ導ひて客館に至れり此のバ氏は頭取の爲に来れる地方商人を宿泊せしむる處なりけり中佐は此處に宿して食事は頭取の家に赴きけり頭取も亦波蘭の人にして昔て叛亂に與みし後悉比利に隣せられ年を経て免されたりとぞ其夫人善く客を待ち此の日中佐と馬車に同乗してバクレブスキー停車場に遊びけり其間六露里鬱林の中を穿てる道路の修繕行届きて殆んど園内を行くが如くなり遂に停車場前の小園を遊歩しけるに園内の草花正に開き紅白燦爛錦繡を敷けるが如し夫人笑ひて中佐に謂て曰く今年は君と共に佳年至れり去年は野も山も青きものなかりきと蓋し饑饉を云ふなるべ

し談笑時を移して歸り頭取の家に晩餐の饗を受け此の夜はさらやかに飾られたる室内のうつくしく心地よき寢臺に昇りて一快眠を食りける

觀製造所

翌日中佐バ氏の焼酎製造所を一覽す獨語に通ずる役員一人案内しけり製造所の規模廣大建築宏壯殊に人目を驚かすに足るものは焼酎貯蓄倉庫にして庫内に大樽十一個あり一樽の量十五萬瓶の酒を容る百六十五萬瓶の酒は常に蓄へて庫中に在り而して其賣捌所は西部悉比利と東部露西亞とに都合百五十箇所ありと云ふ中佐其製造高を問ひけるに笑ひて答へず滿庫十一樽の幾日を支ふるやを問へば曰く我露西亞の人口と露人の嗜好とを知らば其賣高以て知るべきのみと試に此の製造所の花客を四百萬戸と見て一戸五人三戸一日能く一壇を盡すと看るも以て彼の十一樽百六十五萬壇の酒が瞬時に飲盡さるゝを知るべく其一年の製造高莫大なること知るべきなり而して露政府は一壇に課するに二十八哥の税を以すバ氏が年々收むる所の醸造税蓋し大なり浦鹽斯德は一壇の價六十哥に過ぎず其焼酎を製造する僅々七晝夜を費すに過ぎずとぞ焼酎製造所の傍又麥酒製造所あり去れども露人多く焼酎をのみ嗜むをもて麥酒の製造高は數ふるに足らずとなり

郊送太多

晩餐の饗に頭取の家に赴けば主人バ氏會巴里より歸り手を握りて款待卓を圍みて談笑し春風座に滿ちけるがバ氏中佐の爲に波蘭叛亂の事を説くに方りては一坐慨然たらざるはなかりけり中佐聞く亂後叛徒の悉比利に誦せらるゝ者波蘭より阿摩斯科に至るまで炎天を行き冰雪を踏み歩行十月を費しけりと其日午後四時辭して程に上る製造所の各役員及び其夫人令嬢等或ハ車或は騎皆バクレブスキー停車場の前に送り中佐の鞭の影見ゆるまで見送りて巾を振り帽を振りつゝ皆健康を祝してぞ別れける此より以東道平にして並木さへ縁深く路を掩ひて馬上熱を覺えず行くこと三十三露里マルクドバ村に着きし頃は午後九時なりけり

入悉比利

翌廿一日マルクドバ村を出づれば左右皆深林にして老樹蒼鬱以て熱を避くるに足る此の頃夜行を中止して晝行となせしは天氣曇り且つ雨ふり然らざるも路森林を穿ちて騎行に便なればなりけり林を穿ちて行くこと十一露里路傍に一標木

あり是予歐部露西亞と悉比利との境なりける。烏拉山嶺は地學上に於ける歐亞二大陸の境界にして此の標は政事上に於ける歐露と悉比利との境なり去れば一標木の爲に以、西は民制を敷き以東は軍制を布き以て施政の便を圖れり此の邊土廣大地味沃饒なり露國の人口年々増加すること二百萬なり歐羅巴諸國の地狭く人多くして食を他邦に取り人を他邦に移すに似て露は人口の増すこと如此きも隣邦に移住する者なく農作物は往々他邦に輸出す是れ一に土壤の廣大地味の沃饒彼が如きに因るべく而して悉比利は實に露の寶庫なるべし又行くこと十一露里林盡く又行くこと三十露里ウスベンスカヤ驛舎に投す

朱緬毒氣

中佐の鞭影は既に悉比利の大廣原に翻へれり前途遠遠尤自重すべく而して炎威益酷毒氣野を掩ふ蓋し行路の難は堅氷積雪にまざることを萬々なり次日行くこと三十露里にして午前十時半朱緬市に入る此處は標木以東第一に達する市街にして歐露より通ずる鐵道の最終點に屬し市はビシユマ河に枕して西部悉比利の起點たりビシユマ河はオビイルチヌ二大河に通じ汽船オビ河を遊りては德摩斯科に達すべく德摩斯科より分れてイルチヌ河を上りては阿摩斯科塞米巴拉丁

斯科に至るべく汽船河を下りて此に至る者は鐵道に由て直に歐露に入るべし去れば此の市實に水陸交通の衝にして人口年に増し今は已に二萬を下らず露國比年饑饉の爲に貧民の悉比利に移住する者數を知らず彼等は皆鐵道の便に因て朱緬に達し更に二三輛の荷車を用意し家を聚めて伴を成し隊を作して悉比利に向ふ者陸續たり朝夕の涼しき時に車を驅り日中暑甚しく人馬共に疲るれば路傍の林中に休みて馬には野草を食ませ人は淡水を掬ひて黒麵包を食ひ夜は薪を拾ひ火を燒きて毒虫を防ぎつゝ林間に車を留めて夜を明し雨露をだに防ぐ能はず日又一日蓬髮垢面骨立鬼の如し而して其深く悉比利内地に入らんとする者は皆汽船の便を待つに固より些少の家財道具を賣りて立出し輩なれば宿借らん錢もなく河岸埠頭に集り老少相抱きて土沙の上に横臥し以て日を送り夜を明しつゝ出船を待つさま哀れも云ん方なし朱緬の地たるや高原平野の中に市を成したれば炎威酷烈處として避くべきなく沙塵高く颯り風土甚だ惡し去れば毒疫一たび入るや彼の貧しく雨露をだに得防がぬ移住民ども争でか其威を避くるを得ん中佐がタリツチアにて比耳摩近傍に一人の虎列刺患者ありけるよし聞きは去る十九日の事なり朱緬は比耳摩を去ること鐵路三百六十五露里今日は廿二

日にして相去る四日に過ぎず而して虎列刺は三百六十五露里を三四日に走りて早く既に朱緬に入り中佐の到着せし日ハ患者四十四人の多きに達しけり而して彼等は皆死しけり是れ皆移民の携帶せし所亦以て其病勢の劇烈なるを知るべし此の市にバ氏の支店あり支店長中佐を招きて晚餐を饗す比耳廉以東始めて入浴しけり翌日滞在す此の日正午寒暖計華氏八十五度

毒氛掩野

朱緬より阿摩斯科に至る六百三十六露里我が百六十九里の間曠原遠く連り丘阜波状を成し路に樹木少く綠陰烈日を掩ふものなく炎威人に迫りけり中佐七月廿五日を以て朱緬を出づ此の日華氏八十七度廿六日八十五度廿七日八十四度廿八日八十五度廿九日九十度三十日九十四度暑氣漸く騰り烈火を蹈むが如し而して中佐着る所の服は伯林以來未だ嘗て代へざる冬服の上に外套をさへ襲ねければ其重きに堪へず汗を拭へば湯の如く屢嘔氣を催はしけり之に加ふるに虎列刺病の蔓延は馬に策ちて馳するよりも速に朱緬以東新患日に加はり僂屍狼藉たり而して朱緬阿摩斯科の間我百六十九里と云へば東京姫路の間なるに斯る長き道程の中市街とも云ふべきヤルトラプスク、イツシユム、チユカリンスクの三市に過

毒疫蔓延、無醫無藥

ぎす三市には形ばかりの醫師藥舖あれど其相去ること遠く其間の寒村僻邑に至りては病者一診をだに乞ふ能はず一劑をだに服する能はず只毒疫の威を逞うするに任ずるのみ此間警察官の配置とてもいと疎にして且つ人少く各村落に固より衛生掛やうの者もなければ誰か愚民をさとして衛生の道に赴かしむるを得ん但村々の村長百長什長等此處を先途と驅廻りて苦心の狀非常なれども彼等固より豫防の策をも知らず撲滅の方をも知らねば只目を圓くして奔走周旋するのみ而して其人民は如何にと見れば衛生の何物たるを辨まへず炎天烈日の下に曝され毒疫猖獗の中に立ちて好んで眞瓜を食ひ菌草などの鹽漬を食ひ曠原上の惡水を飲みて病者と接するを恐れず虎列刺の思ふまゝに蔓延せざらんことを欲するも得可らざるなり但彼等が虎列刺除とも云ふべきは希臘教の僧侶耶蘇の像を畫ける旗を携へて戸々を巡禮し經を誦し水を與ふるに過ぎず心ばかりは安堵すらん争で病毒を防ぐを得ん希臘教僧侶が誦經の聲未だ終らず神水未だ乾かざるに此處に仆れ彼處に斃るゝもの數を知らず特に憐むべきハ移民民の一隊なり比年饑饉の爲に産を失ひ家を賣り卿を辭し住む處求めんとて遙々悉比利に立越ぬ二輛三輛の車に家財を積み父母妻子を載せて曠原平野をさまよひ日にさらる

れ雨露にうたれ食も喉を下らず果は虎列刺に襲はれて一隊盡く病み利さへ村落の出入を禁せられて休みに家なしまして醫藥をや肉落ち骨立ちて氣息奄々荷車の上に展轉横臥して死を待つもの道途に充ちけり中佐朱福を出でヤルトラフスク市に至りし日は戸數二百ばかりの小市に八九名の新患あり其勢猖獗當る可らずと云ふ幸に藥舖ありければ用意の爲に阿片劑の一小壺を購ひて携へけり此處の驛舎に入るや數名の警察官來訪ひて中佐を待つこと懇懇にそれ馬を繋げそれ秣を與へよなど周旋懇到なりけるがやがて立去りて一人も残らず仔細を聞けば彼等は日本の少將至れりと聞きて急に來りて周旋しけるも少將にのわらで少佐なりと聞きて跡をも見ずして立去りしものなりけり只官を見て人を見ざるは何處も同じ習ひ好笑柄と云ふべし比耳摩までは各地方官遞傳周旋しけるも悉比利に入りては徳波利斯克總督の管下に屬し其特命なきより比耳摩以西に比して便利を得る能はざりけり日中十時間ばかりヤルトラフスクに休憩して又も馬を策ちて出づれば過る所の村落村として虎列刺病者あらざるなく病者として死なざるなく病勢劇烈毒氣人に逼れり虎列刺猖獗の村々は村の入口に晝は黒旗を立て夜は篝火を燒きて凶事を表し番人を置きて行人を戒め行人は村外を迂廻

見官不見人

せしめて村内に入らしめず以て交通を遮断しけるが行人村外を迂廻せんにも固より路なき野原なれば案内知らぬ者の迷はざらんやうにいくつも小さな標木を立て、目印と爲しけり此の頃は北方永晝の極より三十餘日を経れば夜分やうく暗夜の時間多くなりけるが中佐夜深けて虎列刺猖獗の村外篝火明滅の處に至り其とは知らず村内に入らんとして番人に叱咤せられ村外の野路を迂廻せんとして暗夜目印の標木を認むる能はず廣原平野の中に彷徨して行きつ戻りつ、已に村落處に至れりと思ひて圖らずも村の中央に出で夜番人の叱咤を招きて深夜の寂寥を破り自ら抱腹に堪へぬこともありけり露國の農家は貧にして夜間燈を點する者なく村落火光を認むること稀なれども虎列刺病者の家もしくは死者の家は看護又は吊祭の爲に火を點するをもて深夜村外に至り遙に燈光の多少を數へて虎列刺病の多少を卜したり

生死唯命

朱福を出で、より七日七月卅一日行くこと三百零六露里にしてイツシユムに達す先づ警察署を訪ひ旅館の在る所を問ふ一巡查案内して旅館に至る見れば矮陋にして不潔言ふ可らず賤民群集殆んど虎列刺の巢窟の如し不圖バクランプスキ

百六
 氏の添書を思出で、此處を立去り其支店に至りて一宿を乞ひけるに優遇尤至れり遂に一宿して翌日滞在し人馬俱に休むを得けり中佐バ氏の添書數通を得れども成るべく厄介を掛けしとてわざと訪はざりけるも此の日は已むことを得て一宿を乞ひて其親待を受けけりイッシユム市は曠原の上に在りて一小流に臨み市中の水皆臭濁飲むに堪へず此の地悉比利大鐵道の線路に居り西の方サマラ、ウーハを経て烏拉を越えチニヤビンスクを過ぎて此の地を經ん設計にて工事は此の時既に鐵軌をクルガンに敷き了りければ來年は必定此の市に至り再來年は阿摩斯科に達せん模様なりとぞ此の市人口八千に過ぎず而して數日以前虎列刺初發以來百四十五人の患者を出せりと云ふ以て其猖獗を知るべしバ氏支店長の細君頗る中佐の旅行を危ぶみ中佐に向ひて此より東は愈行きて病勢愈猖獗なりと聞く萬一の事もあらば大事なり此處より間道を迂廻せば虎列刺なき地を過ぐを得べし枉げて案内者を雇ひて間道を行き玉へと勸めけれども中佐は虎列刺の病勢たるや天馬の空を奔るが如く一瞬能く百里を行く何日何處に流行せんも知る可らず昨日までは流行せざるも今日は早や毒氛野を掩へるさま此の邊の勢なれば怒に虎列刺を恐れて却て虎列刺に死なば日本人の不名譽なりと思

ひ定めつ唯命を天に任せんとて本道をゆくに決し懇に其厚意を謝して八月二十日の午後八時半イッシユム市を立出けり

途上與藥

百七
 イッシユム市を出づれば森林あり樹木鬱蒼翠色掬すべし林を出で、一村を過ぎ小川に架けたる橋を渡り遙に皆を決すれば一帶の郊原茫々際なく沼池落々水草に富み烟白く草綠にして群畜此方彼方に眠れり總て土人の牧場なるべし一寒村に入りて民家に小憩し庭に横はれる荷車に馬を繋ぎて秣を與へつさて此の村にも虎列刺ありやと問へば主人いと多しと云ふ汝の家には病む人なきかと問へば今日も一人死し只今野邊送りして歸り來ぬ彼の御身が馬を繋ぎし車こそ死人を載せしものなれと云ふやがて酒沸器を持出ければ茶を喫し黒麵包を食して又も夜を胃して立出でつイッシユムより四十四露里をのりて次の日の午前三時半夜ははのはのと明るる頃ツシユノロドバ村の驛舎に着きけり馬をつなぎて秣なと與へ茶麵包なども出して此の日は午後六時まで此處に休息しけり此の村ハ虎列刺尤猖獗にして戸數凡る五十戸ばかりなるに此の日の新患者は十二人に及びしと云ふ驛舎の室より見渡せば其前は墓地なり新しき十字架林立し新墳孳々

たり病死者の棺を車にのせ妻子にやあらん棺にもたれて泣きつゝ墓地をさして
 ゆくさへ見ぬけり時に驛舎の女房駈來りて病人ありと云ふに中佐起出でい見れ
 ば烏拉をつなぎし傍に前程より仕事し居たる八十九の男吐き且つ瀉して打倒れ
 たるさま正しく虎列刺なり中佐命じて我休息なし居たる室の隣室に扶け入れさ
 せ用意の薬なと與へけれども病勢劇烈なれば助からんとも覺ゆす此のさまを見
 て驛舎の主人心地あしとてやがて感染せんばかりに打臥しけり因て此にも一服
 を與へけり斯くて馬に物食はせんとて庭に立出で、見れば彼の病者の吐瀉物は
 犬來りて食盡し其跡には又一人の男來りて仕事し居けり病者をも恐れぬ無智の
 民のみなれば輾轉傳染病毒をして蔓延せしむるも亦宜なり中佐とても身鐵石に
 非ず虎列刺豫防の爲に過度の勞働酷烈の炎威を避けて消化し易き食物を食ひ能
 く安眠せんことを思はざるにあらねども萬里遠征の途に在りて豫防の法一も實
 行する能はず而して其鞭影の翻へる所蹄痕の印する所盡く虎列刺ならざるはな
 く身は常に毒氣の中に立ちて病者に直接する如此なりけるも遂に病毒に感染せ
 ず能く身を全うして偉功を成すを得し所以の者は蓋し身體の強健に因るといへ
 ども亦天幸と云はざる可らず

誤擬短銃

斯くて此の日の午後六時半ツシユノロードを出立し行きく一寒村を得休息
 少時郷導一人を雇ひて出立す此の邊の道路夜間は殊に迷ひ易ければなりやがて
 イシユム河に架けたる橋を渡る道に河溪多くして地勢太だ低きく堅泥凸凹四邊
 老樹喬木なく只灌木の路傍に生ひ茂れるのみ時に更既に深くて夜氣清涼衣帽輕
 快四顧すれば草木動かず天地寂寞唯星光の耿々たるを見て蟲聲の唧々たるを聞
 くのみ中佐毒氣滿地の村を過ぎて此の清明の境に立つ神魂の爽快に堪へず遠々
 然として人と馬と相忘れつゝ行く一二露里郷導の影は忽ち見えなくなり彼は
 此の夜氣の清味を解せず寂寥に堪えずして逃げ去れるなるべし中佐地圖の記憶
 によれば馬頭南に向はざる可らず而して馬を立て、仰ぎて北極星の方位を望め
 ば東に向ふもの、如し且つ阿摩斯科と多波爾斯科との二路相分る處なれば或は
 夜道に迷ひ多波爾斯科道を取りたらんも知れずと思ひ地圖を検せんにも夜暗う
 して辨せず電柱を得て線を敷へんとするも堅泥深溝到る所路を遮りて近く可ら
 ず且疑ひ且惑ひつゝ二三露里を行きて電柱の下に至るを得つ仰ぎて星光に線
 敷ふれば幽に四線を認む朱羅以東悉比利線は皆四線なりければ扱は道に迷はざ

りけりと安堵して馬に策ちつゝ行く既にして前面一村落を望めり彼の村に至らば少時休まんとし思ひ猶も策ちて漸く村と見し處に近づけば何ぞ圓らん村にのわらで丘の下なる一簇の森ならんとは森の茂れる木々の梢星光に反映して或は高く或は低く一村の茅屋と見えしものなるに自ら一咳を博しけり森を過ぎて將に丘に登らんとす時に馬嘶きて止まず一鞭丘を登れば上に一輛の驛車あり御者は車上より短銃を擬して今や切て放たんとす中佐の近づくに及んで彼れ始めて其軍服を見て銃を収めけり蓋し馬は寂寥たる深夜輪聲蹄響を聞きて喜びつゝ嘶き御者は深夜林中に馬の嘶く聲を聞きて賊の驛車を襲ふものならんと誤認して銃を擬せしものなるべし中佐は一瞥微笑して過ぎけり

陷于大澤

既にして又一村を馬頭に見る本道は迂廻して遠く畦道を傳ひゆけりいと近し中佐畦道より進みけるにやがて溝に遇ひけり透し見れば溝の沼の上に馬の蹄の痕ありいと淺く見えければ何程の事かあらんと思ひ一鞭あてゝ乗入れけるに泥は思の外に深くして馬足を没しおせれども動かす進退谷りて泥中に喘ぐのみなり詮方なくも下馬して泥中を涉りやう／＼前岸に飛越え片手に手綱を控え片手に

鞭押取りてやと聲かけつゝ鞭ちければ馬は忽ち前岸に飛びあがり飛びあがりし機に龍頭断れて手綱の手に在り馬は手綱を脱して岸の上をさまよひつゝ青草を食めるを中佐徐に立寄りて断れし革を結びつけんとて龍頭を馬の頭にあてんとする折しも本道の方に馬の嘶く聲聞きつけて驀地に逸出しつ中佐驚きて追ひかけしに烏拉は移住民の車列の中に割つて入り一頭の牝馬に飛掛りけりそれ逸馬どとて數人の農夫ども車を飛び下りてやう／＼烏拉を引放せし時中佐馳付けて見れば此の荷車の一隊は移民にして車は皆虎列刺患者をもて滿されけり斯くて馬に龍頭を掛け厚く其盡力を謝して薬を患者に與へ且つ三留を與へて立去り遂に前刻見し村に至りけるに此處も虎列刺の巢窟にして村内に入るを得ず又疲馬に策ちて村外を迂廻し翌日午前六時半オルロバ村にぞ着きける此の夜騎行十二時間行くこと七十露里半

疫氣一洗

オルロバ村の驛舎に入りて聞けば虎列刺なきに非ざるも幸に多からずと云ふ日中一睡を食りて午後八時發程す村の百長同行しけり行くこと二十露里一寒村あり村の入口の柵に馬を繋ぎて小憩し又も行き／＼て其夜十二時クルトエの驛

舎に入る此の邊の村々にも虎列刺ありて村外を迂廻せざる可らざるに夜は路に迷ひやすきより郷導を得んとするも來らず午前二時出立して村外の路をたどりつゝ午前五時半カルマコバといふ一小村に至れば此處は全く虎列刺病者なしと云ふ中佐の馬は此に至りて虎列刺流行の速力に打勝つを得けり驛舎矮陋にして蒼蠅臭虫多きも毒氣なしと聞きて心地何とならずがしく例の茶麵包の外に鶏肉をさへ得て肉汁に喉を驚かし且つ農家の浴場に入浴するを得けり中佐顧みれば朱細を出でゝより十四日四百七十三露里の間虎列刺の中に身を没しけるが今日は病氣の沙汰をも聞かぬ處に至りて湯にも入り満身の疫氣を一洗せし心地しけるこそ理なれ

不重約諾

此の日午後七時カルマコバ村を立ち平原曠野の中に放吟しつゝ馬を馳せて午後十時半朱喀林斯科に至る此の市平原の上在り市とは名ばかり人烟蕭疎只一獄舎ありて兵を置きて之を護り大佐之に長たるのみ時に天黒く夜暗く且つ街燈なければ市上寥々行人早く絶えて就きて驛舎の在る所を問はん由なく河に沿うてさまよひありき驛標の男に問ひ車引く農夫に尋ねなとして同じ處をゆきつ戻

りつやうく郵便局の案内によりて驛舎に入るを得けり此の頃は漸く露國內地の旅行に慣れ茶黒麵包を太牢と思ひ木の長椅子を錦の蓆となし臭虫をさへ忘れて安眠するを得けるが今夜は七十六露里をゆきて夜已に深げ燕麥を得る能はず馬には秣をのみ與へて明日の朝を待たしめけり翌日巡查來りて郷導を要するやと問ふ夜深けて宿驛に達せんには郷導あるこそよけれとて世話を頼みければ何時出立し玉ふぞと問ふ午後六時なりと答へければ去らば其時刻に郷導一人差出さんとして立去りけり約束の時刻となり中佐用意して待てども來らず使をやりて郷導者はいかにと云はせければ少時待れよとなり同じ驛舎に阿摩斯科より徳波爾斯科に向ふ露國の二紳士あり中佐の出立んとして待わびしげに時を移せを見て何とて出立し玉はぬぞと問ふ中佐云々と答ふれば二紳士は打笑ひ約束の時間など頓着せぬは此の邊の風習なりと語りけり旅客などには都合よからぬ風習にこそ

稍慰旅情

斯くて高原の上をゆく原上幾處か小池あり絶えて人家を見ず行くこと二十五露里其夜十時半アンドロンニカ驛に至る一時間半ばかり休憩して朱喀林斯科の郷

導を遣し單騎程に上る時に夜暗うして咫尺を辨せず驛外の木戸堅く閉せり番人を呼びければ露西亞訛の言葉を聞侮せり小屋の内より口答へのみして出來らず中佐一喝して速に開けず警察官に告げ處分する所あらしめんと云ひければ何やらんつふやきつゝ小屋を出で、木戸を開け、り終夜馬を馳せて翌日午前四時三十分ベキセブスカヤ驛に投ず此の驛舎の長は他へ轉任し明朝出發せん筈にて朱喀林斯科の郵便電信局長夫妻は告別の爲に來合せ離盃を驛舎に開きけるが中佐も其宴に陪する光榮を得けり此の光榮なる宴席の食卓は不潔なる臺の上にて垢染みし白布をもて飾り缺けたる皿曲みたる小刀は其上に在り料理は肉汁焼肉煮肉の三種にして鶏一式なり野菜は少許の洋蕪あるのみ體裁は兎まれ料理は角まれ旅路に人の親切はとうれしきはなほより中佐も臂を交へて談笑し稍旅情を慰めけり此の人々の話に郵便局長の月俸五十留、次長三十留、驛舎長二十留なりと云、此の驛秣ありけれども燕麥を得る能はず黒麵包十斤を買ひて馬には食ませけり

江山絶勝

此の日夕日影傾ぶくを待ちて午後六時途に上りけれども餘熱猶甚しく思ふま

ゝに馬にも得乗らずしづくと打せつゝ八露里と記せし標木の路傍に立てる處に至れば路二つに分る左は舊道にして電信柱あり右は新道にして渺々たる曠原の中を貫けり此の道直に阿摩斯科府外に達し汽船を買ふこと尤便なるをもて行客大抵新道を取り中佐も新道を取りけり標木より三十露里の間は見る限り茫茫たる野原にして樹木もなく人家もなく地勢平坦眼界の窮る處四面の草野は地平線下に没す時に天晴れて月影さやかに野草に置ける白露さらめき渡りて景色得も云はずよかりけり去ども蚊多くて煩悶に堪へず蚊を逐ひつゝ馬に策ちて一坂を下り左の方に池を望みてザミラドバ驛に到着する時に午後十時半此の夜行くこと五十八露里なりザミラドバの驛舎は清潔罕見なるものにして主人もいと親切なりけり此の頃打續きし夜行に馬も痛く疲れければ翌朝の騎行を休み終日休息して午後七時途に上りけりザミラドバ驛外路は直に森林に入れり森林との云へど打續きたるにはあらで一森々々此處彼處に落々として森と森との間皆分れて道路と爲り平坦にして蚊なく尤騎行に便なりけり森を出づれば中佐の馬は一高丘の上に立たり脚下百尺忽ち名にし負ふ義爾齊斯河の清き流を其下に見る前岸は一帯の森林且断々且續き河水は森を縫ひて蜿蜒屈折白蛇の奔るが

如し時に夕日已に没し、殘照全く收り、圓月一輪、東の方にさし昇り、影は義爾齊斯河の清流に落ち、山は黒く、水は白うして、凄くさみしく、澄み渡れる江山の夜景、畫に書くとも及ばじと見ゆるに、中佐馬を立てい去る能はざることを、久しかりけり。上階哥羅都、以東江山の勝此地を以て第一と爲すと云ふ丘を下り、右岸の小村に小憩し、又も馬に策ちつゝ、河を左にし、右に折れて、メリニチヌイ驛に至り、休憩少時、翌日午前二時半、東に向て平野の中を行き、騎行二十里、始て義爾齊斯河時に至る此に至りて始て、張幕中に栖息する民族を見る、即ち幾爾稽思人なり、川を隔て、大厦高樓の林立、聳峙するを阿摩斯科府と爲す、中佐馬を水雲の中に立て、十三世紀の初に當り成吉斯汗が馬に義爾齊斯河に飲ひしは此の邊にやあらんと、思ひ感慨措く能はず、時に阿摩斯科總督は如何にして中佐の至るを知りけん、渡頭の巡查に命じて之を迎へしむ、巡查は中佐の姿を見て、進み揖して、其名を問ひ、中佐と知りて、笛吹鳴らして、左岸に相圖し、汽船を呼びて、河を渡らしむ、彼方の岸には、警部巡查之を待つこと久しく、直に準備の旅館に案内しけるが、未だ幾ならずして、總督は一文官ガビエフ氏を遣はして、慰問し、且つ氏が支那語に通ずるをもて、接待掛をぞ命じける

阿摩斯科

阿摩斯科の人口、約三萬、遙に市街を望めば、大厦高樓、巍然として、林の如く、壯宏雄麗、人目を驚かすに足るも、市中入りて之を觀れば、大厦の傍に、矮屋あり、高樓の隣に、陋舎あり、雕闌茅檐、參差相交りて、太だ奇觀と爲す、且つ建築の壯なるも、二三石造の外は、皆木造なりと云ふ、蓋し阿摩斯科は、軍政上の要地にして、通商上の要地に非ず、去れば彼の魏然として、天を突く者、悉く皆官廡廳舎にして、民家は矮陋、觀るに足らず、是をもて世之を以て、役人町と云ふとかや、其尤重なる建築は、悉比利陸軍幼年學校、高原總督官舎等なりと爲す、高原の上より眺望するに、四邊に樹木なく、街路砂塵多くして、一目荒涼なり、去れば病院の患者、尤眼病多しとぞ、但義爾齊斯河の左岸に、瀕し、朱爾德波爾斯科、德摩斯米巴拉、丁斯科等の要地と、汽船交通の便あり、且つ悉比利大鐵道線路は、數年ならずして、此の市を貫くべく、既にサマルカンドに達せし、中央亞細亞鐵道も亦更に北進し、塞米巴拉、丁斯科を経て、悉比利鐵道と此の市に於て相聯絡するに至らんことを、速からざるべければ、他日西部悉比利第一の要地と爲らんことを、疑ふ可らずとなり

高原總督

到着の日は終日休息し、其翌八月八日の朝、先づ高原三州軍務總督を訪ひけり、總督

は陸軍騎兵大將男爵タウベ氏なり年の頭六十ばかり人となり温厚前日聖彼得堡の報道を得てより貴下の到着を待つもの久しかりきとて途上の經歷を問ひ前途の行程を尋ね且つ直に其夫人に紹介して翌日晚餐の招請を約し前途に向ては出来る限り便利を圖らんなど物語りて待遇尤も憚りけり抑高原三州とは亞克母林斯科塞米巴拉丁斯科塞米勒丁斯科の三州にして其管轄區域は天山以北亞爾泰山に至る清領の境に連り伊犁及び塔爾巴哈台に於ける露國領事を指揮し西部悉比利一萬有餘の軍兵を號令し幾爾裕思遊牧人三百餘萬を統治する者なれば其任重く責大なりと云ふべし

兵備大數

此の日午後高原軍務總督の命令書を携へ去りて豫備歩兵大隊の野營地を訪ひけり此の歩兵一大隊ハ西部悉比利駐戍豫備歩兵三大隊中の一大隊なり悉比利の露國兵備の數は世人の熟知する所記載の要なきに似たれとも中佐馬蹄の進む所漸く清露の國境に近づきしをもて觀光審勢の事を記すに當り今其大數を示すも亦無用に非ざるべし抑兵備上悉比利を大別して西部悉比利東部悉比利と爲す東部は黒龍江地方及び義爾斯克附近の地にして平時大約三萬の兵あり西部は高

原三州總督の管轄する所にして平時大約一萬の兵あり南の方西部悉比利に接する露領土耳其斯坦には平時大約三萬九千の兵を駐び合計大約七萬九千人是れ露國が波斯阿富汗斯坦及び清領の新疆伊犁漠北外蒙古滿州國境に對する兵備なり全悉比利の面積は我帝國版圖に比して三十二倍而して人口は我帝國の彼より多きこと八倍と爲す嗚呼茫々たる者は地盡々たる者は人彼の壯圖大業の二世を震盪する所以の者は豈に地乎抑人乎

幼年學校

豫備歩兵大隊野營地の北隣を陸軍幼年學校生徒の野營地と爲す中佐歩兵の操練を觀し後幼年生徒の野營地を訪ひけり此は全悉比利唯一の幼年校にして東西二部の各地より來りて入學す生徒の數凡そ五百其年尤少きハ十一二の少年尤遠きは哈巴羅夫喀尼古來夫斯科等より來りし者なり十一二の少年にして軍隊初步の學を修めんと欲すれば遠く八千露里許我二千餘里の山河を越えて來學せざる可らず之を我國に視るに沖繩千島の果てより東京に遊學すればとて其半にも足らず我國少年の教育に於ける便且つ易きこと如此し其功固より彼に倍蓰せざる可らざるなり此の日新來の生徒二十四人あり其内一少年は哀れや下痢に苦し

百二十
み居けるが時しも虎列刺流行の期なればとて一人同輩と隔離せしめて他の一空室に投せられけり遠く父母を辭して來着せし日に病の爲めに又其朋友と別れては如何に心細かりけんかし此處にも虎列刺ありけれども僅々四五人に過ぎざりけり

馬首向南

中佐馬を阿摩斯科に留むる者三日八月十二日午後五時を以て途に上る此に至りて始めて悉比利街道と別れ南折して塞米巴拉丁斯科道を取りけり此までは世人中佐を目して好奇冒險の旅行者と爲し東の方一直線に烏拉西俄斯德に向ふなるべしと思ひ居けるに阿摩斯科より馬首南に向ひ非常なる迂回をなして國境要地を過ぐるを觀て其尋常好奇旅行に非ざるを知り其目的に關する種々の批評尋いで起りけり時高原軍務總督ハ其軍管區域中佐の經過すべき亞克母林斯科塞米巴拉丁斯科二州の知事に向て中佐をして便利を得せしむべき命令を發し且つ別沿道の各地方官及び哥薩克村長幾爾稽思會長に向て適當の助力を爲すべしと認めし一通の命令書を贈り出立の日は警察下士同行して之を送りけり此の頃は氣候頗る變じて忽ち秋冷を催はし且つ阿摩斯科より塞米巴拉丁斯科に至るま

で十九日の間一日も晴天なく天色常に曇り屢驟雨に遇ひ時に暴風大雨あり冷氣驟かに至りければやがて夜行を廢し殘暑復た生せし日のみ晝間長く休憩しけり

道路地形

阿摩斯科塞米巴拉丁斯科間の道路ハ悉比利の本道とは違ひて野原の中を貫ぬき野とも道とも分たず只電信柱に沿ふてればろげに一條の野途を辨するのみ路傍處々に木を籠目に丸く編みて高さ三尺ばかりの架のやうなるもの立てり並木を植付けて旅人の立寄る蔭と爲すにやと見れば植木にもあらず人に問へば冬に至れば雪はさして深からざるも暴風雪を捲くこと甚しく紛々面を撲ちて咫尺を辨せざるより斯る標を立て、吹雪の時の葉と爲すものありと答へけり實にも此の邊茫々たる曠原一望際なく眼界の窮る處高低起伏を見ず四面の平野眼に入る者は草のみ絶えて樹木なし斯く果もなき廣野の習ひ平時さへ道に迷ひ易きものなれば吹雪の折こそ思ひやられけれ此の曠野平原の中には例の水草を逐ふて遊牧する幾爾稽思人の張幕斜陽芳草の間に落々たりとなり

哥薩克村

阿摩斯科より塞米巴拉丁斯科に至る七百二十七露里我百九十三里の間遊牧人張
 森の外に人里とも云ふべきは義爾齊斯河に沿ふて近きは二十露里毎に遠きは
 四五十露里毎に散點する哥薩克兵の戎舎あるのみ今之を名けて哥薩克村と云ふ
 其村の戸數少きは十五六戸多きは三四十戸に過ぎず是れ皆國境防禦の爲に屯田
 屯牧する者にして之を西部悉比利哥薩克兵と稱す服装は帽頂肩章腹帶袴線皆紅
 色を用ひて貝加爾黒龍江烏蘇里等の哥薩克の黄章と區別す各村皆村長あり中佐
 の過ぎる處別に村落なければ常に此の哥薩克村に投じけるが既に軍務總督の命
 令ありければ沿道到る處の村々之を待つこと久しく其村近く來掛るや村長は正
 服に制杖を携へて出で、村外に迎へ準備せる小舎に案内して優待措かざりけり
 抑此の村長は公選にして大抵下士官の字を識り算を能くし且才幹ある者を
 選めるが其任期は三年なり若し選ばれて其任に堪へざる者は三年に滿たざるも
 之を免じ才幹任に堪ふる者は再選するを得せしむ中には數村の長を兼ねる大村
 長あり我昔の大庄屋の如し彼の村長の制杖は杖頭杖下皆銀を以て之を製し杖頭
 露國の鷲章を刻し其下に文字あり
 杖は
 朱塗にして大村長の杖には杖頭鷲章の上に銀の一小球を附け更代の時は後任者

に讓渡すものなりと云ふ是れ蓋し我が斧鍬の類にして其部下を鞭撻せしむる
 所以の者か各村哥薩克は皆西部騎兵聯隊に屬するより中佐の騎行を聞きて同感
 淺からず或は老幼男女村外に出迎へ或は農衣を脱ぎすて、急に正服と着換へ路
 傍に出で、禮を施す壯者あり其各村を過るや到る處毎に一二騎の哥薩克に宿次
 に送られけるが村長見送の爲に指名して呼來らしむれば兵卒は大抵帽は正帽に
 して服は農衣を着けたるが直に正服と着換へて隨從しけり去れば平時の服装は
 隨意あるべし其家の丸木を組める露國風の農家と異ならず其生活は他の人民に
 比して貧者を見ず又富者を見ず其馬の骨格稍小さく地水草に富めるも燕麥に乏
 しきより絶えて肥大強健の馬を見ずとなり

再買乘馬

八月十九日ブリエスナヤ驛に至る阿摩斯科を去ること三百二十四露里なり是よ
 り先き中佐の乘馬鳥拉は狂且悍にして遠征に堪へざるべきを知りけるも足の續
 かん限はとて乗り來りけるが鳥拉はイナホチツと云へる性質にて左右各二足づ
 く前足後足一時に動かして歩む癖あり四足かたみに動かして馳する馬とは違ひ
 て左は左のみ右は右のみ一時に兩足を動かして馳する時は奔る毎に右に傾ふ

左に傾ふきて乗心地よからず且つ右へ左へ傾ふくが爲に鞍摺の恐あり烏拉の背
 上既に二つの疵ありけるが烏拉山を越えし頃より遂に鞍摺をさへ生じ日を経る
 に随ひて騎行尤困難に此の四五日は日に日に疲れ果て、所詮物の用には立た
 ず去れせめて塞米巴拉丁斯科まで乗積けんものと思ひ徐々打せけるが烏拉の
 足はやうく弱りてプリエヌナヤ驛に至りしころは打棄て置くか又は乗換の馬
 を買ふかの外はなきに至れり詮方なければ臨時の乗馬を買はんことに決し驛の
 近傍に幾爾稽思人の牧場多ければ買馬の事を村長に謀りけるに村長の幸に
 幾爾稽思の會長を知るものにて俱に往きて會長を訪はんと云ふ因て一輛の農車
 を雇ひて同乗し行くこと凡そ十露里會長の張幕を訪ふ時に會長在らず數多の幾
 爾稽思人は花客來れりと聞きて馬數十頭を牧場より牽來りて中佐をして一覽せ
 しむ皆選に中らず既にして會長歸り來り其馬を買はん欲すと聞き我に愛馬あ
 り請ふ其一を抜けてと數頭を牽出さしむ中佐思ふに一瞥馬の性質と駭驚とを辨
 せんこと難く客中復た之を試むる能はず遊牧人は馬と起臥し馬と死生し其性を
 識る尤明なる者にして且つ人を欺くべくもあらねば如かず自ら選ばしめんに
 はと因て客中馬を買ふの困難を告げ且つ予れ汝を信す請ふ汝子が爲に我遠征の

目的を達するに足る者を選べと云ひければ會長鹿毛の駒二頭を指さして此の二
 馬は兄弟にして其強健なること兄たり難く弟たり難く屢バブロードールに往復
 して絶えて疲勞の態なし請
 ふ其一を取れと云ふ因て其
 一を取りて價を問へは彼れ
 忸怩として云はず中佐唯明
 言せよと迫りければ少時し
 て百留なりと云ふ此の邊
 の馬固より百留に値せず
 其は餘り不當なりと云へば
 去らば御身價を評し玉へと
 云より七十五留と定めて
 買取りけり會長曰く請ふ幕
 内に來りて茶菓を喫せよと

幕中小憩



幾爾稽思人の像

中佐因て村長と與に會長の幕中に入る會長の張幕は三張なり一は倉庫一は從僕
 の居にして其一は會長の宮殿なり其の張幕の下
 には木を籠目に組みて其上より四面小き曲柱
 をいくつも立て、圓く天井を作り上には圓き輪
 ありて此に柱を集め其上に幕を張れり其直徑五
 間ばかり中に入りて見れば草の上に駝毛布を敷
 き其上に更に中央亞細亞邊にて製造する精巧の
 絨氈を敷けり是れ客を延く處なるべし彼等は常
 に坐臥すれども會長は露國官吏などの交際も
 あればにや幕内に二脚の椅子を置き隅隅に無
 数の箱あり如何なる物かを入置くらん幕内の中
 央に爐あり此の高原處々に粗末ながら木と土を
 もて作れる家あり幾爾種思人は昔も今も水草を
 逐ふとの云へ他の遊牧人種とは稍風を異にし冬
 期は此の粗造なる家に住み天候に草萌る比は



ひ家を出で、幕を張り水草を逐て芻牧に従事す去れば其張幕も他に比して不潔
 ならず且つ今の已に露國の治下に歸して稍文明の風をも觀、殊に張幕の附近露國
 商人あり自ら贅澤の風をも知り金銀もて作れる家具をも所有するとかや會長は
 胸に一鈕の長き衣を着けるが其胸及び袖は金色の縁あり且つ勳章を佩びけり
 此の先年露國皇太子殿下悉比利亞巡遊の時拜顔の榮を得て紀念の爲に賜はりし
 者なりとぞ其妻も亦白衣白帽を着て幕内に在り婦人の白衣帽は彼等の風俗あり
 けり妻は先づ馬乳を椀に酌み出でけるが馬乳は牛乳と違ひて其量少く固より貴
 きものなれども如何にも酸味を帯びて飲に適せず中佐飲みかね居たりけるを見
 て村長自分に譲られよとて飲みはしけり其より菓子と茶とを持出でけるが茶菓
 は皆露國風なりければ快よく數盃の馳走を承受け、會長今宵は羊を割きて馳
 走しまゐらせん柱げて幕内に一宿し玉へと乞ひけれども出立の用意あればとて
 辭してプリエスナヤに歸り明日よりは二馬代る、乗らんとて新馬を烏拉の傍
 に繋ぎ鶏肉汁に腹を慰めて眠に就きけり

深夜逸馬

中佐既に枕に就きし後未だ幾ならずして忽ち庭上に人數多立集ひて罵り騒ぐ

を聞く何事やらんと訝りつゝ枕を蹴りて起ち燭を把りて室を出で庭に立ちたる主人に向ひて仔細を問へば主人眉をひそめ目をまろくして馬居らすなりぬとて痛く番人を罵り居けり此の番人の村長の注意にて年の頃六十ばかりなる老哥薩克を雇ひて烏拉の番をさせしものなり中佐何時如何にして飛出せしぞと問へば老番人は聲顔はして去ればなり先程烏拉に水を與へんとて繋ぎし綱を解くや否や一聲嘶きて傍に繋げる新馬を蹴りつ庭の中を暴れ廻るを小生あわて捕へんとせしに馬は門邊に少しの隙あるを見て扉を蹴放し驛地に駈出せしまゝ何處へゆきけん影も見えずと云ふ兎も角も村長を呼べとて人を遣れバやがて出來り斯くと聞きて主人と共に痛く老番人の不注意を責め且罵り且叱るを中佐押留め左な叱りそ過なれば詮方なし兎角言ふまに村中を探すに如かずとて人を分ちて探し索めんとする折しも一農夫一馬を牽きて庭中に入り來るものあり見れば果して烏拉なり何處にか得たると問へば農夫今夜夜已に深けしに訝かしや我廐に嘶き騒ぐ聲聞ゆ出で見れば見慣れぬ大馬來りて我牝馬を挑むなりト駈寄りて引放せしが此の邊には見慣れぬ馬なり今夜此の村の客人とても御身のみ且つ御身が大きな馬に乗りて來玉へりと聞きしかば必定御身のならんと思ひて牽

來れりと云ふに中佐厚く謝して農夫を返し老番人を宥め且つ明朝までの注意を命じ人々にも謝して再び枕に就きけり扱つくゝ思ふに烏拉は疲れし上に狂暴なること如此くなれば所詮新馬に乗りて片手に牽きゆかんやうなく去りて烏拉に乗りて新馬を牽んは思も寄らず去らば烏拉を棄てゝ新馬にのみ乗らんか此まで遠路の旅せしことなき新馬乗續けられては忽ち疲れん今は詮方なし烏拉は此に留めて更らに乗換の一新馬を買はんものと思ひ定めやうく眠に就きにけり

再與馬訣

翌朝村長を招き烏拉は御身に與ふべければ再び會長の牧場に至りて一馬を買ひ呉れよと頼みけるに村長斜ならず打喜び直に馬に鞭ちて牧場に至り一牝馬を買ふて時を移さず馳返れり價を問へば僅に三十留あり前には百留と云ふ今は三十留に過ぎず會長も正直者にはあらざりけり村長は馬を得て喜びに堪へず紀念の爲に哥薩克形の鞍一具を中佐に贈るさて烏拉は性質狂暴にして途中非常の困難を中佐に與へし馬なれども二千八百八十五露里の間行路の難を同くし炎暑を冒し雷雨よ遇ひ夜行の寂寥を俱にして曠野深林の中をゆく者九十三日豈多

少の情なからんや殊に過りし所の地往々燕麥に乏しく代ふるに黒麵包を以てしけるに最初こそ嫌ひけれ飢はては食を擇ばず終には好みて食ふやうになりけるなり途中休息せんとして路傍の樹又は村の入口の柵なせに繋かん折は其暴れぬやうに先づ衣囊より取出で、一片の黒麵包を與へ餌と爲して安々繋ぎけるが馬も味を覺て中佐が途中下馬せし時の鼻を鳴らして口を中佐の方に向け黒麵包の一片を催促するものゝ如くありけり這ひ來る犬は撲れずとかや狂馬とは云へやうやう押れ親しむこと此如きに至りては愛情日に加はりけるに今此に訣別せざる可らざるに至りて俄然たらざらんと欲するも得可らず中佐は別に臨みて衣囊中に餘れる一片の黒麵包を與へ其首を撫でて積日の勞を慰め又も紀念の爲に鬘毛數莖を剪りて訣別を告げ、

求藥不得

既に烏拉と訣し又別を村長に告げ此の日午前十一時を以て一馬に跨り一馬を率ゐて途に上る行きて一小村に至り日中六時間餘り休憩しけるが此の民家にも二人の虎列刺ありけり午後十時半チエルノヤルスカヤ村に至る行程四十一露里なり此の夜民家に投じて主人に黒麵包の外に食物なきやと問へば肉類は絶てな

し但義爾齊斯河にて獲し魚の鹽漬ありと云ふ去らば鹽魚の汁をと頼みて黒麵包に添へて食ひけり此の汁にや中りけん此の夜より下痢しけれバ用意の一藥を服し翌日の滞在しけり翌々廿二日の午前六時半出立し午頃バプロダール市に達す此處は阿摩斯科と塞米巴拉丁斯科と我百九十二里間に於ける唯一の市にして義爾齊斯河の右岸に臨り汽船の河を遡る者概ね皆此地に留り猶遡りて塞米巴拉丁斯科に至る者殆んど希あり是れ水淺く且つ通商の必要尠なければなりとぞ市の人口大約四千時に虎列刺已に侵入して毒勢猖獗十八日間の新患者二百六十四人に及び内二十八人を除くの外二百四十六人は皆死しけり而して此地の醫師の從來二人あり其一人は虎列刺の流行するや藥籠を荷ひ去て他地方に避けしより阿摩斯科軍醫一人出張しけるも猖獗斯くの如くにして醫師は猶二人に過ぎずとなり中佐此の毒氣横溢の中に入りて下痢未だ治せず用心に如くなしと思ひ藥舖に入りて石炭酸を買はんとしけるも賣盡して無かりけり

二馬不良

八月廿三日午前六時バプロダール市を出で、より行くこと八日三百十五露里にして此の月卅日塞米巴拉丁斯科府に達しけり此間新に買ひし二馬の健否如何に

敗殘存之
外族人心
在間性

と乗試みけるに會長が口を極めて賣物に花を飾りしには似て思の外も強健ならず二頭の馬を一時間に或は十露里毎に代るゝ乗換へつゝ心を盡して勞はりけれども足弱くして疲れ易く殊に初買ひし鹿毛の如きは遂に足を痛めて腰にても進まず後に買ひし牡馬も亦躰小さく足弱くして疲勞尤甚しく非常の困難を以てやうやう塞米巴拉丁斯科に達するを得けり幾爾稽思遊牧人の如きは敗殘存の犛族水草を逐ふて遷移し心性殆んど人間の外に在り名譽をも思はず榮辱をも知らねば只眼前の小利に迷ひて人を欺くを恥ぢざるなるべし塞米巴拉丁斯科州知事はバプロダールと塞米巴拉丁斯科との境界に於ける警察下士に命じて中佐の郷導たらしめ更に一文官を大尉八十露里の處に出して之れを迎へ其市外に至るや又參事官マシコフ氏をして出で迎へしむ此のマシコフ氏は佛語に通ずるをもて中佐滞在中の接待を命せられけり中佐乃ちマシコフ氏に導かれて市外なる豫備歩兵大隊の野營地に至り午餐の饗を受け去て準備の旅館にぞ入りける

風物荒涼

塞米巴拉丁斯科府は幾爾齊斯河に瀕して水運の便なきに非ざるも高原上の一市

街なれば雨少く風多く風作れば沙を飛ばし路は皆積砂にして一株の樹木を見ず人口凡一萬市内の人家皆木造にして風物頗る荒涼なりけり斯く衛生も適せざる地にして風土太だ悪しければ虎列刺一たび侵入したらんには其勢測る可らざる者あらん此の時已に日に六七人の新患あり市の一隅に公園あり規模狭小なれども數種の花卉あり此の邊一帶沙地にして青草綠樹を見る能はざるが故に日暮に至れば老幼相携へ兒女隊を成して此に來遊し花下目を怡ばしめ綠蔭涼を納るゝ者多し園の一隅又俱樂部あり紳士紳商日夕相會して遊戯の處と爲すと云ふ此の地荒涼たる一市に過ぎざるも昔時は要害の地にして露國が中央亞細亞を征し幾爾稽思を破り鞑靼人を征服するに當りては堅城を此の地に築きて以て根據と爲しけり去れば當年の城壁頽廢今其面目を存せざるも公園の隅に猶殘堡あり遺砲を其上に置て以て遊者をして當年の威武を想見せしむと云ふ

駐馬三日

是より先き凱旋病の爲に用に堪へずして鳥拉を買はざる可らざるに至り意外の事故に遭遇して旅費も亦豫算に越え囊中漸く乏しくなりければ自ら奉ずるには極めて節儉を加へ靴下の如きものすら破れても買はず或時は比耳摩より阿摩斯

科に至るまで片足の靴下のまゝ行きし事さへあり溢費を省き質素を旨としければも亦日本帝國軍人の體面に至ては曾て之を損せざらんとを務め市とも云ふべき地に入りては相當の旅館に投じ奔走周旋の謝金等は後指さされぬやう取計らひけるより日々に乏しくなりける折しも烏拉困憊逝かず再び馬を買はざる可らざるに至りて旅資益々既しく塞米巴拉丁斯科に至りし時の囊中僅に五百留を餘せしのみ而して天漸く寒く既に華氏の五六十度に下りければ進んで蒙古の寒地に入らんには中佐の衣薄ふして寒を防ぐに足らず時に人あり中佐に向て亞爾泰山の烏蘭達巴には前日既に雪あり此の山一たび雪を得れば往來杜絶し尤危険と爲す若し南折して齊桑斯科に出で塔爾巴哈台を過ぎ轉じて科布多に出るか否らざれば直に東北を指して途を德摩斯科に取りて義爾克斯科に出るに若かずと注意せしものありけれども計畫一たび成る初志を翻へす可くもあらず因て斷然烏蘭達巴の雪を踏まんことに決しけるが其に就きても必要なるは防寒の準備なるに頗る囊中の冷なるを憂ふる折柄義爾克斯科に旅費を送れりとの電報を得て取敢へず義爾克斯科に電報して七百留を取寄せ此に防寒の準備をぞなしける之が爲に馬を此の地に駐むる者六日

訪問

到着の翌日午前塞米巴拉丁斯科州軍務知事參謀少將カルボフ氏を訪ふ時に知事の官舎は市中に建築して工事將に成んとするに及び火を失して炎焼しけるより市外の農家を借り其傍に幾爾稽思風の幕を張り家族二處に分れて住み居たりけりカルボフ氏人となり寡言にして篤實中佐の前途に向て配慮措かず力を盡して其便を圖りけり去て副知事を訪ふ副知事は職を此の地に奉すること久しく蒙古邊疆の事情にも通すること深く天既に寒うして中佐が亞爾泰山を越ゆることの困難ならんとを慮り道路險惡加ふるに風雪を以てし人跡殆ど絶えて宿を求めんに由なき山中なれば郷導なくては叶ふまじ亞爾泰驛に着き玉は幾爾稽思人をして案内せしめ玉へ予其周旋を爲さんなと親切に物語りけり又去りて警視監を訪ふ警視監は昔て職を額喀特林堡に奉せし時會我が板本公使巡遊し其案内をなせし紀念に公使の寫眞を得たりとて一葉の寫眞を寫眞挾より披取りて示しけり遊子故人の風采を天涯に見る其感知るべきのみ又去りて豫備歩兵大隊長を訪ふ大隊長は年の頭六十ばかり其髮斑白にして舉作嬰鏃たり軍功絶群の武人にて高加索征討の役以來露國が他邦と戦を開く毎に未だ嘗て從軍せざりしこと

なく胸に掛けたる數多の勳章及び從軍牌は光輝赫々として其功勳を表しけるが中にも人をして肅然たらしむるは高加索統一の役に得たりし從軍牌にて他の從軍牌は紐もて胸に掛くる式あるに此の牌のみは錢の大きな十字架左胸に横はりて其殊勳を示しけり當時從軍の武人往々凋落して存する者いと少なければ文武官人皆此の人を畏敬すとかや

徵逐連日

此日午後軍務參謀長の招に赴き晚餐の饗を受けり參謀長は副知事と同等にして副知事は行政の事を司り參謀長は軍務の事に任じ同じく州軍務知事の下に屬すと云ふ此の日知事も亦家人を挈げて來會しけるが食後中佐の二馬を牽來らしめ參謀長自ら中佐乘馬の寫眞を撮りけり翌くれば九月一日あり此の夕警視監晚餐の饗に赴けば副知事の夫人も亦在り席に一鞮粗人あり是れ此市第一の豪商なりとて紹介せられけり此の夜歩兵大隊は中佐の爲に夜會を野營地に催はしけり中佐至れば歩兵將校の妻女盡く集まり皆羅袖を翻へして蹈舞し頻に中佐に迫り相携へて舞はんことを乞ひけり中佐固より武人なれば久しく外に在り屢交際場裡に出入しけるも未だ曾て舞蹈を嫻はす而して貴女の來りて相携へつゝ

蹈舞せんことを乞ふは交際場裏の光榮なるをもてはとく謝絶するに言葉なく辛うじて言逃れけり其翌二日は知事の晚餐に赴き酒食の間樂隊の奏樂あり其辭し去らんとするや特に命じて進軍の譜を奏せしむ是れ將官を待つ所以の者を以て我日本帝國の陸軍少佐を待ちしものなり

防寒衣物

居る者六日防寒の衣物漸く成る黒色の羊毛を裏にしたる幾爾稽思風の外套韋皮の袴毛皮の袴耳覆ある毛帽等は是より塞米巴拉丁斯科の寒氣は東部悉比利に比しては薄く極寒の候も列氏零下二十五度を下こと希なり故に此の地方防寒の具とても太だ備はらず固より東部の寒氣を想像して衣物を製せしめんやうもなく此の地の風俗に任せけり去れば此等の衣物長く其用を爲さず毛袴の如きは烏蘭達巴の寒威にすら得堪へず外套は辛うじて蒙古旅行の三分一を終りしに過ぎざりけるが韋袴は此の邊の哥薩克兵の常に穿つ所毛細くして風を透さず毛帽尤寒を防ぐに足り寒中の全旅行を了りて木邦に持歸るを得けりさて衣物の價は意外に廉に韋袴二留五十哥黑羊毛外套裏地十五留表地六留幾爾稽思人の裁縫賃五留に過ぎざりとなりさて中佐思ふに我國には歐洲各國の馬具及び露

國哥薩克兵の鞍等も有らざる所なれども獨り幾爾稽思人の鞍なし彼等は勇猛
 悍の騎兵を以て世界に知られし逐草人種なれば其鞍を齎らして本國に歸らば
 多少參考に資するに足るべく且つ生計不充分なる逐草人種にして獨り馬具の裝
 飾には資を投ずるを吝まぬ幾稽思人の事なれば其嗜好を知るにも足るべしと
 て一具の幾爾稽思鞍を買ひて他の一馬に附けブリエヌナヤ村長の贈れる哥薩克
 鞍は紀念の爲に此の地に留め置きけり時に知事の夫人は紀念の爲に小さき湯沸
 器を中佐に贈る是れ中佐が眞實に酒煙草を嗜まずして唯茶を好むことの知れ渡
 りければなるべし參事官マシコフ氏も亦幾爾稽思風の一鐵鞭を贈る中佐が此の
 市より遠く東西悉比利を跋渉して蒙古滿洲を過ぎ烏港より我東京に至るまで一
 日も手を釋てざりし鞭是なり

銀片滿囊

衣物已に成るも猶必須の一物あり何ぞや蒙古の通貨是なり蒙古固より金銀銅貨
 あるなし況んや紙幣をや物價を定むる者は獨り磚茶あるのみ去れども磚茶は尚
 多く量重くして數頭の駱駝を借らざれば數十日の旅費を支ふるに足らず人あり
 蒙古人尤略什噶爾の銀錢一類は支那の五分を好むよし注意しけれども此とて

蒙古通貨

も容易に多額の銀錢を得可らず銀は蒙古人の好む所因て多く其の小片を携ふる
 に若かず且つ蒙古に至りて一物を買ひ一宿を求めんに到底釣錢を得る能はざる
 可ければ銀片は極めて小ならんことを要すさて塞米巴拉丁斯科より清露の國境
 なる亞爾泰山中烏蘭達巴に至るまで我百七十里の間人家は皆寥々たる哥薩克村
 にして市とも稱すべきは上加米語哥羅斯科の一市あるのみ此處とても蕭條たる
 原上の一小事に過ぎず萬事不便なりと云へば露國の紙幣をもて蒙古通行の銀片
 を買はんには塞米巴拉丁斯科に於てせざる可らず因て滞在中其用意に及びける
 が何分多額の銀片なれば蒐集太だ難かりけり中佐不圖思出でしは前夜警視監の
 晚餐に同席せし鞋靴人なり彼は當市第一の豪商なりと聞く且つ一面識あれば周
 旋し呉れぬ事あらじと思ひ一日訪問して銀片兩替を頼みけるに彼れ快よく承諾
 して露貨二百圓を銀の小片に兩替し呉れけり其を布囊四個に收め英吉利鞍に
 附けたる四個の旅囊中に入れて携帶する事となしけり

細流清冽

發程の準備全く成りければ九月六日正午十二時半塞米巴拉丁斯科を發し行くこ
 と四十二露里半午後七時半タリツキーと云ふ處に至る此處も例の哥薩克村なり

亞爾泰驛に至るまでは皆哥薩克の民家に宿借りしとなり此の間地勢は一帶の草野にして往々途上に細流あり艸の間を縫ひて沈々響をなし清冽飲む可し中佐屋細流を涉りて大高原の將に盡きんとして山脈の漸く近きを知りけり馬上より見渡せば夕陽已に收まりて暮色凄涼秋氣颯然として衣に滿ち爽快言ふ可らず塞米巴拉丁斯科は高原の砂地にて風土甚だ悪しきが爲なりけん出立の前日より頭岑々として痛みけるも此に至りて霍然として洗ふが如くなりけり

露國齋日

次日午前八時發程時に本道の義爾齊斯河の右岸に在り丘に沿ひて沙多く行走便ならず左岸は草野にして太だ騎行に便なり因て川を渡りて左岸を行んとて村を出で、行くこと六七露里義爾齊斯河の渡頭に至る村長及び主人も送り來て舟子の小屋に小憩し河水を汲みて羊の肉汁を調理し鶏卵なぞ煮てもてなしけり此の邊田舎人の氣長く左岸の渡船を呼べと招けと棹を取らず待つこと半時餘にしてやう／＼漕ぎ戻りければ人々に別れて舟に乗る又も三十分間ばかりにして左岸に達す左岸は路平に處々に松の老樹立ちて翠色掬すべく數十日の間高原をのみ乗りし眼にの快味たどへん方なし遙に皆を決して馬首を望めば一帶の遠山

微翠を地平線上に點じて來りて行人を迎ふる者の如きに亞爾泰山の漸く近づきしを知りけり既にして再び河を渡りて右岸の一小村に休憩し午後四時再び馬に上り夕日全く没し月東の空よさし昇る頃はヒヤノヤルスカヤ村にぞ着きける此の日行程四十九露里なり此の夜投宿せし村家の主人萬事不親切にて肉を求むれども今日は齋日なりとて與へず肉は去事ながら此の邊には河魚多かるべし魚類にても苦しからずと頼みけるも其さへなしとて勢を取らず去らば茶と黒麵包にて腹を滿さん馬にも平生の如く與へばとて銀を出して燕麥の周旋を頼むも顔背向け埒明かず因て村長を招きて阿摩斯科總督の命令書を示し其周旋を頼みけるも此さへ燕麥なしと斷りて與へざりけり詮方なければ馬にも黒麵包を與へて一夜を明させけり翌朝一卒來りて麥あり入用なきやと云ふ昨夜無かりし麥忽ち今朝は稔りけん惜さも惜しと思へども馬を棄置き難ければ買取りて食ませけり出立せんとして主人に謝金二留を與ふ此は過分の手當なるに彼の一言の謝辭をも述べずして此の邊の片田舎にては斯る事ども多かりけり抑此の齋日と云ふは希臘教の精進日にて一年三百六十五日の四分の一殆んど齋日なり特に今日も明日も幾日も打續く事あり此の日はすべて獸肉を禁ずれども魚肉は若

しからず今日も明日も打撃かん時幾日も肉を食はで居らるべくもあらねば都會の人は堅く戒を守るとしも覺えねど片田舎の農夫なごのなかくに信心厚く持戒頑固なりと云ふ是より先き中佐チヨルノヤルスカヤを過ぎりし時亦嘗て齋日に遇ひ肉を乞へども得ざりけり時に此の邊蝗害尤甚し中佐居合せし人々に向ひ齋日は家畜に幸にして魚類に不幸なる日なり獸と魚と皆生ある者何とて彼に厚うして此に薄きやと問ひければ衆皆答ふる能はず其生を奪はずして幸福を求めんとならば魚類をも食はぬこそよけれ魚をも食はざらましかば蝗害もあるまじきにと云ひければ衆皆大笑しけり

漸有高低

九月八日午前八時出立村外數里の處にて路二つに分る左は德摩斯科道なり高原と清國國境との山間に在りて地味の沃饒なること悉比利中第一と爲す右は則亞爾泰道二條の電線此に至りて分れて各一線と爲れり中左右を取りて行くこと四十三露里此迄は地勢平坦の原野なりけれども次日は丘を越ゆること三度地漸く高低を見けり山地に近づけばなるべし行くこと六十六露里日暮將に上加米諾哥羅斯科に入らんとするや歩騎砲兵の將校十數名騎して來り迎ふるに會ひ相伴ふ

て月さし昇る頃は市外なる常備歩兵大隊の野營地に到着し晚餐の盛饗を受けたり食後かねて準備されし市中の文官俱樂部に投宿す此地の郵便局長は獨乙語を通ずるをもて滞在中の接待掛と爲り又便利の爲に露語を能する一幾爾稽思人を附けり

邊備周密

上加米諾哥羅斯科は山間の一小市にして海面を抜くこと八百零四尺塞米巴拉丁斯科より高きこと百三十六尺其人口僅々四五千に過ぎず一見寥寥たる村落の光景あり去れども清露境上交又點に位し蒙古の科布多に對する要衝の地にして戰時編制歩兵一大隊西悉比利哥薩克第三聯隊の一中隊及び山砲兵一中隊を駐成す騎兵聯隊の幹部は齋桑斯科に在り齋桑斯科は南の方齋桑湖の南岸に位し南方一山脈を隔て清領搭爾巴哈台と相對し尤邊疆の要地と爲す齋桑斯科の駐兵は戰時歩兵一大隊西悉比利哥薩克第三聯隊の四中隊及び山砲兵あり露國の騎兵六中隊を以て一聯隊を編制す第三聯隊の他の一中隊は亞爾泰驛に屯在す即ち是れ科布多に對する第一線の兵なり塞米巴拉丁斯科より東に向て延伸せる二條の電線あり一は直に亞爾泰驛に至り一は南折して齋桑斯科に達す殆んど兵備なし

邊疆要地。以善救之。兵臨無備之境。

ども云ふべし蒙古に對する露國の兵備如此しと云ふ嗚呼亦密なる哉中佐次日山砲兵の操練を此の地に觀けり此の山砲兵は騎砲山砲地形に因て兩様に適當すべき編制にして險峻嶺砲車を通ずる能はざれば則ち砲及び車を解きて盡く馬背に馱し兵卒は馬を引きて徒歩し道稍平坦にして砲車を通すべければ則ち砲及び車を組立て、兵卒騎馬して之を運搬す山地には尤適當なる編制と云ふべし兵卒皆演習に熟練し砲車の分解より馬背に馱するまでに十二分間を費し馬背より卸して砲車を組立つるまでに僅々六分間を費すに過ぎずして操練全く了れりと云ふ善く教ふるの兵を以て備るなきの境に臨む亦盛ならずや郵便は阿摩斯科に至る定期一週三回聖彼得堡に至る一週二回十八日を以て達すとかや

奇遇

酋長より買ひし二馬用に堪へず更に乘馬を買ひ且つ防塞準備の足らざるを補はんとて二日此地に滞留しけり到着の翌日警部長を訪ふ警部長は嘗て馬の條下にも記せし如く故ありて士官より兵卒に賤されしこと二度に及びしことある人にて屢蒙古に往來し久しく科布多に駐在し彼の地の事情に通ずること深きより中佐が防塞の具酒備らざるを見て種々の忠告を爲しければ此處にて裏毛の上衣

一着及び裏毛の袴一着を調製しけり尋いで指令官裁判所長大隊長を訪ひ去りて砲兵中隊長を訪ひけり此の人は嘗てオストロレンカの中隊長たりける時中佐を迎へて晩餐を饗せしことあり今又二百四十五日を隔て、此地に再會しけり中佐の旅行日月を費すこと長く山河を涉ること遠ければ一年有餘の長旅行中には往々如此き奇遇ありけり此の夜重立ちし人々俱樂部に會して晩餐を饗しけるが會食の間奏樂もありいと盛なりけり尋いで彼の砲兵中隊長の夜會に赴く中隊長は故ありて先妻を離別し新婦を携へて來任しけるが新婦芳紀二十容色絶美其名世に高しと聞きければ此の夜病氣の爲に得も客に接せざりけり露國にて離縁の曲直は法官之を斷じ直者の男女各再縁を求むるを得れども曲者は再婚再嫁するを得ず其配病死すれば再婚三婚するを得るも四たび婚嫁するを許さず僧侶は一回のみ去れども法律上婚することを得ざる鰥夫の家には往々保姆或ハ婢と稱する似合の女ありとなり

命名祝日

九月十一日は露國皇帝陛下の命名日なれば午前十時より寺院にて頌禱の式あり文武官は正装して會し式終りて後寺院の前にて觀兵式あり此の日人民も亦會し

て皇帝の萬歳を祝す其上を奉ずること厚き他邦の見ること罕なる者なり此の夜歩兵大隊の野營地に夜會を張り燈を點し花火を揚げ盃を擧げ且つ蹈舞して以て皇帝の萬歳を祝しけり警部長も亦其名をアレキサンドルと云ひ此の日其命名の式日なりければ朋友知己を會して祝宴を張り中佐も亦招かれけり其辭し去るに臨んで警部長手を握りて送り出で樂手に命じて進軍の譜を奏せしめつゝ旅館なる文官俱樂部に送りけり抑我邦にては尤誕生日を祝し露國にては命名日を祝する習なるが命名日とは一年三百六十五日の間何月何日は何と云ふ名と云ふ如く日割に名を定めつ日に因て各其名を異にし九月十一日は即ちアレキサンドルと云ふ名を命ずる日にて上は皇帝より下は匹夫に至るまで同名の日なり去れば九月十二日に生れし子にアレキサンドルと云ふ名をつけんとするには來年の九月十一日を待ざる可らずと云ふ

三買乘馬

途中馬を買ひし事は嘗て馬の條下ニ詳記せしも猶此に摘記せん二頭の幾爾稽思馬意外に弱く且つやうく亞爾泰山近うなりしかバ到底用に堪ゆべくもあらず更に山間の氣候に慣れし馬を買はんことを警部長及び哥薩克隊長等に圖り數

馬を觀けるも皆良ならず尋いで一馬を群に抜かんとす人あり叱して曰く此の馬は是れ病馬先日まで病院中に呻吟せしものに非ずや何とて斯る馬を引き來れると彼の病馬を賣らんとせしものは赧然として去りけり難い哉客中匆卒に馬を買ふことや殆んど欺かれんとしてやうく免れつ更に月毛の駒の素性もよく分り競馬などにも勝たぬことなしと云ふを馬に精しき人々も良馬なりと云ふに中佐も同意し價百四十留と云ふを警部長の周旋にて七十五留又買取りけりプリユスナヤにて買ひし二馬中牝馬は紀念として警部長に贈りければ此の國の風俗馬は人より只貫ふものに非ずと言習はせとて其返禮に五哥の銅貨を與へけり我邦などにて所謂縁喜なるべし斯る豈は何處にも似たる事のあるものかな他の一馬は亞爾泰驛にて乘馬を買ふまでの臨時乗換として引きゆく事となしけり

馬首漸仰

既に新馬を買ひ防寒の衣物も亦成りければ乃ち九月十二日午前六時を以て途に上りけり郵便電信局長參謀大尉山砲兵大尉軍醫正等送りて十里外の一小村に至り卓を圍みて茶を喫し休憩數時山砲兵大尉中佐に謂て曰く貴下は善く露語に通ず本だ妙なりと中佐曰く否露語を知らず大尉曰く去れと過日下士と與に露語に

て談話を試み玉ひしに非ずや中佐曰く聊か日用の一二語を知るのみ大尉曰く否
左にあらす下士は貴下との談話を筆記したる末に中佐は何歳もして其身は富み
休泊毎に謝金なぞいと手厚しなぞ認め報告せり予は其談話の状によりて貴下
が露語を善くするを知れりなぞ物語りけり接待に出でし下士などは中佐の言
衆動等を報告せし事もありけり此の日裁判所長も見送らん等なりけるも上加米
諸哥羅斯科を去る四十六露里のクラスノヤルスカヤ驛に三人の虎列刺病者生じ
て出張せし爲に得來らざりけり是を中佐旅行中虎列刺談の最終と爲すさて見送
の人々と村東に別を告げ行くこと八露里にして路は山間の狭谷に入れり塞米巴
拉丁斯科以東は既に亞爾泰山脈に入りけるも猶高原を過ぎて其大山脈たるを知
る可らず此に至りて始めて山中に入るを知る時に日既に没して四顧蒼然たり
ウリバ河を渡りて又も溪間の小路を行き幾たびか丘阜を上下し又幾たび溪流を
徒歩し一峯を越えてウリビンスカヤ村に至りて一農家に投ず此の日行程二十六
露里なり此處は哥薩克の寒村にして磚茶と黒麵包との外には一物なく殊に砂糖
さへあくて茶をのみ打飲みけり如何に貧村なればとて砂糖なきのさかりけるに
去りては下戸の中佐いかに不自由なりけん

山深且險

翌十三日午前八時十五分馬に上る驛外即ち山にして溪流處處に潺湲たり坂を上
ること十一露里下ること一露里又登り且つ下ること二露里溪谷稍開きて中に小
村ありフエクリストーヴスカヤと云ふ小憩して去り又山を登り且つ下りて午後
三時シニェルナヤ村に至る此の日行くもの二十九露里磚茶黒麵包鶏肉汁をも得
けれども全村を探し廻りて一塊の砂糖をだに得ざりけり上如米謝哥羅斯科以東
萬壘の峯巒一起一伏して馬首漸く仰ぎ道路漸く険しく山には樹木なしといへど
も艸棘鬱生し尤牧畜に適し沿道の村落皆哥薩克の屯牧なりと云ふ翌十九日午前
六時半登程し村を出て直に一峻坂を登ること七百尺四露里にして高原を
上下し又登ること九露里にして此の嶺の頂上に達す此の頂の兩傍は高く中央
一道凹んで路を成す其狀鞍に似たり故に鞍嶺と云ふとかや晴雨計の測量に因れ
ば山下の村より高さこと大約千四百尺以て其峻險を知るべし嶺を下れば路は狭
谷の間に在り險岸絶壁直に双肩を壓し岩石路に横り傾斜峻急にして深水路に
溢れ騎行困難なりけるが下る五露里にして地稍平なりけり左折して小流を渡り
アレキサンドロースカヤ驛舎に入りて休憩す

以蜜代糖

アレキサンドロスカヤ驛舎の主婦惻切にもてなしけれども復た砂糖を得ず茶に砂糖なきは美人に鼻なきが如くなりけり亞爾泰山中一帶の地方の道路険悪にして運輸便ならざるより尤乏しきものは日用雜貨なりとかや去れば人生の生活に無くて叶はぬ砂糖を得る能はざるより此の地方にて之に代ふるは蜂蜜なり亞爾泰山中は草花に富めるより多く蜜を産出し其高嶺くべきものあり且其價太だ廉に一布度四十斤上等五留中等四留下等三留に過ぎずとなり中佐の過ぎりし時秋冷已に深く所謂紅葉の時節にして霜露野に滿ち萬草殆んで枯れ復た亞爾泰植物の富を見る能はざりけれども蜂蜜の製造盛大なるを聞きて其野花の咲満ちし頃のうるはしさを忍びけり此の邊又芻牧に富み家畜繁殖し馬一頭上等五十留中三四十留下二十留農馬に至りては十留以内牛一頭上等十五留並十留羊一頭上等三留並二留に過ぎずと云ふ休憩二時間にして又馬に上り一嶺を下れば哥薩克屯牧あり此處を去ること一露里ベレンツヨグスキー村を過ぎ直に間道を取りて又も一高嶺を上る路甚だ急ならず車輪を通すべし嶺上一溪流を脚下に望む水光斜陽と相映じて畫を成し重嶺疊峰或は高く或は低く風光

頗る佳なり一村溪水の右岸に在り中佐馬を嶺上に立て遙に村を指さして隨伴の哥薩克兵に謂て曰く彼の村を何とか云ふ曰くウストプナルミンスカヤ村と云ふ曰く知らず戸數幾何ぞ曰く百六十戸曰く砂糖ありや否曰く蓋し之あり中佐乃ち命じて曰く汝先づ去りて村に至り砂糖二斤茶半斤を買ふて而して之を待てと哥薩克兵乃ち鞭ちて去る中佐食指動きて禁せず徐に嶺を下りて村に至れば彼れ果して用意して待ち居けり村長準備の民家不潔なるより更に驛舎に入り直茶を命じて大に砂糖を和して立てころに五六碗を飲盡して目かゆき時一滴の精水水をさせるが如く精神爽快を覺わけり怪しむに足るなきのみ中佐の下戸なり酒も飲まず烟草も喫せず食物も亦嗜む所なく唯腹に滿つれば足れりと爲し而して獨り茶に砂糖を和して飲むを好みけるに此の數日は砂糖なくて困り果てければなり此の日行程四十五露里

田家光景

九月十五日午前七時發程しプナルマ河を渡りて高原野の中を行き屢丘陵を上下しゴロニ驛に至る時に驛外に數百の村民群集し或は歩し或は農車に乗りて節をかしく唱歌しつゝ來る一隊に遇ひけり近づきて見れば耶蘇の像めける

額面やうの者を追取圍み村長例の朱杖を携へて其傍に立ち無數の婦女も亦讚美歌を唱へつゝ從へり仔細を問へば神像を上加米諾哥羅斯科に遷すなりと云ひけり亦是れ我邦田家に於ける神社遷座の式の如きものにやあらんやがて山間をたどり高原を行き左に義爾齊斯河の清流を望みつゝ正午チユレムシヤンスカヤ村に至る驛路記する所によれば二十露里半とありけれども實は二十一露里なり此の邊我昔日卅六町一里とも稱し五十町一里とも稱せし如く往々里程に差あり途上電信柱に里數を記しけるが平野の地にては大抵電柱十五本にして一露里の割なりけれども山に入りては迂回曲直長短同じがらず臆測を以て之を算するに如かずと云ふチユレムシヤンスカヤハ山間の一小村にして直ちに義爾齊斯河の清流に枕り峯巒高く左岸に聳え老樹村を繞りて風物ただ佳遠く望めば一園園の如しとなり此に休憩し鶏肉汁を食して晚餐を喫し午後四時又も途に上りけり

酋長來迎

草野の中を行くこと十四露里日全く没し暮色人を襲ひて四顧黯然たり時に路傍に騎士數人の整列するを見る中佐其故を知らず隨行の哥薩克兵進んで之を語り歸りて中佐に報じて曰く吃爾噤子人なり地方警察官の手簡に接し良馬を貴官の

選定に任せんとて先づ來り迎へし者なりと中佐乃ち馬上一體して過ぐれば彼等は騎して其後に隨ひ午後七時四十五分マロクラスノヤルスキー驛に至る此の日程六十二露里なり時に酋長正服して部落長及び吃爾噤子人數人を率ひて入りて拜す中佐命じて明朝馬を引き來らしむ此の夜中佐聞く此の地より直に齋桑斯科に達する道あり三日にして至るべし齋桑斯科より清領塔爾巴哈台に達する道能く車を通じ僅々三日程に過ぎずとなん此の邊の野は草秣に富むのみならず地味沃饒にして殆んど凶荒なく復た蝗害を見ず多く麥類を産し燕麥一布度の價上三十哥並二十五哥に過ぎず之を内地の一布度一留二三十哥に比すれば其差大なりと云ふべし翌朝吃爾噤子人數馬を引來りて選良を請ふ皆選に中らず中佐謝して之を遣る

始望山雪

午前七時四十五分馬に上る此より山巒分れて二と爲る左路を亞爾泰驛道と爲す右は則義爾齊斯河にして直に齋桑湖に通ず中佐義爾齊斯河に沿ふて行くこと四十日間毒氛横溢の野を行き寂寞無聊の境を過ぎて鬱々たる煩襟此の清流の爲に洗はれ怏々たる客愁も此の水先の爲に懣められけるが今日よりは此の別を告

百五十四

げさる可らず喟然として、溪流に臨みて水伯に告げて曰く、嗚呼、義爾、齊斯、汝が舉世混濁の中に在りて、獨り清淨潔白の性を失はざるハ、予の尤喜ぶ所、永く心に銘じて忘れざるべしと、飄然鞭を揚げて左路に入る行くこと未だ幾ばくならず、天末遙に亞爾泰山嶺の雪を雲烟縹緲の間に望みけり、途よ二人の吃爾、噴子人に遇ふ、彼れ二馬を引きて其買はんことを乞ふ、一ハ栗毛にして太く一ハ鹿毛にして少さけれども二馬共に逞ましげに屈強の逸物と見え殊に栗毛は蒙古跋渉に適當なり、但背に鞍摺の痕あるのみ買ひ度きは山々なりけれども此まで幾度か馬を買ひ損じて殆んど途中馬を買ふの困難なるにあぐみ果てし折なりければ兎も角も亞爾泰驛にて買はんものと思定めつ、断念めけるが行く、猶栗毛に心残り遂に亞爾泰驛に着きて馬を買ひし後も彼の逸物を買ふべかりしものをといと口惜しかりけり此の日行くこと四十三露里マロナルムスカヤ驛に宿す此の驛海面をぬくと一千六百八十尺なり

小富士山

マロナルムスカヤより亞爾泰驛まで七十露里翌日必ず至らんと思ひ朝とく出立ん筈なりけるも昨夜日記をものして夜十二時過る頃はひやうく眠に就きけれ

ば覺ぬすも寢忘れて翌十七日は午前七時に出立しけり行くこと十五露里一寒村を得此處は三十餘年前までは清露國境なりきと云ふ去れば清國は此の方面に於ても亦亞爾泰山西豐饒の地二百五十露里即ち我六十六里を失ひしものなり此より兩山相迫り水狹谷に激し奔流雷の如し流を渡れば道路蛇行既にして地形又開け前面峯巒雲に入り嶺皆雪を冠し白髮仙人來り相迎ふ者の如し谿深くして霜濃に遠近の樹木皆紅に染み燦然火の燃ゆるが如く彼の山上の積雪と映帯して風光尤美はしかりけり一道の松林且断れ且積く中を過ぎ行けば右の方に雲に聳ゆる一高山あり山上又白雪を戴きて青松の間に隠見す其形四面玲瓏我富士山と相似たりけり中佐轡を按じて願望し低徊

清正忠勇
中佐壯烈
古今同軌。



稍久しく故國の情禁する能はず憶ふ昔時加藤清正征韓の役馬を威鏡道上に立
 い海を隔て遙に富岳を望み君を思の情に堪へず遠く故郷の方を伏拜みて英雄
 の涙を鎧の袖につゆめりとかや彼は征韓歳を超えて干戈を取りて死地に立ちし
 者而して山は眞の富士其威固より予が太平の遠征姿相似たる山を望みしと日を
 同うして語る可らざるも君を思ひ國を思ふの情豈輕重あらんや請ふ予も亦此山
 に命じて亞爾泰小富士と云ひ以て長く帝國軍人の蹄痕を印せんとて遙に山靈に
 向て命名の意を告げ振返りしつゝ行きけり清正の忠勇中佐の壯烈古今同軌傳
 へて以て美談と爲すに足る水を渡り森を過ぎ屢山阪を上下して夕日全く没し
 ければ暗夜を冒して山中を行くこと八露里にして亞爾泰驛に至る亞爾泰駐屯哥
 薩克騎兵第三聯隊の中隊長土人より中佐の近づきしを聞知りて夜間馬に鞭ち來
 りて驛外に迎へけり寒米巴拉丁斯科より亞爾泰驛に至る四百七十七露里我百六
 十七里此間天常に晴れ氣候漸く冷に風光又美にして騎行太だ快なりけり此頃
 の氣候は九月十五日列氏十五度十六日十七度十七日十四度に下りけり

亞爾泰驛

亞爾泰驛は露國驛亭の東に盡る處にして海面を抜くこと三千二百六十尺山間新

開の一小村なれども尤國境要衝の地と爲す税關あり郵便電信局あり哥薩克騎
 兵第三聯隊の一中隊此に駐成す夏期の驛南數十露里外山間の湖水の畔に幕營を
 張りて駐練し天已に寒く湖水氷結するに及んでは幕を撤して驛に歸るとなり東
 の方一露里の地に一小村あり加屯哈拉該と云ふ清領たりし時蒙古遊牧の地にし
 て今猶其部落の名に從へるものあり今は吃爾噠子人に住し賣買に従事す騎兵
 營所の驛と村との間に在りと云ふ中佐馬を買ひ導者を雇はんが爲に蹄を此地に
 駐ひる者二日

馬及導者

上加米諾哥羅斯科の馬固より臨時の乘馬に過ぎずブリエスナヤの一馬は駭馬の
 み更に蒙古跋涉に適する二馬を此の地に買はん筈なりければ是より先き寒米巴
 拉丁斯科の參事官及び上加米諾哥羅斯科の警部長等より書を此地税關官吏ウラ
 センコ氏等に寄せて其助力を爲さんことを頼み遣はしけりウラセンコ氏は善く
 馬を相する者なり到着の翌十八日露人の牧場及び吃爾噠子人の牧場より數馬を
 召集してウラセンコ氏及び哥薩克中隊長等と共に其良を選び葦毛の五才駒一頭
 を群に抜きて之を買ふ價四十留是れ即ち亞爾泰にして亞爾泰山中ブナルマ

河溪なる露人の牧場に産せし者なり其翌十九日吃爾噉子會長成吉思台附近の地に牧場を有するもの十數頭の馬を引來りて中佐の選拔を乞ふ乃ちウラセンコ氏をして之を相せしめ且つ屢之を試乗し遂に栗毛の六才駒一頭を買ふ價亦四十留興安是なり是より先き塞米巴拉丁斯科州副知事嚮導なくして蒙古に入るの困難ならんことを慮り書を此の地の官吏に寄せて囑するに吃爾噉子人を雇ひて嚮導たらしめんことを以しけるより税關長は嘗て屢科布多に往來せし一吃爾噉子人の活潑なる者を雇ひて中佐の嚮導たらしめけり彼れ中佐に謂て曰く烏蘭達巴を越ゆる雪未だ有らざるの時に及ばざる可らず今や天漸く寒く風雪山を埋め道路險惡跋涉尤難し貴官を送りて蒙古に入らんこと豈勉めざらんや但歸途只一人此の險山の雪を蹈みて無事歸着せんこといと危ふし況んや清露境界の地盜賊出沒兵器を携ふるに非ざれば過ぐ可らざるをや請ふ二人を雇ひて以て歸路平安ならしめよと然れども此地雇に應ずる者なし因て途中更に一嚮導を雇はんことゝなしけり興安亞爾泰の二馬を乗馬と爲し他の二馬を駄馬と爲して蒙古科布多に入らんまでの準備として燕麥を駄せんことゝし且蹄鐵を豫備して蒙古跋涉の用意全く成りけり

娘子軍

九月廿日雨をばふる彼の馬を賣りし會長も見送らんとて旅館に在りて用意調ひければ出立せんとする折しも使來りて今暫し御待ち下さるべしと云ふ少時して餘に時刻移れば遂に馬に上り會長及び嚮導と共に雨を冒して發程す時に午前九時半なり又も使來りて何卒そろ／＼打せ玉はるべしと云ふ仔細は知らねども徐に打せけりやがて後邊に嚮の音蹄の響して一隊の騎馬武者追かけ來けり官人紳士の見送りたにこそと思ひ馬を駐めて之を待ちけるに彼の騎馬の一隊馳せ來りて帽を脱しつゝ會釋するを見れば思ひきや眉目よき夫人かよわき令嬢なんどの男裝して來り送るものからんとは彼等は税關官吏騎兵士官なんどの妻女にして馬乗る術知るものゝ悉く男裝して其夫と共に甲斐々々しく馬に打乗り馬に得乗らぬ婦人は車に行厨を携へて十餘露里の地に見送らんとて來追ひしものなりけり中佐意外の送別を喜び且つ謝して同じく烟雨の中を馳せ雲に發ゆる白妙の山の麓に至れば人々馬を燃ゆるばかりなる紅葉の老樹に繋ぎ枯草の上に毛布を敷き柴を拾ひて火を焼き溪水を汲みて湯を沸かし行厨を開き盃を舉げて異口同音に中佐の無事成功をぞ祝しける此の人々は長く亞爾泰山中に住し固より烏

蘭達巴の險を知り嚴冬蒙古旅行の困難なるを詳にする人々なれば深く中佐が雪已に至れるに及びて險惡の地に入るを氣遣ひ健氣なる女武者達のかれこれもてなす言の葉の上に情の露置きて袂もぬれんばかりに惘なりけり見送る人の心も深き溪間に生ふるいつ迄草のいつまで惜しむも名残は盡き去らばとばかり立上り手を握りて別を告げ鞭追取つて馬に上り溪間をさして駈出でけるが何やらん呼ぶ聲に思はずも振り返り見れば彼の一族の娘子軍及び官人紳士立並び手巾打振りて口々に中佐の無事を禱るなりけり

投宿幕營

此の日行くこと三十五露里午後四時成吉思台に至る成吉思台とは蒙古遊牧時代の地名にして今も猶之に従ふ其附近は吃爾噶子人遊牧の地にして帳幕の外に一人家なし地稍高き處の帳幕を亞爾泰驛駐成騎兵中隊より分遣せる一小隊の野營地と爲す是れ蒙古の科布多に對する兵備の第一前哨なり野營期は五六七八の四箇月にして時に或は馬を驅りて遠く烏蘭達巴地方を探検す軍馬は平日路間の草野に放牧し二三の兵卒をして之を看せしめ一朝馬を用ゐるに當りては一聲の喇叭を相圖に直に馬を牽きて歸營すとより士卒皆斯る山間幽谷の一人家もなき地

一則兵備周
密一則姑
息偷安。

に四五箇月も駐紮して飲食の樂をさへ得る能はざるべきに士氣漸々久うして衰へず勇壯の色營外に溢れたりとぞ露の國境は斯くばかり兵備周密なるにも拘らず清領蒙古の邊疆に於ける支那官吏は姑息偷安枕を高くして太平の夢を食ふこといと不思議にこそ思はれけれ小隊長は中佐と同行して此處に至り幕營の傍に一幕を張りて此又投じけるが此夜中隊長より野營撤去の命あり明日は營を撤して歸らん筈なりけり是れ寒氣漸く深く幕内の栖息に堪へざればなるべし吃爾噶子會長一頭の羊肉を携へ來りて中佐を饗し且つ一毛布を貸しければ爲に夜寒を防ぐを得けり

羊肉松實

翌廿一日幕營を出るや小隊長六騎を従へて出で、送る行くこと廿一露里を烏樞立斯克と云ふ此の地を亞爾泰方面村落の最終點と爲す以東復た一村一落一人家なく車道此に盡き里程表も亦此に盡きけり送り來れる吃爾噶子會長は年の頃七十ばかり中佐に謂て曰く僕老いたり遠く送らんと欲するも能はず請ふ手を此に分たんと中佐謝して之を遣る馬を驅りて一小嶺に上れば彼の小隊長以下六騎も亦別を叙す中佐小隊長に請うて酒代五留を兵卒に與へて別れけり此より以東道

山中奇品

路險峻復た車を通すべからず山路崎嶇足指益仰ぎ登ること十五露里高さ大約二千餘尺巨岩聳峙石磔路に横り懸崖削るが如く一步を誤れば人馬忽ち千尺の深谷に墜つべし又下る六露里許二千二百尺溪川に沿ひて阪を下り漸く山下溪間の草野に出でけり平地に一帳幕あり此の邊を達巴特と云ふ亦吃爾噉子の部落なり焉播立斯克を距ること二十五露里成吉思台を去ること四十六露里此に至りて更に一嚮導を雇ひけり部落長贈るに羊肉を以し吃爾噉子の一少年も亦來りて松實を贈り其の勞を慰む松實は山中の奇品なりとぞ幕外皆山賊々たる峭壁翠屏を繞りすが如く岩石蒼苔を衣て青松其間に生じ溪間亦松及び樺多く蒼然幕を圍み幽邃寂寞復た人間非ず中佐馬を溪間草野に放牧し嚮導をして柴を拾ひて火を燒かぬ羊肉を煮て食ひ以て晚餐を了りけり羊肉は胸を割きて串にさし遠火に煮れるを尤美味と爲すとかや

訪古成營

其翌廿二日天曇れり拂曉幕を出でり行くこと二三露里草野盡きて山阪に入り林を過ぎて山を登る路急にして且險隘木路に横りて之を除く者亦巨石狼藉之を去る者なく荒廢壞頽殆んど路を辨す可らずたどりて登る折しも雨に遇ひ

けり漸く山上に至りて遙に樹間より見渡せば前日成吉思台の雨は此の邊の雪なゆけん山皆白雪を帯びけりやがて雪は雨に和りて至り氣候列氏七度に下れり山を下りて溪流の右岸に出で溪に沿うて上れば此の邊殆んど路なく岩石と泥濘との馬蹄を妨ぐるあるのみ而して路尤險惡の地には泥濘の上に木橋あり長さ一町もしくは二町是れ清露二國管て費を伊犁に啓き將に干戈に訴へんとせし時露國運兵の便を圖りて架せし者なり爾來十數年未だ嘗て修繕せず板破れ柱朽ち復た行く可らず橋畔堅泥堆を成し水巨岩の間を流る馬其間に踰躡し進まんを欲して能はず一步二歩路を求め而して行き辛うじて成達憂禿に達するを得けり達巴特より三十五露里此處に木造の一敗營あり是も亦當時兩國將に事あらんとするに當り兵を駐りて邊を成らし處なりけり今や空營人なく頽廢日久しくして魍魎の窟となれりけり中佐乃ち嚮導と共に空營の中に入り溪水を汲み湯を沸かし午餐を煮喫しける

路遇大雪

午後一溪橋を渡りて溪間を行くこと五露里又巨岩堅泥の落々路に横はるに遇ひ騎行尤難かゆけるが同行の吃爾噉子酋長は遂に誤りて馬もろとも顛倒し

けり急行きて雪愈甚しく霏々帽を吹き紛々面を撲ちてさしも美はしかりし亞爾
 泰山中の緑樹何處へ行きけん眼に入らず眼前咫尺殆んを辨すべからざるのみな
 らせ路の益險惡なり郷導は行くく枯木を切りて馬に駄す何にかすらん分らね
 ば棄置きて峻坂を下れば溪水激奔巨岩磊々雪は岩石を埋め結んで堅氷と爲り馬
 其間を行くに潤滑蹟かんと欲し肌に粟を生ずるを覺えず歩々慎重地を擇んで馬
 を進め又急坂を上ること數露里雪益々甚しく四顧辨せを劇冷骨に徹しければ始
 めて手袋を用ひ手巾を取りて首に巻きつゝ飛雪を胃して峻嶮を涉り登りて
 忽ち巨岩狼藉の間に陥り道を求むれども得ず方向さへ辨し難く郷導すら彷徨進
 む能はざりけるが幸うして岩石の間をたどりて山上に至りし頃はひ狂風忽
 起り雲散して雪止み天色漸く晴れけり中佐首を回らして四顧すれば満目の風光
 一變して夢に異郷に入りたらんやうなり是れ先に未だ雪に遇はざるや名にし負
 ん亞爾泰山中の樹木茂り合ひて緑の色猶濃なりけるが大雪至るや眼前咫尺を
 辨せず帽を傾ふけて猛進するうちも陰森たる緑樹歴々目に在りけるに今や萬壑
 の峯巒悉く皆雪を戴きて四顧雖も滿目一白艸も樹も埋め盡されて眼に入らず
 瞬時觀を改め恍として世を隔つるが如くありければあり嶮の上の地稍平にして

四面又山あり山皆高く雪線の上に登ゆる者蓋一萬餘尺に下らざるべし而して一
 萬餘尺の高山猶且一丘阜の如くなりけり是れ中佐が踏む所の地既に高きを知る
 べし嶮上平野あり大小の湖水處處に點綴し山上山下只數多の大鷲を見るのみ眼
 界快潤無限の壯觀なりけり嶮上平野の中を行くこと數露里午後六時半鳥科克に
 至る成達嘎禿より鳥科克に至るまで二十五露里達巴特を去ること六十五露里此
 間を亞爾泰山中至嶮至惡の境と爲すと云ふ

又宿幕營

鳥科克にも亦一幕營を見る是れ税關守兵の駐成する所騎兵下士一人兵卒十人あ
 り一年を以て亞爾泰驛より交代駐成す中佐聞く此の邊六七月の交猶降雪ありと
 嚴冬の寒想ふべし比隣一幕なく峯然たる雪嶺の下に馬を友とし銃を枕とし虎狼
 の聲を聞暮じついで歳月を送る之を成吉思台の駐兵に比すれば艱苦日を同うして
 語る可らずと云ふ此夜中佐又幕營中に投宿しけり幕内一煖炉あり其中に駱駝の
 毛もて織れる敷物を敷き其上に毛布を敷き四邊には正服を掛け武器を飾りけり
 其食料は日數經し黒麵包を吃爾噉子人より得る羊肉のみ其馬は常に溪間を放牧
 すとかや此の日雪に遇ひし時列氏零度夜に入りて零下四五度に下りけり時に一

大聲逐狼

次日午前八時途に上る濃霧數里咫尺辨せず既にして霧散じて天晴れ高峯峻嶺雪を載きて巍然たり只道左の一峻嶺夏時雪なきのみ其餘四時雪ありとかや平阜を行き草野に出づ廣さ二十餘里中に湖水あり山姿倒映風光殊に佳湖畔小憩霧導火を燒ぐに彼の馬に駄せし枯木を以す枯木は附木にして湯を沸かすには乾きし馬矢を以するに始めて其注意の至れるを知りけり此の邊深山の中なれども氣候左まで酷ならず野草に富みて牧畜に適し處々群羊の遊ぶを見る時に何やら大聲に叫ぶ音の響きに響きていともものすまじきに此は何ぞと問へば狼の牧羊を狙ふを見つけて牧童大聲疾呼して急を附近の牧場に報ずるものなりと答へけり既にして遙に騎士二人の至るを見る近くを見れば吃爾噉子人の羊一頭を携へ來りて中佐の勞を慰むるものなりけり午餐後平野を行き野盡きて山に入り山に沼澤多し又獨牧に富めり午後一時雪嶺の下に至れば溪水あり清冽飲む可し頂上烏蘭達巴には水なし此處に一夜を明さんとて近傍の吃爾噉子會長の人をして馬に駄して齎らさしめし幕を張り其中に宿しけり吃爾噉子人の幕を張るには僅く二十分

間を費すに過ぎずとなりさて彼の羊肉を調理して晚餐を喫し餘れるは湯煮にして貯へけり此の夜寒氣急に烈しく終夜寝られざりきとぞ此處は山嶺なる烏蘭達巴を去ること五露里海面を抜くこと八千餘尺

山嶺題名

明くれば廿四日の朝七時半石徑を行き沼澤を涉り登ること五露里午前十一時亞爾泰山の絶嶺なる烏蘭達巴に達しけり達巴とは猶嶺と云はんが如し此處を清露二大帝國を境界と爲す中佐境上に立ちて四顧するに境界の表もなく守疆の人もなく荒涼寂寞風樹梢に鳴り唯大石巨岩の落々路に横はるを見るのみ其孰れが露たり清たるやを知る可らず乃ち馬を下りて道左なる巨岩の上に登り小刀を懐に取り岩上名を題して曰く大日本帝國陸軍歩兵少佐福島安正經過此地と山嶺海面より抜くこと九千三百餘尺其身は今其最高處に立てり慨然として獨語して曰く汝亞爾泰よ地學上名天下に高しといへども今予れ汝より高きこと數尺と遂に岩を蹴りて而して下り揚然馬に上り西の方遙に露國の山河を望みて去らば露西亞 Good bye my dear Russia と叫つゝ一鞭すれば馬は既に清領蒙古の土を踏みけり抑蒙古より悉比利に向うもの其路三あり一科布多より須越克を経て直に多